西合志町文化財調査報告　第５集

迫原遺跡

（さこばる）

生坪（おつぼ）第３地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査（Ⅲ）

１９９５

熊本県西合志町教育委員会

西合志町文化財調査報告　第5集

迫原遺跡

（さこばる）

生坪（おつぼ）第3地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査（Ⅲ）

1995

熊本県西合志町教育委員会

迫原遺跡空中写真

迫原遺跡空中写真（東より）

方形周溝墓群空中写真

序

西合志町教育委員会が、平成元年度から平成３年度にかけて行いました生坪（おつぼ）・弘生（ひろお）台地の埋蔵文化財調査の報告書も今回の報告書の刊行で３冊目となり、あとは発掘の中で最大規模の八反原（なっぱんばる）遺跡を残すだけとなりました。

ここに報告する「迫原（さこばる）遺跡」は、平成３年度に発掘調査を実施した調査記録です。調査では、古墳時代前期の木棺や箱式石棺を主体部とする方形周溝墓11基と奈良・平安時代の竪穴住居跡54軒が発掘され、古墳の副葬品と考えられるガラス製の小玉や鉄製刀子それに葬送儀礼に使用したと考えられる古式土師器、奈良・平安時代の須恵器や土師器の坏、皿、高坏など多くの貴重な遺物が出土し、古墳時代の墓域や奈良・平安時代の集落が台地のほぼ全体にわたって広がっていたことが判明しました。

このことは、郷土の歴史を究明する上で貴重な資料であります。この報告書が、郷土の歴史や文化財に対する理解ならびに学術・研究上の一助となれば幸いです。

最後に、調査や報告書作成に際しましては、各方面から多くの方々にご協力やご努力を賜りましたことに対して、厚くお礼を申し上げます。

平成７年３月

西合志町教育長　本　田　　孝

例　言

1. 本書は、熊本県菊池郡西合志町大字合生（生坪・弘生台地）に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、生坪第三地区地域改善対策農業基盤整備事業に伴う事前の発掘調査で、平成元年度～3年度まで継続して実施した。
3. 調査は、西合志町役場産業振興課の委託により、熊本県教育庁文化課の協力のもと西合志町教育委員会が行い、浦田信智が担当した。
4. 本書は平成3年度に調査を実施した迫原遺跡の調査報告書である。平成元年度及び2年度分については既に刊行済みで、平成2～3年度にかけて調査を実施した八反原遺跡については今後刊行予定である。
5. 発掘調査での、遺構の実測及び遺物の取り上げは各調査員が分担して行い、写真撮影は浦田が行った。
6. 本書で使用した遺物の実測は、浦田・奈須和貴が、トレースは前川真由美・瀬丸伸子が分担して行った。
7. 本書で使用した写真の焼き付けは、浦田が行った。
8. 本書で使用した遺構配置図及び全体測量図は、熊本県土地改良事業団体連合会に委託し、作成した。
9. 本書で使用した空中写真は、（株）スカイサーベイに委託し撮影を行った。
10. 人骨の取り上げは、長崎大学医学部第二解剖学教室にお願いした。
11. 調査で出土した遺物は、西合志町教育委員会で保管している。
12. 本書の執筆は、主に浦田が行い、第1章2節は大住清昭（前社会教育課長）が行った。
13. 本書の編集は、西合志町教育委員会で行い、浦田が担当した。

凡　例

1. グリッドは、工事が広範囲にわたり実施され、調査対象地区が年度によってはかなり離れることから、各調査区のグリッドの統一と、各調査区を正確に地図に落とし込む目的のために、台地全体に国土座標（X＝－9.00・Y＝22.0）を基準に100m四方の大グリッドを設定し、更に100mの大グリッドの中に10m四方の小グリッドを設定した。大グリッドは、北から南に向かってアルファベットのA・B・C………を付け、西から東に向かって数字の1・2・3………とを付けた。
2. 小グリッドは、北西隅を基準に東へ1・2・3………と付け、10まで来たら一段下がって西側にまた戻るというように、1番から100番まで千鳥式で設定している。

（例）2－B－45

大グリッドの2－B地点で、その大グリッドの中の45番の小グリッドを表している。

3. 本書の遺構図版及び遺物写真に付した遺物の番号は、遺物実測図の図版番号並びに遺物番号と符合する。

（例）遺物番号　45－3

図版第45図の遺物番号3番の遺物

4. 本文中に使用した遺構の略記号は、以下の通りである。

SD－溝遺構

SK－土壙

本 文 目 次

第Ⅰ章　序説 …… 1

第1節　調査組織 …… 1

第2節　調査に至る経緯 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 3

第Ⅲ章　遺跡の概要と層位及び調査経過 …… 7

第1節　遺跡の概要 …… 7

第2節　遺跡の層位 …… 7

第3節　調査経過 …… 8

第Ⅳ章　調査の成果 …… 13

第1節　古墳時代の遺構と遺物 …… 13

第2節　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 46

第Ⅴ章　まとめ …… 123

挿図目次

第１図　周辺遺跡図 …… 4
第２図　土層模式図 …… 7
第３図　迫原遺跡位置図 …… 9
第４図　迫原遺跡グリッド図 …… 10
第５図　迫原遺跡遺構配置図 …… 11
第６図　１号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図 …… 13
第７図　１号方形周溝墓主体部実測図 …… 14
第８図　１号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図 …… 14
第９図　１号方形周溝墓主体部内出土ガラス玉実測図 …… 14
第10図　１号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（１） …… 15
第11図　１号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（２） …… 16
第12図　１号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（３） …… 17
第13図　２号方形周溝墓測量図 …… 19
第14図　２号方形周溝墓主体部実測図 …… 19
第15図　２号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図及び周溝土層断面図 …… 20
第16図　２号方形周溝墓主体部内出土土器実測図 …… 20
第17図　２号方形周溝墓周溝内出土土器実測図 …… 21
第18図　３号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図 …… 22
第19図　３号方形周溝墓主体部石棺及び石棺内人骨出土状態実測図 …… 23
第20図　４号・６号方形周溝墓測量図及び４号方形周溝墓土層断面図 …… 24
第21図　４号方形周溝墓主体部実測図 …… 25
第22図　５号方形周溝墓実測図 …… 25
第23図　５号方形周溝墓周溝土層断面図及び周溝内遺物出土状態実測図 …… 26
第24図　５号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図 …… 27
第25図　５号方形周溝墓墳丘上埋葬土壙実測図 …… 28
第26図　５号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（１） …… 29
第27図　５号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（２） …… 30
第28図　５号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（３） …… 31
第29図　５号方形周溝墓墳丘上土壙内出土壺実測図 …… 34
第30図　６号方形周溝墓主体部及び周溝土層断面実測図 …… 36
第31図　７号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図 …… 36
第32図　７号方形周溝墓主体部石棺及び石棺内人骨出土状態実測図 …… 37
第33図　７号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図 …… 38
第34図　７号方形周溝墓周溝内出土土器実測図 …… 39
第35図　８号・９号方形周溝墓測量図及び土層断面図・遺物出土状態実測図 …… 40
第36図　９号方形周溝墓主体部実測図 …… 41
第37図　９号方形周溝墓周溝内出土土器実測図 …… 41
第38図　10号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図 …… 43
第39図　11号方形周溝墓測量図及び周溝内遺物出土状態実測図 …… 43
第40図　11号方形周溝墓周溝内出土土器実測図 …… 44
第41図　方形周溝墓内出土鉄器実測図 …… 45
第42図　１号住居跡実測図 …… 46
第43図　２号住居跡実測図 …… 47
第44図　２号住居跡内出土土器実測図 …… 48
第45図　３号・４号・５号・６号住居跡実測図 …… 49
第46図　３号住居跡内出土土器実測図 …… 50

第47図　4号住居跡内出土土器実測図 ……… 51
第48図　5号住居跡内出土土器実測図 ……… 52
第49図　6号住居跡内出土土器実測図 ……… 54
第50図　7号住居跡実測図 …………… 55
第51図　7号住居跡内出土土器実測図 ……… 55
第52図　8号・9号住居跡実測図 …… 57
第53図　8号住居跡内出土土器実測図 ……… 58
第54図　10号・11号住居跡実測図 …… 60
第55図　10号住居跡内出土土器実測図 ……… 60
第56図　12号住居跡実測図 …………… 62
第57図　12号住居跡内出土土器実測図 ……… 63
第58図　13号・14号住居跡実測図 …… 65
第59図　13号住居跡内出土土器実測図 ……… 66
第60図　14号住居跡内出土土器実測図 ……… 66
第61図　15号・16号住居跡実測図 …… 67
第62図　15号住居跡内出土土器実測図 ……… 68
第63図　16号住居跡内出土土器実測図 ……… 69
第64図　17号・18号住居跡実測図 …… 70
第65図　19号・20号住居跡実測図 …… 71
第66図　20号住居跡内出土土器実測図 ……… 72
第67図　21号・22号・23号住居跡実測図 …… 73
第68図　21号住居跡内出土土器実測図 ……… 74
第69図　22号住居跡内出土土器実測図 ……… 75
第70図　23号住居跡内出土土器実測図 ……… 76
第71図　24号住居跡実測図 …………… 77
第72図　25号住居跡実測図 …………… 78
第73図　26号住居跡実測図 …………… 79
第74図　26号住居跡内出土土器実測図 ……… 80
第75図　27号住居跡実測図 …………… 80
第76図　27号住居跡内出土土器実測図 ……… 81
第77図　28号住居跡実測図 …………… 82
第78図　29号住居跡実測図 …………… 83
第79図　30号住居跡実測図 …………… 84
第80図　30号住居跡内出土土器実測図 ……… 85
第81図　31号住居跡実測図 …………… 86
第82図　31号住居跡内出土土器実測図 ……… 86
第83図　32号住居跡実測図 …………… 88
第84図　33号住居跡実測図 …………… 89
第85図　34号・35号住居跡実測図 ……… 91～92
第86図　36号・37号住居跡実測図 …… 93
第87図　37号住居跡内出土土器実測図 ……… 94
第88図　38号・39号住居跡実測図 …… 96
第89図　40号住居跡実測図 …………… 97
第90図　40号住居跡内出土土器実測図 ……… 98
第91図　42号住居跡実測図 …………… 99
第92図　42号住居跡内出土土器実測図 ……… 100
第93図　43号・44号住居跡実測図 …… 101
第94図　45号住居跡実測図 …………… 102
第95図　46号住居跡実測図 …………… 103
第96図　47号住居跡実測図 …………… 104
第97図　47号住居跡内出土土器実測図 ……… 105
第98図　48号住居跡実測図 …………… 106
第99図　48号住居跡内出土土器実測図 ……… 107
第100図　49号住居跡実測図 …………… 108
第101図　49号住居跡カマド内出土土器実測図 ………… 109
第102図　50号住居跡実測図 …………… 110
第103図　51号住居跡実測図 …………… 111
第104図　52号住居跡実測図 …………… 112
第105図　52号住居跡内出土土器実測図 ……… 112
第106図　53号住居跡実測図 …………… 113
第107図　53号住居跡内出土土器実測図 ……… 114

第108図　54号住居跡実測図 ……………… 115
第109図　54号住居跡内出土土器実測図 ……… 116
第110図　55号住居跡実測図 ……………… 117
第111図　55号住居跡内出土土器実測図 ……… 117
第112図　出土墨書土器実測図（1） …… 119
第113図　出土墨書土器実測図（2） …… 120
第114図　住居跡内出土鉄器実測図 …… 121

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ………………… 5
第２表　1号方形周溝墓内出土玉類観察表 … 17
第３表　1号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 ……… 18
第４表　2号方形周溝墓主体部内出土土器観察表 …… 20
第５表　2号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 ……… 21
第６表　5号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 ……… 32
第７表　5号方形周溝墓墳丘上土壙内出土土器観察表 ……… 35
第８表　7号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 ……… 40
第９表　9号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 ………… 42
第10表　11号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 ……… 44
第11表　方形周溝墓内出土鉄器観察表 ……… 45
第12表　2号住居跡内出土土器観察表 ……… 48
第13表　3号住居跡内出土土器観察表 ……… 50
第14表　4号住居跡内出土土器観察表 ……… 51
第15表　5号住居跡内出土土器観察表 ……… 53
第16表　6号住居跡内出土土器観察表 ……… 54
第17表　7号住居跡内出土土器観察表 ……… 55
第18表　8号住居跡内出土土器観察表 ……… 58
第19表　10号住居跡内出土土器観察表 ……… 61
第20表　12号住居跡内出土土器観察表 ……… 63
第21表　13号住居跡内出土土器観察表 ……… 66
第22表　14号住居跡内出土土器観察表 ……… 66
第23表　15号住居跡内出土土器観察表 ……… 68
第24表　16号住居跡内出土土器観察表 ……… 69
第25表　20号住居跡内出土土器観察表 ……… 72
第26表　21号住居跡内出土土器観察表 ……… 74
第27表　22号住居跡内出土土器観察表 ……… 75
第28表　23号住居跡内出土土器観察表 ……… 76
第29表　26号住居跡内出土土器観察表 ……… 80
第30表　27号住居跡内出土土器観察表 ……… 81
第31表　30号住居跡内出土土器観察表 ……… 85
第32表　31号住居跡内出土土器観察表 ……… 87
第33表　37号住居跡内出土土器観察表 ……… 95
第34表　40号住居跡内出土土器観察表 ……… 98
第35表　42号住居跡内出土土器観察表 ……… 100
第36表　47号住居跡内出土土器観察表 ……… 105
第37表　48号住居跡内出土土器観察表 ……… 107
第38表　49号住居跡カマド内出土土器観察表 ……… 109
第39表　52号住居跡内出土土器観察表 ……… 112
第40表　53号住居跡内出土土器観察表 ……… 114

観察表
第41表　54号住居跡内出土土器観察表 ……… 116
第42表　55号住居跡内出土土器観察表 ……… 117
第43表　出土墨書土器観察表 ………… 118
第44表　住居跡内出土鉄器観察表 …… 121

図版目次

図版1　遺跡遠景（東より）
　　方形周溝墓群空中写真（1号～4号）
　　住居跡群空中写真
　　調査風景
　　方形周溝墓群（4号～9号）
　　住居跡群

図版2　1号方形周溝墓
　　1号方形周溝墓主体部
　　1号方形周溝墓遺物出土状況（陸橋部付近）
　　1号方形周溝墓遺物出土状況
　　1号方形周溝墓主体部
　　1号方形周溝墓主体部墓壙（粘土除去後）
　　1号方形周溝墓遺物出土状況（陸橋部付近）
　　2号方形周溝墓

図版3　2号方形周溝墓主体部
　　2号方形周溝墓主体部墓壙（粘土除去後）
　　2号方形周溝墓遺物出土状況
　　2号方形周溝墓周溝土層断面
　　2号方形周溝墓主体部
　　2号方形周溝墓主体部石棺材出土状況
　　2号方形周溝墓遺物出土状況
　　3号方形周溝墓

図版4　3号方形周溝墓主体部石棺検出状況
　　3号方形周溝墓主体部人骨出土状況
　　3号方形周溝墓主体部
　　3号方形周溝墓主体部粘土枕
　　3号方形周溝墓主体部石棺検出状況（粘土除去後）
　　3号方形周溝墓主体部
　　3号方形周溝墓主体部墓壙（石棺除去後）
　　3号方形周溝墓遺物出土状況（陸橋部付近）

図版5　4号方形周溝墓
　　4号方形周溝墓主体部
　　5号方形周溝墓
　　5号方形周溝墓遺物出土状況
　　4号方形周溝墓主体部
　　4号方形周溝墓主体部墓壙
　　5号方形周溝墓遺物出土状況
　　5号方形周溝墓遺物出土状況

図版6　5号方形周溝墓墳丘上壺棺出土状況
　　6号方形周溝墓
　　6号方形周溝墓主体部
　　6号方形周溝墓主体部内鉄器出土状況
　　5号方形周溝墓墳丘上壺棺出土状況
　　6号方形周溝墓主体部
　　6号方形周溝墓主体部墓壙
　　7号方形周溝墓

図版7　7号方形周溝墓主体部石棺検出状況
　　7号方形周溝墓主体部石棺内人骨出土状況
　　7号方形周溝墓主体部石棺内鉄器出土状況
　　7号方形周溝墓主体部石棺内東側粘土枕
　　7号方形周溝墓主体部石棺（粘土除去後）
　　7号方形周溝墓主体部石棺内人骨出土状況
　　7号方形周溝墓主体部石棺内西側粘土枕
　　7号方形周溝墓主体部石棺

図版8　7号方形周溝墓主体部石棺
7号方形周溝墓主体部墓壙（石棺除去後）
7号方形周溝墓遺物出土状況
9号方形周溝墓
7号方形周溝墓主体部石棺（粘土除去後）
7号方形周溝墓遺物出土状況
8号方形周溝墓
9号方形周溝墓主体部

図版9　9号方形周溝墓主体部
10号方形周溝墓
11号方形周溝墓遺物出土状況
2号住居跡
9号方形墓主体部墓壙（粘土除去後）
11号方形周溝墓
1号住居跡
4号住居内遺物出土状況

図版10　4号住居跡内遺物出土状況
7号住居跡
12号住居跡内遺物出土状況
12号住居跡
4号住居跡
8号・9号住居跡
12号住居跡内遺物出土状況
8号～18号住居跡切り合い状況

図版11　15号・16号住居跡
20号住居跡カマド付近遺物出土状況
23号住居跡
29号・30号・31号住居跡
15号住居跡カマド
20号住居跡
25号・26号・27号・28号住居跡
32号住居跡

図版12　32号住居跡
39号住居跡
48号住居跡
50号住居跡
34号住居跡
46号住居跡
49号住居跡
53号住居跡

第Ⅰ章　序　　説

第1節　　調査の組織

発掘調査（平成3年度）

調査主体　西合志町教育委員会

調査総括　高村　元三（教育長）

調査責任者　伊藤　聖剛（社会教育課長）・大住　清昭（前社会教育課長）

調査事務　安武　俊朗（社会教育課文化係長）・三苫　洋子（社会教育課参事）

調査主査　浦田　信智（社会教育課技師）

調査員　丸山　武水・奈須　和貴・福永　幸博・山隈　　誠（県教育庁文化課嘱託）

調査補助員　前川真由美・近藤　朋之・岡本　勇人・横田　義八・松永　竜二

兼野　智久

専門調査員　長崎大学医学部第二解剖学教室　助教授　松下　孝幸・助手　分部　哲秋

助手　佐伯　和信・助手　小山田常一

調査指導　熊本県教育庁文化課

調査協力

町文化財専門委員　後藤　文明・藤本　　泰・加茂　尚生・平田　建一

町役場産業振興課・熊本県農政部・熊本県菊池土木事務所

発掘調査

本田　哲郎・池田　紀節・松岡　繁喜・池田　賢哲・池田　　掌・本田　照代

池田　洋子・宮本ツナグ・松岡　景隆・松岡ヤスエ・松川カナエ・野口キン子

宮田アヤメ・松岡美智子・松岡　政次・松川　　斉・池田　盛幸・松川　ミヤ

池田トメ子・上田ミツヨ・池田　光江・野口アツ子・本田マチエ・宮本シオリ

堀田ノブエ・上村ノブヨ・生田　幸子・森本やよい・岡田　菊代・石田　紀子

片山ノリ子・本山チエ子・矢野トシエ・村上　照美・池田　明子・緒方　敏信

松岡　美咲・中川ヨシノ・生田フサエ

報告書作成（平成6年度）

主　体　西合志町教育委員会

総　括　本田　　幸（教育長）

責任者　深水　康裕（図書館長）

事　務　安武　俊朗（図書館文化係長）・東　　舞（図書館司書）

主　査　　浦田　信智（図書館文化係技師）

整理作業

宮田　京子・緒方　敦子・正泉寺直美・上原　和子・宮本　繁子・大山　英子

村上　照美・前川真由美

調査にあたり、地元の区長さんを始め地権者の方々、役場の関係各位、その他多くの方に多大な協力を得ました。本報告書を刊行するにあたり、ここに記して深く感謝致します。

第２節　　調査に至る経緯

西合志町では、農業の土地生産性向上のため土地基盤整備を積極的に推進してきたが、この地区は未整備で地区内道路も狭く、大型機械の利用も遅れていた。町では、この地に地域改善対策農業基盤整備事業を実施することにより、区画整理や道路及び用排水路を完備し、大型機械の導入を図り、労力の節減や土地生産性の向上に努め、農業所得の安定と近代的農業経営の確立を計画した。

この計画地域（約48.2ha）内及びその周辺には「周知の埋蔵文化財包蔵地」として生坪塚山古墳、生坪古墳、生坪石立遺跡、八反田遺跡、弘生原遺跡、八反畑遺跡、道原ハヤマ古墳が登録されていた。町は、この事業が「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」に基づくものであり、平成３年３月31日までの期限付き事業ということで、大規模な埋蔵文化財の散在には苦悩の極みをみた。しかし、事業の趣旨を深く思うとき、事業の着手と文化財の発掘調査は至上命題ということで、地元はもとより、県の文化課、農地管理課、県菊池事務所等関係者の協力体制が必要となった。具体的には、地区内の踏査を行い、必要な部分の試掘調査をして、調査対象面積を把握し、地元の協力を求め、工事での工法の工夫、発掘調査員の確保、県の文化課の支援等々により、平成元年８月より３ヶ年の予定で発掘調査を開始した。

（大住）

第II章　遺跡の位置及び環境

西合志町は、阿蘇外輪山に発する白川などの河川より発達した沖積平野である熊本平野のほぼ中心部に位置する熊本市のすぐ北部に所在している。行政区では、菊池郡に属し、北側を泗水町、東側を合志町と菊陽町、南側と西側を熊本市と植木町にそれぞれ隣接している。当町は、海抜標高70m前後の平坦な台地上にあり、東西約4km、南北約8kmで北側が広がる逆三角形を呈し、面積は24.28km²、人口約25,000人である。

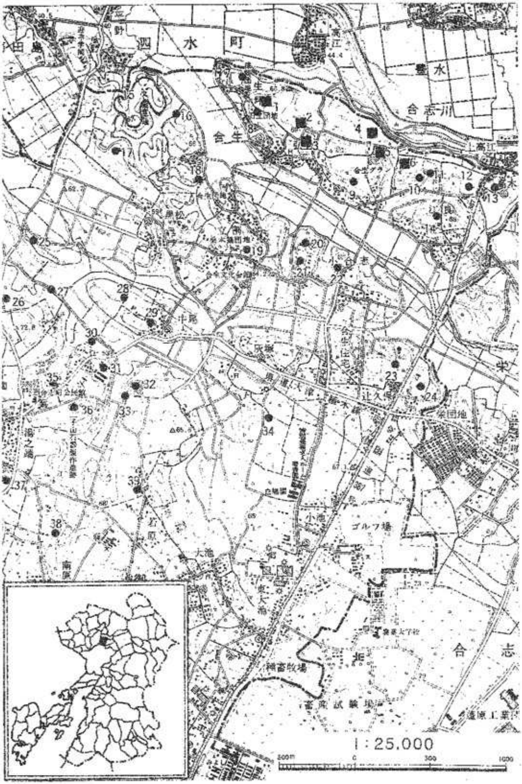
町の北部地域には、菊池川の支流である合志川と塩浸川・中尾川があり、この三本の川を中心に水田地帯が広がり、米・たばこ・すいか等を中心とした農業が盛んに営まれ産業の中心をなしている。町の南部地域は、熊本市と隣接しているため熊本市のベッドタウンとして住宅が密集し人口増加が著しいのが特徴である。

今回調査した遺跡は、町北部で泗水町との町境に流れる合志川の左岸台地にあり西合志町大字合生字追原に位置する。この台地は、海抜70m前後で水田面及び河川との比高差は約20～25mを測り、ほぼ平坦な台地が隣の泗水町まで続く。台地上には、縄文時代から中世にかけての古代の遺跡が多く点在しており、ほぼ台地全体が遺跡であると言っても過言ではない。

西合志町には、多くの遺跡があり現在約80カ所確認されている。遺跡の中で、最古の時期は縄文時代早期の遺跡でそれより古い旧石器時代に属する遺跡・遺物は、現在のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡は、古い時期では早期に属し遺跡の西側の上生地区に位置する上生上の原遺跡がある。上生上の原遺跡は、県文化課により昭和63年から平成2年にかけて継続的に調査が行われ、押型文土器を伴う集石群が多数検出されている。さらに、遺跡の南で野々島地区に位置し、後期末の御領期に属し国指定史跡に指定されている二子山打製石器製作遺跡がある。二子山打製石器製作遺跡は、昭和40年から42年にかけて3回の調査が行われ、金峰山系の玄武岩質安山岩の母岩露頭の確認と、その周辺から安山岩製打製石斧の製品と未製品が多数出土し、また、菊池地方を中心に二子山製の石斧が広範囲に渡り分布していることも判明し、縄文時代の交易範囲を知ることのできる全国でも希な打製石斧の製作跡として、昭和47年に国指定史跡として指定を受けている。他にも、辻久保遺跡や中尾遺跡、枇杷田遺跡などの包含地がある。

弥生時代の遺跡は、著名な遺跡として高木原遺跡が上げられる。高木原遺跡は、同台地上で当遺跡の東側に位置しており、故坂本経堯氏により発見され弥生時代後期から平安時代にかけての遺物が採集されている。また、同時期の竪穴住居跡も調査されている。他には、昭和55年に田添夏喜氏により調査され、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された小合志原遺跡や包含地



第1図　周辺遺跡図

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	概要
1	石立遺跡	弥生～古墳	H2年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
2	八反田C遺跡	弥生～古墳	H2年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
3	八反田A・B遺跡	弥生～平安	H元年調査　集落跡　方形周溝墓
4	八反原遺跡	弥生～平安	H2～3年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
5	八反畑遺跡	弥生～平安	H元年調査　集落跡
6	迫原遺跡	古墳～平安	H3年調査　集落跡　方形周溝墓
7	生坪塚山古墳	古墳	円墳
8	石立家形石棺	古墳	S22年発見調査　蓋に並列三角文の線刻　人骨及び[illegible]が出土
9	弘生城跡	中世	
10	迫原石棺	古墳	S58年調査　勾玉・ガラス玉・鉄刀等出土
11	迫原ハヤマ古墳	古墳	消滅　円墳　主体部は箱式石棺
12	迫原長塚古墳	古墳	消滅　箱式石棺
13	高木原遺跡	弥生～古墳	集落跡
14	江良遺跡	弥生～古墳	包含地
15	黒松古墳群	古墳	ヌレ観音古墳など円墳6基
16	塚口横穴群	古墳	S46年調査　横穴墓3基　金環・鉄製品・土器等副葬品多数出土
17	黒松荻の迫遺跡	弥生	包含地　甕棺など
18	荻の迫横穴群	古墳	横穴墓
19	立割横穴群	古墳	横穴墓
20	玉蔵寺跡		寺院跡
21	合志郡家跡推定地	奈良～平安	
22	小合志古墳	古墳	消滅　円墳　横穴式石室　鉄刀・金環等副葬品出土
23	小合志原遺跡	縄文～弥生	S55年調査　集落跡
24	辻久保遺跡	縄文	包含地
25	権塚古墳	古墳	円墳
26	永田石棺	古墳	箱式石棺
27	沖田遺跡	古墳	H2年調査　集落跡
28	黒松西原遺跡	縄文	包含地
29	中尾遺跡	縄文～古墳	包含地
30	[illegible]		包含地
31	八反田遺跡	縄文～弥生	包含地
32	枇杷田遺跡	縄文	包含地　押型文土器
33	中原支石墓	弥生	
34	笹山遺跡	縄文	包含地
35	永田支石墓	弥生	1基
36	二子山石器製作遺跡	縄文	県指定　打製石器製作跡　円墳2基
37	花園遺跡		包含地
38	野田原遺跡		包含地
39	若原石棺遺跡	縄文～古墳	箱式石棺　縄文包含地

文献一覧
1.　「全国遺跡地図　熊本県」　文化庁文化財保護部　1981年
2.　「小合志原遺跡」　日本電信電話公社九州電気通信局　1981年
3.　「迫原箱式石棺」　西合志町教育委員会　1983年
4.　「菊池の文化財」　田中一義　菊池の文化財保存会　1965年

である江良遺跡、それに二子山石器製作跡の近くには永田支石墓や中原支石墓等がある。

古墳時代は、集落跡として古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居跡が検出された沖田遺跡と、同じく古墳時代の竪穴住居跡が検出された上生上の原遺跡が上げられる。沖田遺跡は、県文化課により平成2年に調査が行われ、弥生時代後期の住居跡の特徴であるベッド状の遺構が残る古墳時代前期の住居跡が3軒検出されている。古墳は、町北部地域に集中しており、南部地域には現在のところ全く確認されていない。当町の代表的な古墳として、当遺跡の西側で合志川の左岸台地上にある黒松古墳群がある。黒松古墳群は、6基の大小円墳により構成されるが、道路を挟んだ西側にも泗水町に属するゴッテサン古墳など3基の円墳があり、同じ台地上に作られていることから黒松古墳群に属する古墳と考えられる。この古墳群の中でも、ヌレ観音古墳（1号）は主墳と考えられ、直径約40m、高さ約7mと熊本県内でも最大級の円墳として知られている。この古墳は、未調査のため内部主体などは不明である。またヌレ観音古墳の東約30mに所在する2号・3号墳は直径が10m前後、高さが1mの小円墳で、これも未調査であるが内部主体が木棺または箱式石棺と考えられる。このような古墳が、墳丘を築造当時に近い形で残しているのは珍しく貴重な古墳である。尚、黒松古墳群が所在する台地の北側崖面には平野横穴群や塚口横穴群、荻迫横穴群などの横穴墓が多数作られている。この中で、塚口横穴群は昭和46年に調査され、金環や鉄剣などの鉄製品、須恵器が多量に出土している。当遺跡が位置する台地上にも多くの古墳や石棺がある。まず、台地の西側先端部には直径約30m、高さ約4mの円墳（前方後円墳との説もある）である生坪塚山古墳があり、内部主体は不明だが墳頂部に立ててある石材が、この古墳の石棺の蓋石と言われている。また、少女の人骨と津麻櫛が出土し、凝灰岩製の家形石棺蓋石に連続三角文を線刻した装飾石棺である石立家形石棺（姫塚とも呼ばれている）もある。さらに、当遺跡の東側には、昭和56年に調査が行われ、箱式石棺の中から勾玉や丸玉などの装飾品、刀や鉾それに鹿角装刀子・鉄鏃などの鉄器類が豊富に出土した迫原石棺、さらに東にはハヤマ塚古墳などが多く点在している。

奈良・平安時代は、当遺跡の周辺台地上に点在する遺跡からはだいたい土器が混在して採集されていることから、周辺台地上にも大規模な集落が営まれていたと考えて良い。

中世の遺跡は、同台地上で南側に、記録がないことから詳細は不明であるが、堀が残る弘生城跡がある。さらに、町の南部地域で須屋地区には須屋市蔵の居館跡とされ、土塁や堀が一部残る須屋城跡がある。須屋城跡は、全国的に珍しい平城である。

第Ⅲ章　遺跡の概要と層位及び調査経過

第1節　　遺跡の概要

迫原遺跡は、西合志町の北部で泗水町との町境に流れる合志川の左岸台地上にあり、平成元年度に調査を実施した八反畑遺跡や、平成2～3年にかけて調査を実施した八反原遺跡から迫地を挟み、直線距離で約100～150m東側で、農業基盤整備事業の全工事対象区域の一番東側に位置している。遺跡は、最終年度である平成3年度の工事対象区域にあり、発掘調査はこの迫原遺跡で最後となる。調査グリッドでは、大グリッドの7－L・M・Nグリッドと8－L・M・Nグリッドにまたがって位置しており、調査面積は約7,000㎡である。遺構は、標高66m～67mの面に検出されており、水田面との比高差は約27mを測る。

遺跡は、古墳時代から奈良・平安時代にかけてのもので、縄文時代や弥生時代の遺構や遺物は全く検出されなかった。検出された遺構は、古墳時代前期から中期にかけての方形周溝墓11基、それに奈良・平安時代の竪穴住居跡54軒である。

第2節　　遺跡の層位

層位は、今回の調査区も平成元年度や2年度調査区と同台地上に位置しており、基本的な遺跡の層序は昨年と同様の火山灰土層で、アカホヤやクロボクは耕作により削平され消滅している。このことから、遺構確認面は昨年と同じく第Ⅱ層の明褐色粘質土層（クロニガ）で行った。

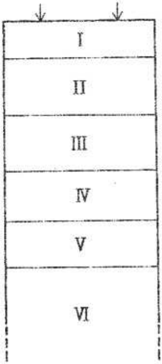
第Ⅰ層　耕作土　（厚さ20～30cm）

第Ⅱ層　明褐色土（クロニガ）（厚さ30～40cm）粘性を帯び、遺構確認面である。

第Ⅲ層　褐色土　（厚さ30～40cm）粘性を帯び、中には同色のブロック状の塊が少量含まれる。

第Ⅳ層　明黒色土（ニガシロ）（厚さ20～40cm）粘性を帯び、中には同色のブロック状の塊が多量に含まれる。

第Ⅴ層　黄色土（ニガシロ）（厚さ20～35cm）粘性を帯び、



第2図　土層模式図

中には同色のブロック状の塊が多量に含まれる。

第VI層　赤黄色土　粘性が強い。
（ローム）

第3節　調査経過

追原遺跡の調査は、前年度の11月より行っていた八反原遺跡の調査が天候不順等のために若干予定より作業の遅れが出たことや、調査地にたばこの作付けがなされていたことから収穫が終わる7月より実施することになった。

以下、調査日誌に従い経過の説明を行うことにする。

7月22日　本日より機械（ユンボ・ブルトーザ各1台）を入れ、表土剥ぎを開始する。

7月23日　表土剥ぎと平行して遺構検出作業を開始する。

7月27日　方形周溝墓と竪穴住居跡が検出され始める。方形周溝墓は、主体部まで残っているものが多く、残存状態は良さそうである。竪穴住居跡は、残存状態はかなり悪い。

7月30日　町中央コミュニティー現場見学（20名）

7月31日　現在の所、遺構は古墳時代と奈良・平安時代の時期に限られ、縄文時代や弥生時代の遺構は全く確認出来ない。竪穴住居跡は、切り合いが非常に多い。

8月1日　方形周溝墓の調査を開始する。

8月2日　方形周溝墓は、本日まで10基検出されており、東側の方形周溝墓より番号を付ける。現在、3基の方形周溝墓に主体部が残っているのを確認した。3号方形周溝墓の主体部は、安山岩製の箱式石棺で全体に黄色粘土をかぶせその後に赤色顔料を蒔いている。盗掘を受けた痕跡は認められず、人骨や副葬品の出土が期待される。

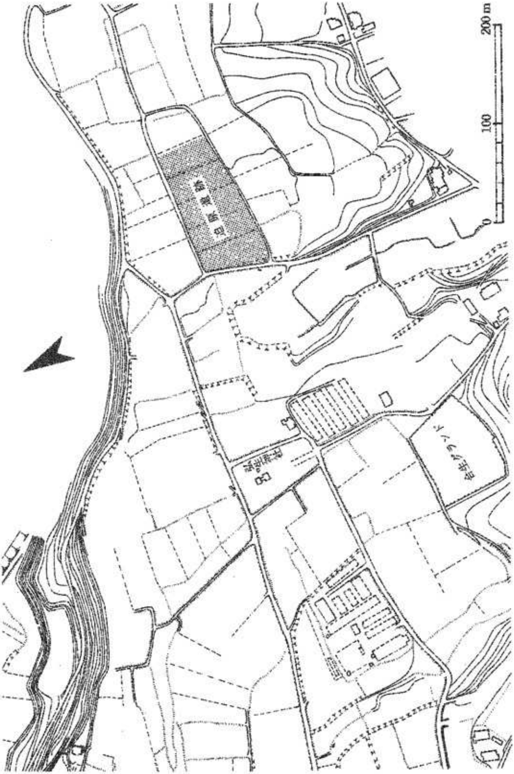
8月6日　松田町長視察。3号方形周溝墓主体部蓋石の実測が終了したので、蓋石の取り外しを行う。内部よりほぼ完全な人骨が1体出土。内部に、若干土砂が入り込んでいるため、副葬品があるかどうかは不明。表土剥ぎ作業は、本日にて終了。

8月7日　6号方形周溝墓の主体部は、石材片が全く認められないことや残っている粘土が外側に弯曲していることから、割竹形木棺ではないかと考えられる。人骨や副葬品の出土は無い。

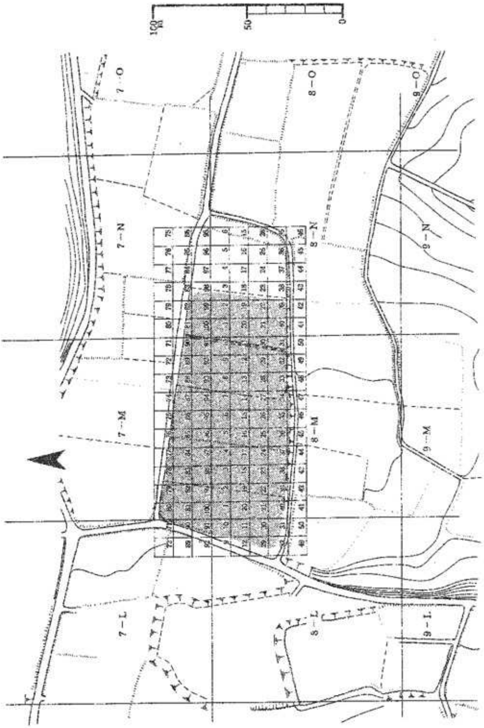
8月9日　遺構の検出作業をほぼ終了する。検出遺構は、古墳時代の方形周溝墓11基と奈良・平安時代と考えられる竪穴住居跡54軒である。

8月10日　方形周溝墓の調査と平行して、竪穴住居跡の調査を開始する。

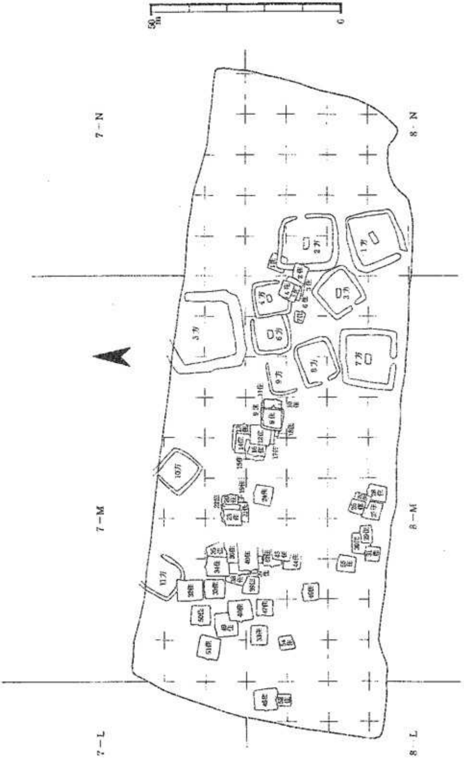
8月13日　長崎大学医学部第二解剖学教室の松下助教授にお願いし、3号方形周溝墓出土



第３図　調査遺跡位置図



第４図　迫原遺跡グリッド図



第５図　迫原遺跡遺構配置図

人骨の取り上げを行う。人骨は、壮年男子であろうという所見である。

8月14日　RKKテレビ・RKKラジオ現場取材。

8月19日　竪穴住居跡は、複雑に切り合っており、残存状態が非常に悪い。個別の確認が困難である。

8月21日　方形周溝墓や竪穴住居跡の発掘、それに写真撮影が終了した遺構の実測作業を平行して進める。

8月26日　熊本市花陵中学校の生徒17名現場見学。

8月29日　2号方形周溝墓の主体部は、安山岩製の箱式石棺であることが判明。破壊が著しく石材片が出土しただけである。

8月31日　7号方形周溝墓主体部より、新たに箱式石棺を検出。盗掘された様子はなく、人骨や副葬品の出土が期待される。

9月2日　本日より調査員1名を増員（県教育庁文化課より派遣）

7号方形周溝墓主体部の実測を行い、蓋石を除去する。石棺内には、土砂が流入しており、人骨の残存状態は良くない。人骨は、複数埋葬されているようである。

9月4日　長崎大学に依頼し、人骨の実測と取り上げ作業を行う。

9月6日　人吉市教育委員会現場視察（9名）

町教職員初任者研修（13名）

9月7日　9号方形周溝墓主体部は、調査の結果残存している粘土の検出状態から木棺埋葬の可能性が高い。

9月11日　奈良・平安期の竪穴住居跡の調査、実測、写真撮影をすべて終了する。

9月14日　方形周溝墓の測量を開始する。

9月17日　遺跡の全体測量を開始する。

9月20日　㈱スカイサーベイに依頼し、遺跡全体の空中写真撮影を行う。

9月24日　全体測量や写真撮影などの作業を終了する。

夕方、役場産業振興課へ発掘作業が終了したことを報告し、工事業者への引き渡しを行う。

第Ⅳ章　調査の成果

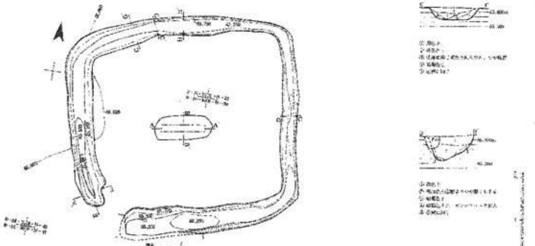
第1節　古墳時代の遺構と遺物

1号方形周溝墓

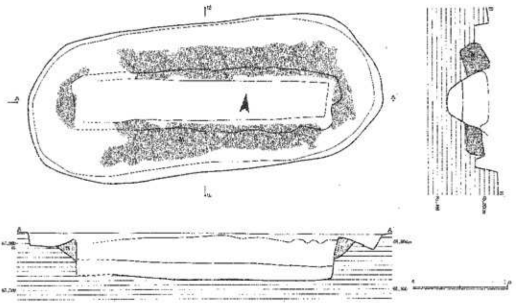
遺構（第6図～第8図）　出土遺物（第9図～第12図・第2表～第3表）

遺構は、調査区の一番東側に位置し、調査区の8－N－21・22・39・40グリッドにかけて検出され、2号・3号方形周溝墓がすぐ北側に接している。遺構は、方形に巡る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位はN－80°15′－Eを取り築造されており、周溝の南西コーナー部に幅1.05mの陸橋部が設けられている。全体規模は、東西12.3mの南北11.0mで、周溝を含めた規模は東西14.7mの南北13.9mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.60～1.70m、深さ0.25～0.65mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。

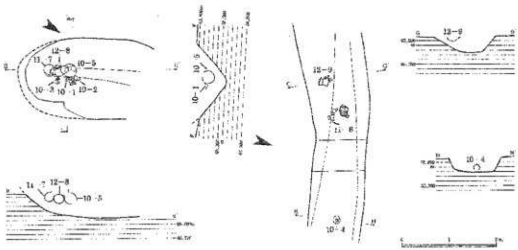
主体部は、ほぼ中央に主軸をN－80°15′－Eに取った楕円形の墓壙が検出された。墓壙は、二段に掘られており長さ3.78m、幅1.18m、深さ0.13mの墓壙を掘った後、さらに棺の規模に合わせて棺を納める為の長さ2.79m、幅0.64m、深さ0.37mの長方形の墓壙を掘り込んでいる。主体部内に納められた棺は、棺を納める為の墓壙の幅が狭く、また断面が「U」字形を呈する



第6図　1号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図



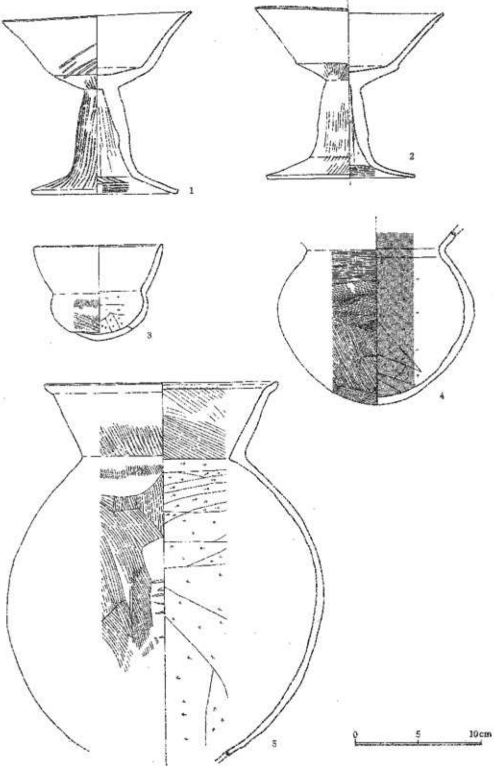
第７図　１号方形周溝墓主体部実測図



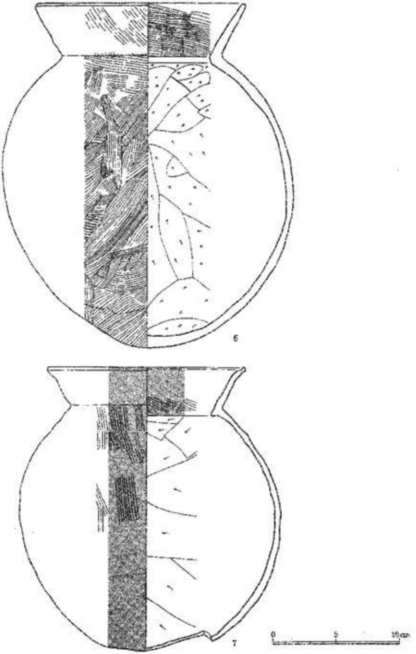
第８図　１号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図

こと、それに石棺材片が全く認められないことなどから、石棺ではなく木棺を納めたものと考えられる。木棺の種類は、墓壙の断面形から割竹形木棺の可能性が高く、木棺の規模は墓壙の規模とほぼ同じで、長さ2.70m前後、幅0.40m前後であろうと考えている。主体部内からは、人骨の出土は無いが、埋土内よりコバルトブルーを呈したガラス小玉が２点出土している。出土したガラス小玉は、ふるいに

第９図　１号方形周溝墓主体部内出土ガラス玉実測図



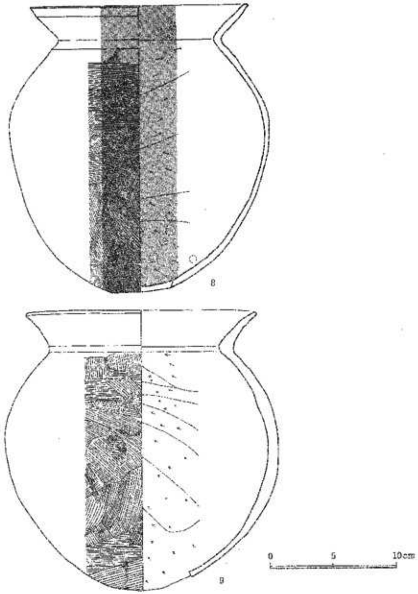
第10図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（1）



第11図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（2）

かけての検出であり、出土地点等の詳細は不明である。

周溝内からは、遺物が出土している。遺物は、南西コーナー部陸橋の北側周溝内より土師器の高杯や小型丸底壺、壺、甕などの完形品やほぼ完形に近いものが周溝底より20cm程浮いた状態で出土し、また北側周溝内のほぼ中央部より土師器の甕等の破砕したものが周溝底より10cm



第12図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（3）

第2表　1号方形周溝墓主体部内出土玉類観察表

図版番号	出土遺構	種類	法量（cm）		特徴	備考
9-1	1号方形周溝墓主体部	ガラス小玉	直径 長さ 穴径	0.4 0.4 0.15	色はコバルトブルー	主体部床面より出土
9-2	1号方形周溝墓主体部	ガラス小玉	直径 長さ 穴径	0.35 0.4 0.15	色はコバルトブルー	主体部床面より出土

第３表　１号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
10－1	高杯	口径 15.0 器高 14.6 底径 11.7	杯部は深く内側に湾曲した後口縁部が外反しながら立ち上がる。脚部は筒状で中央付近がやや膨らむ。裾部はさらに大きく外側に開く。端部はナデで平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	淡黄褐色	良好	杯部 ハケ目の後ナデ 脚部 ハケ目	杯部 ハケ目の後ナデ 脚部 ヘラ削り	○土師器 ○ほぼ完存
10－2	高杯	口径 15.0 器高 13.6 底径 11.5	杯部は深く内側に湾曲した後口縁部がやや外反気味に立ち上がる。脚部は筒状で中央付近がやや膨らみ裾部はさらに大きく外側に開く、端部は平坦である。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	杯部 ナデ 脚部 ハケ目	杯部 ナデ 脚部 ヘラ削り	○土師器 ○完形品
10－3	小型丸底壺	口径 10.3 胴部径 7.8 器高 7.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が内弯しながら高く立ち上がり端部に至る。端部は尖り気味。胴部は小さく胴部径も口径より小さい。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	淡赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○底部穿孔
10－4	小型壺	現存高 13.8 胴部径 15.6	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外側に開く。胴部の最大径は中位よりやや上にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布 ○口縁部欠失
10－5	壺	口径 18.6 胴部径 25.2 現存高 26.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部は丸い。胴部の最大径は中位付近にある。	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
11－6	壺	口径 15.6 胴部径 23.0 器高 27.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデで平坦にしている。胴部の最大径は中位より下にある。球形に近い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
11－7	壺	口径 15.7 胴部径 20.5 器高 22.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部は丸い。胴部の最大径はほぼ中位にある。	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面及び内面口縁部に赤色顔料塗布 ○底部穿孔
12－8	壺	口径 17.3 胴部径 20.6 器高 23.0	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデで平坦にしている。胴部の最大径は中位より上にある。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多 白色粒 少 小石 多	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部穿孔 ○完形品
12－9	壺	口径 18.4 胴部径 21.8 器高 22.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデで平坦にしている。胴部の最大径は中位にあり、ほぼ球形に近い。	砂粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○底部穿孔

稍浮いた状態で出土している。いずれの土師器も、いわゆる古式土師器と呼ばれるものである。

２号方形周溝墓

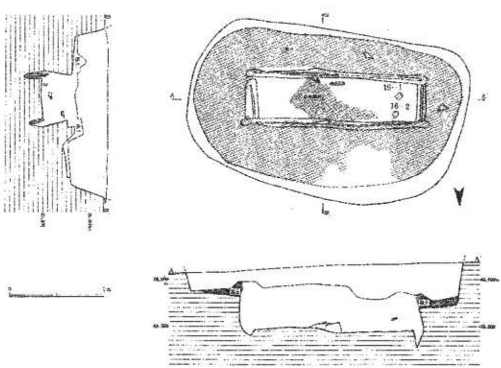
遺構（第13図～第15図）　出土遺物（第16図～第17図・第４表～第５表）

遺構は、調査区の一番東側に位置し、８－Ｎ－１・２・19・20・21・22グリッドにかけて検出され、１号方形周溝墓が南側に、３号・４号方形周溝墓がすぐ西側に接している。遺構は、方形に巡る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、Ｎ－81°00′－Ｅを取り築造されており、東側周溝の北東コーナー寄りに幅1.62mの陸橋部が設けられている。全体規模は、東西11.1mの南北12.6mで、周溝を含めた規模は東西13.8mの

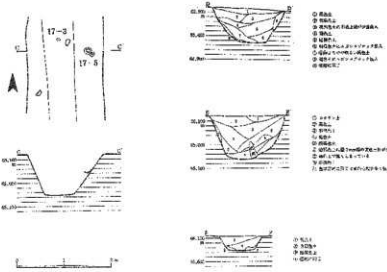
南北15.2mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.80～1.90m、深さ0.30～0.92mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。

主体部は、ほぼ中央に主軸をN－81° 00′－Eに取った隅丸長方形の墓壙が検出された。墓壙は、二段に掘られており長さ2.91m、幅1.77m、深さ0.70mの墓壙を掘った後、さらに棺の規模に合わせて棺を納める為の長さ2.79m、幅0.64m、深さ0.46mの長方形の墓壙を掘り込んでいる。主体部内に納められた棺は、安山岩の棺材の一部が残っていたことや、石材を埋め込む為の溝が検出されたことから、安山岩製の箱式石棺と考えられる。石棺の規模は、石棺の埋め込み溝から長さ1.77m前後、幅0.45m前後、深さ0.33mであろうと推定される。石棺の床は、中央付近に赤色顔料が残っていたことから、地山に直接赤色顔料を蒔いたものと

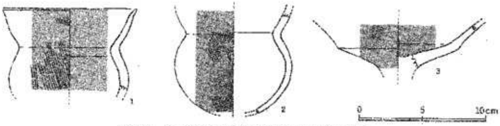
第13図　2号方形周溝墓測量図



第14図　2号方形周溝墓主体部実測図



第15図　2号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図及び周溝土層断面図



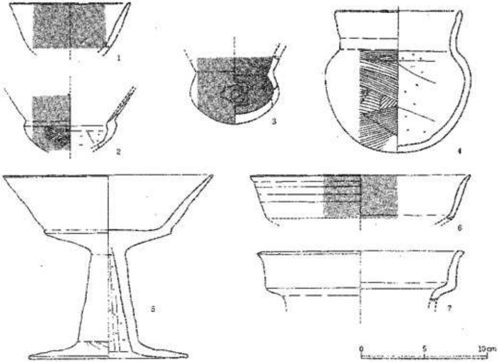
第16図　2号方形周溝墓主体部内出土土器実測図

第4表　2号方形周溝墓主体部内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
16-1	小型丸底壺	口径 10.5 現存高 6.5 胴部径 9.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が内彎しながら立ち上がり端部付近でさらに外反する。胴部は広がる。胴部の最大径より口径が大きい。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 普 角セン石 少	赤褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
16-2	小型丸底壺	現存高 7.9 胴部径 9.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外側に開く。胴部の最大径は中位よりやや上にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
16-3	高杯	現存高 3.5	坏部が内側に屈曲した後、口縁部が外反しながら大きく外側に開く。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少 石粒 少	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

考えられる。主体部内からは、人骨の出土は無いが、埋土内より古式土師器の小型丸底壺や高杯が出土している。しかし、破片であることや石棺材が抜き取られていることから、この土器が直接の副葬品であるかどうかは判断出来ない。

周溝内からは、遺物が出土している。遺物は、西側周溝内より土師器の高杯や小型丸底壺、小型壺、甕、などが周溝底より20〜40cm程浮いた状態で出土している。いずれの土師器も、



第17図　2号方形周溝墓周溝内出土土器実測図

第5表　2号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

図版番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
17-1	坏	口径 9.6 現存高 3.7	体部は直線的に外側に開きながら立ち上がり端部に至る。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	黄褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
17-2	小型丸底壺	現存高 4.4 胴部径 7.3	頸部で屈曲した後、口縁部が直線的に大きく外側に開きながら立ち上がる。胴部の最大径は底部近くにあり浅い。胴部径より口径が大きく、胴部より口縁部の高さが高い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 不明 胴部 ナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
17-3	小型丸底壺	現存高 5.4 胴部径 7.0	頸部で屈曲した後、口縁部が外側に開きながら立ち上がる。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、胴部径より口径が大きい。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	黄褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○胴部穿孔
17-4	小型壺	口径 10.0 器高 11.3 胴部径 11.6	頸部で屈曲した後、口縁部が直線的に短かく立ち上がる。胴部の最大径は底部近くにある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
17-5	高坏	口径 16.7 器高 14.6 底径 12.6	坏部は屈曲した後、口縁部が直線的に大きく外側に開く。脚部は筒状で裾部近くで膨らむ。裾部は外側に大きく水平近くに開く。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡赤褐色	良好	坏部 ナデ 脚部 ナデ	坏部 ナデ 脚部 ヘラ削りの後ナデ	○土師器
17-6	壺	口径 17.4 現存高 3.4	複合口縁壺の口縁部片では稜部が内側に屈曲した後直線的にやや外側に開きながら立ち上がり端部近くで外反する。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 少 白色粒 多	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○胴部欠失

図版番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
17-7	壺	口径 16.4 現存高 4.0	複合口縁壺の口縁部片で口縁部が内側に屈曲した後さらに外反しながら直口気味に立ち上がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○胴部欠失

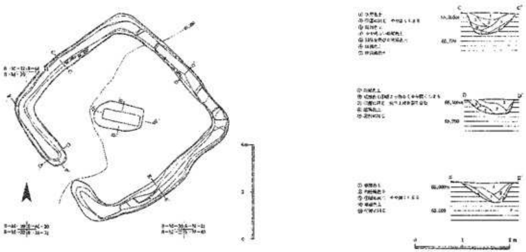
いわゆる古式土師器と呼ばれるものである。

3号方形周溝墓

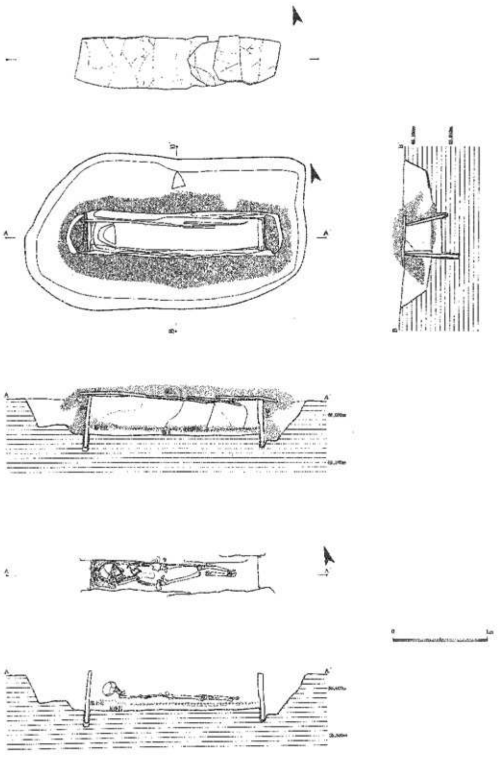
遺構（第18図〜第19図）

遺構は、調査区の8－M－11・29・30、8－N－20・21グリッドにかけて検出され、1号・2号方形周溝墓がすぐ東側に接している。遺構は、方形に巡る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－48° 30′－Eを取り築造されており、南側周溝の中央から南側寄りに幅1.32mの陸橋部が設けられている。全体規模は、東西8.40mの南北8.82mで、周溝を含めた規模は東西10.5mの南北11.2mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.85〜1.20m、深さ0.52〜0.71mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。

主体部は、ほぼ中央に主軸をN－78° 00′－Wに取った不整長方形の墓壙が検出された。墓壙の規模は、長さ2.98m、幅1.67m、深さ0.32mで、墓壙を掘った後さらに棺を埋め込むための溝を掘っている。主体部内に納められた棺は、安山岩割り石の箱式石棺で規模は長さ1.86m、幅0.30m、深さ0.35mを測り、蓋は西側より持ち送りで3枚かぶせている。石棺全体は厚さ10cm程の黄色粘土で覆われていた。石棺内の西側小口部には、黄色粘土で作られた枕が確認され、粘土枕に頭部を乗せた人骨が1体検出された。人骨は、石棺内に土砂が全く流入していな



第18図　3号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図



第19図　3号方形周溝墓主体部石棺及び石棺内人骨出土状態実測図

かったことから残存状態は良好で、伸展葬で埋葬されており、脊椎骨や骨盤等の一部が無い他はその殆どが検出された。人骨は、壮年の男性で身長は150cm台の後半という所見であった。人骨の他には、副葬品等の遺物は全く認められなかった。床は、地山整形面に直径5cm程の玉砂利を一面に敷いた後、黄色粘土を敷きその上に赤色顔料を蒔いている。また、石棺の内面全体にも赤色顔料が全面に塗布されている。

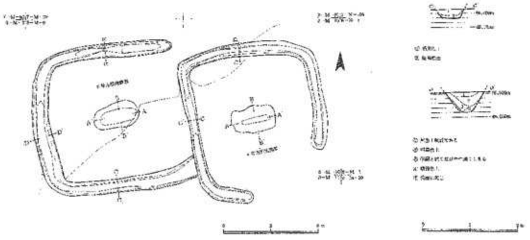
周溝内からは、遺物は、全く出土しなかった。

4号方形周溝墓

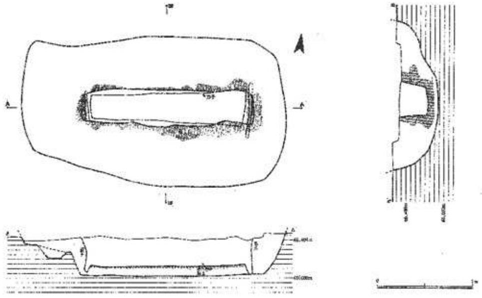
遺構（第20図～第21図）　出土遺物（第41図1・第11表1）

遺構は、調査区の8－M－9・10・11グリッドにかけて検出され、2号方形周溝墓がすぐ東側に3号方形周溝墓が南側に5号方形周溝墓が北側に接している。遺構は、6号方形周溝墓と切り合っており、6号方形周溝墓の東側周溝が切れていることから、当方形周溝墓が新しく築造されたものと考えられるが、6号方形周溝墓と周溝の一部を共有していた可能性も否定出来ない。しかし、現地調査ではこの点に付いて確認は出来ず不明である。遺構は、方形に巡る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－08° 30′－Wを取り築造されており、陸橋部は検出された周溝から確認できなかったが南側周溝部分に設けられていた可能性が考えられる。全体規模は、東西7.30mの南北8.10mで、周溝を含めた規模は東西8.70mの南北9.96mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.65～0.96m、深さ0.40～0.69mを測り、断面は「U」の字形を呈する。

主体部は、ほぼ中央に主軸をN－78° 45′－Eに取った不整隅丸長方形の墓壙が検出された。墓壙は、長さ2.80m，幅1.57m、深さ0.41mの規模で、墓壙を掘った後棺の規模に合わせて地山の上に黄色粘土を敷き、その上に赤色顔料を蒔いて床を作り、棺材を組み合わせた後埋葬内

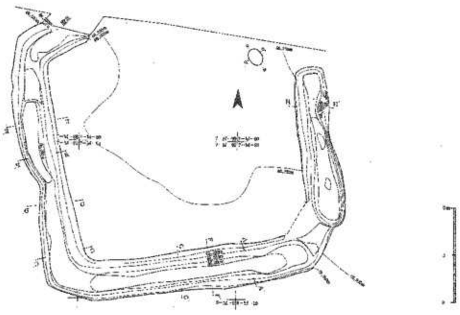


第20図　4号・6号方形周溝墓測量図及び4号方形周溝墓周溝土層断面図

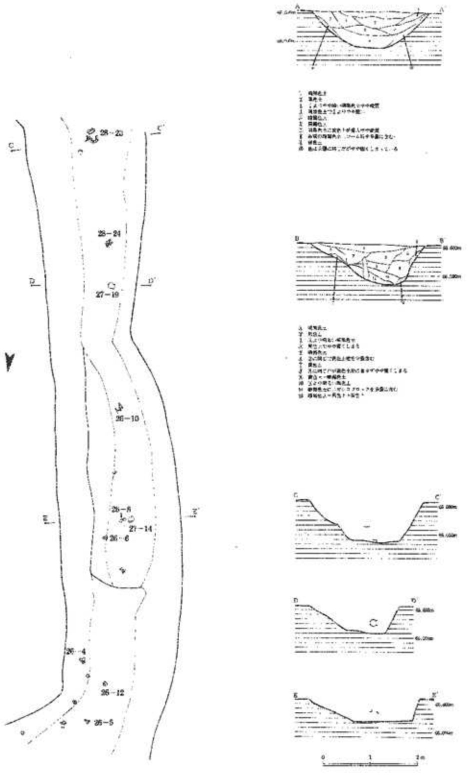


第21図　4号方形周溝墓主体部実測図

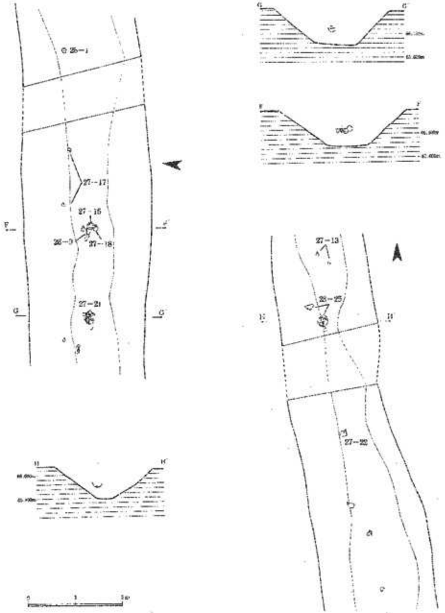
に粘土と土を入れ、埋置したものと考えられる。棺は石材が全く認められないことから木棺と考えられ、形態は小口部に棺材を埋め込む為の溝が検出されたことから、組み合わせ式の箱形木棺である可能性が高い。木棺は、長さ約1.70m、幅約0.30mの規模と考えられる。主体部内からは、人骨は検出されなかったが、副葬品と考えられる鉄製刀子が1点床面より出土している。



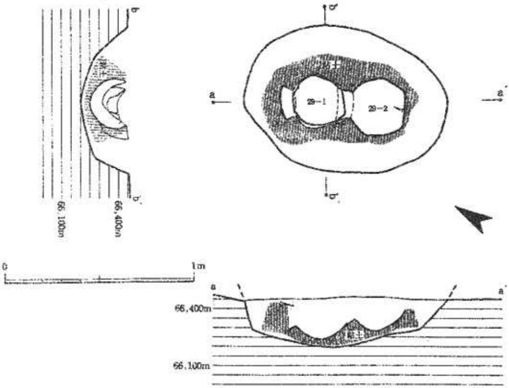
第22図　5号方形周溝墓測量図



第23図　5号方形周溝墓周溝土層断面図及び周溝内遺物出土状態実測図



第24図　5号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図



第25図　5号方形周溝墓墳丘上埋葬土壙実測図

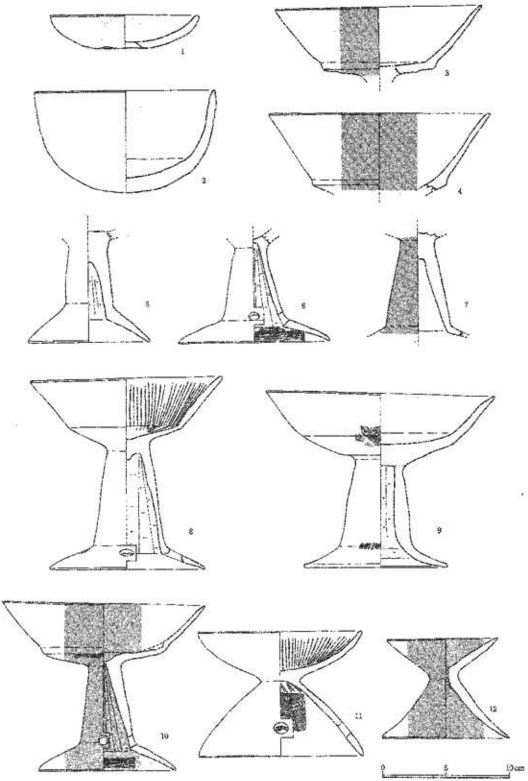
周溝内からは、遺物の出土は全く無かった。

5号方形周溝墓

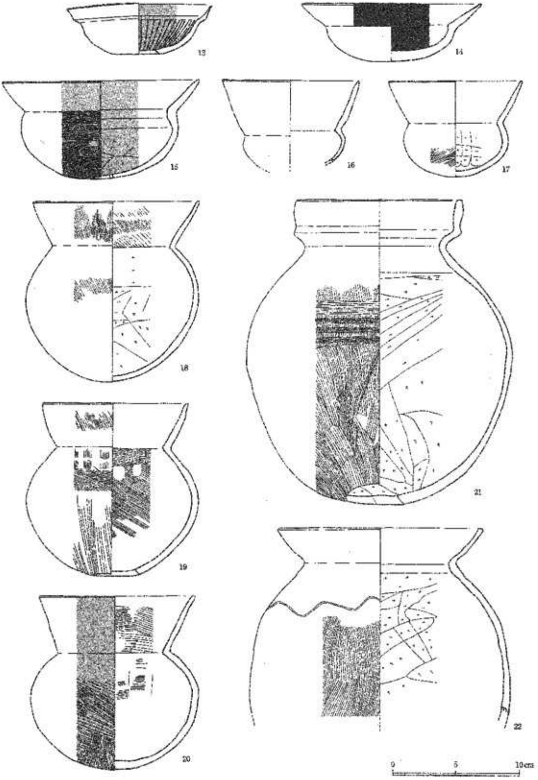
遺構（第22図～第25図）　出土遺物（第26図～第29図、第41図2・第6表～第7表・第11表2）

遺構は、調査区7－M－88・89・90・91・92・93、8－M－9グリッドにかけて検出され、4号・6号・9号方形周溝墓がすぐ南側に接している。遺構は、方形に巡る周溝と墳丘部分の東側陸橋部近くに土師器壺を2個重ねて横置きに埋置された土壙を検出した。主体部や墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－09°00′－Wを取り築造されており、陸橋部は東側周溝の東北コーナー近くに確認されたが幅は不明である。全体規模は、北側周溝が未調査の為正確には不明であるが、東西14.6mの南北15.1mで、周溝を含めた規模は東西19.3mの南北19.7mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅1.80～2.80m、深さ0.57～0.98mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。当方形周溝墓は、今回の発掘で検出された方形周溝墓の中では最大の規模を測る。

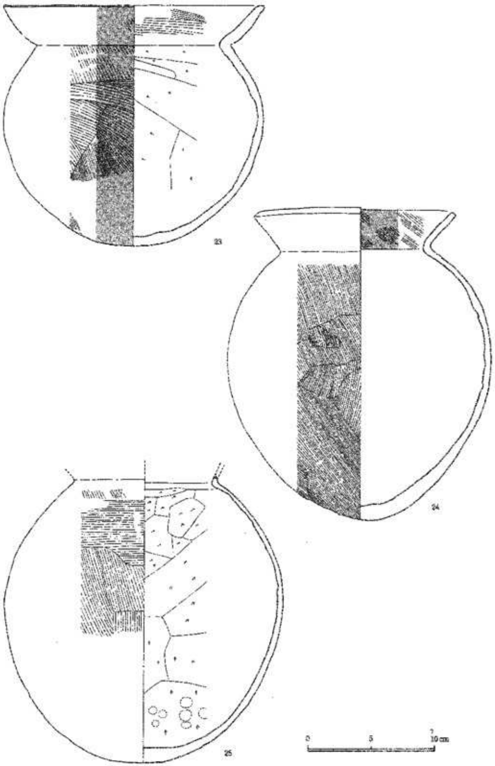
主体部は、削平され全く残っていなかったことから、その形態は不明である。



第26図　5号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（1）



第27図　5号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（2）



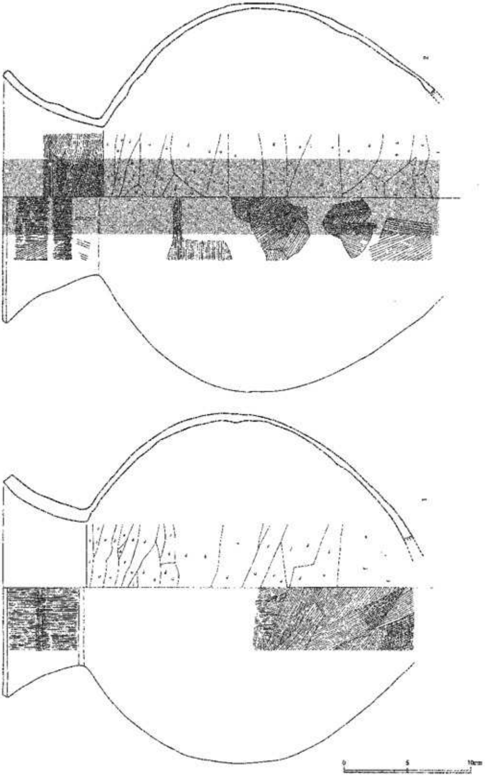
第28図　5号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（3）

第6表　5号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
26-1	坏	口径 11.7 器高 2.7	体部は内彎しながら立ち上がり、大きく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多 石粒 少	淡黄褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○底部穿孔
26-2	鉢	口径 14.3 器高 8.1	体部は内彎しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は尖る。体部は深い。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器
26-3	高坏	口径 16.2 現存高 5.4	坏部は深く、内側に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に大きく開きながら立ち上がる。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 少 角セン石 少	赤褐色	良好	ナデ	ナデの後ヘラ磨き	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布 ○脚部欠失
26-4	高坏	口径 17.4 現存高 6.1	坏部は深く、内側に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に大きく開きながら立ち上がる。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○脚部欠失
26-5	高坏	現存高 8.8 底径 9.6	脚部は筒状で中位付近が膨らむ。裾部がさらに外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤褐色	良好	ナデ	脚部 ヘラ削りの後ナデ 裾部 ナデ	○土師器 ○坏部欠失
26-6	高坏	現存高 8.6 底径 12.0	脚部は筒状で裾部に向って膨らむ。裾部はさらに内彎気味に大きく外側に開く。端部は尖る。裾部近くには径8㎜程の円形透かしを穿孔する。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	淡黄褐色	良好	ナデ	ヘラ削り 裾部 ハケ目の後ナデ	○土師器 ○坏部欠失
26-7	高坏	現存高 8.3	脚部は筒状で裾部に向って膨らむ。裾部がさらに外側に開く。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	赤褐色	良好	ナデ	ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
26-8	高坏	口径 15.2 器高 15.4 底径 12.3	坏部は深く、内側に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に大きく開く。端部は丸い。脚部は筒状で裾部に向って膨らむ。裾部はさらに緩やかく外側に開く。端部はナデで平坦にしている。裾部には、径1㎝程の円形透かしを3個穿孔する。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少 小石粒 少	淡赤褐色	良好	坏部 ハケ目の後ナデ 坏部 ナデ	坏部 ナデの後ヘラ磨きの暗文 脚部 ヘラ削りの後ナデ 裾部 ナデ	○土師器 ○坏部内面に暗文（放射状）
26-9	高坏	口径 18.0 器高 14.1 底径 11.4	坏部は深く内側に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に大きく開く。端部は尖がる。脚部は筒状で中位付近でやや膨らむ。裾部がさらに外側に開く。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	坏部 ハケ目の後ナデ 脚部 ハケ目の後ナデ	坏部 ナデ 脚部 ヘラ削り 裾部 ナデ	○土師器
26-10	高坏	口径 16.0 器高 13.5 底径 10.8	坏部は浅く内側に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に大きく開く。脚部は筒状で裾部に向かって膨らむ。裾部はさらに内彎気味に緩やかく外側に開く。端部は丸い。裾部近くには径8㎜位の円形透かしを2個穿孔する。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	坏部 ハケ目の後ナデ 脚部 ナデ	坏部 ナデ 脚部 ヘラ削り 裾部 ハケ目の後ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
26-11	器台	口径 13.0 器高 9.5 底径 13.0	体部は内彎しながら大きく外側に開きながら立ち上がり、端部は丸い。脚部はやや内彎気味に裾部に向かって外側に開く。脚部の中位よりやや下に径1㎝程の円形透かしを2個穿孔する。	砂粒 多 白色粒 少 角セン石 少	淡茶褐色	良好	ナデ	坏部 ナデの後ヘラ磨きの暗文 脚部 ハケ目の後ナデ	○土師器 ○坏部内面に暗文（放射状）
26-12	器台	口径 8.7 器高 8.0 底径 10.0	体部は直線的に外側に開きながら立ち上がり端部に至る。端部は尖がる。脚部はやや外反しながら大きく外側に開く。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	ナデの後ヘラ磨き	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○ほぼ完形品
27-13	盌	口径 11.4 器高 4.1	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が外側に短かく屈曲した後さらに内側に屈曲し、そのまま直線的に立ち上がり端部に至る。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ナデ	ナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布 ○底部穿孔 ○内面に暗文（放射状）

図版番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
27-14	坏	口径 14.2 器高 4.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が外側に屈曲した後、直線的に外側に開く。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	漆黒色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○内外面に黒漆塗布
27-15	鉢	口径 15.4 器高 7.8	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が外側に屈曲した後、直線的に外側に開く。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部穿孔
27-16	小型丸底壺	口径 10.8 現存高 7.0 胴部径 8.0	頸部でくの字に屈内した後口縁部が内彎気味に立ち上がる。端部は尖がる。口縁部は高い。胴部の最大径は胴部近くにあり、胴部径より口径が大きい。	砂粒 多	淡赤褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器
27-17	小型丸底壺	口径 10.5 器高 7.6 胴部径 8.3	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部は尖がる。口縁部は高い。胴部の最大径は中位より上にあり、胴部径より口径が大きい。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
27-18	小型壺	口径 13.1 器高 14.4 胴部径 13.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が内彎しながら立ち上がり外側に開く。口縁部は高い。胴部の最大径は中位付近にあり球形に近い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 石粒 少	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ハケ目 胴部 ヘラ削り	○土師器
27-19	小型壺	口径 11.5 器高 13.8 胴部径 13.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が内彎気味に外側に開きながら立ち上がる。端部は丸い。口縁部は高い。胴部の最大径は中位にあり、球形に近い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	○土師器 ○底部穿孔
27-20	小型壺	口径 12.3 器高 13.9 胴部径 13.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部は丸い。口縁部が高い。胴部の最大径は中位にあり、球形に近い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
27-21	壺	口径 13.0 器高 24.2 胴部径 21.0	複合口縁壺で頸部で屈曲した後さらに内側に屈曲し口縁部が短かく直口し立ち上がる。端部は丸い。胴部の最大径は中位より上にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○底部穿孔
27-22	甕	口径 16.2 現存高 14.9 胴部径 20.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が内彎しながら外側に開きながら立ち上がる。端部はナデて平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 石粒 少	外面 淡黒色 内面 淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に黒漆塗布
28-23	甕	口径 20.6 器高 19.3 胴部径 20.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が内彎しながら外側に大きく開きながら立ち上がる。端部は丸い。胴部の最大径は中位よりやや上にある。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多 石粒 少	淡赤褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
28-24	甕	口径 16.0 器高 24.8 胴部径 20.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデて平坦にしている。胴部の最大径は中位よりやや上にある。	砂粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 器面があれている為不明	○土師器 ○内面口縁部に赤色顔料塗布
28-25	壺か甕	現存高 22.7 胴部径 22.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外側に開きながら立ち上がる。胴部の最大径はほぼ中位にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	胴部 ハケ目	胴部 ヘラ削り	○土師器 ○口縁部欠失

周溝内からは、多くの遺物が出土した。遺物は、陸橋部のすぐ南側周溝内より土師器の壺破片が周溝底より20cm程浮いた状態で出土し、また南側周溝内のほぼ中央より土師器の高杯や



第29図　5号方形周溝墓墳丘上土壙内出土壺実測図

第7表　5号方形周溝墓墳丘上土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
29-1	壺	口径 17.6 現存高 22.5 胴部径 27.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反しながら立ち上がり外側に開く。端部はナデて平坦にしている。胴部の最大径は中位にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○底部は人為的に打ち欠いている。
29-2	壺	口径 20.0 現存高 34.2 胴部径 30.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反しながら立ち上がり外側に開く。端部はナデて平坦にしている。胴部の最大径は中位よりやや上にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡赤褐色	良	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○底部は人為的に打ち欠いている。

小型丸底壺、小型壺、壺、甕等が周溝底より20cm程浮いた状態で出土している。さらに南側周溝内からも土師器の高坏や小型丸底壺、小型壺、器台、壺等が周溝底より10〜20程浮いた状態で出土している。出土状態は、南側の周溝内中央部分に高坏や小型丸底壺などが4個体程固まって出土した他は、殆どが間隔を置いて1点づつ出土している。出土した土師器は、いずれもいゆるゆる古式土師器と呼ばれるものである。

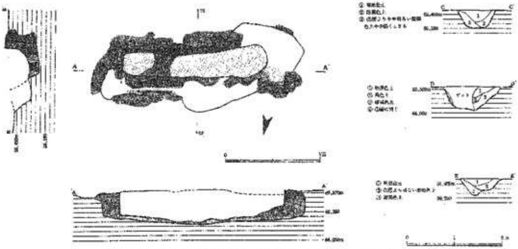
また、陸橋部近くの墳丘上より長径1.08m、短径0.71m、深さ0.27mを測り、楕円形を呈する土壙が検出された。土壙内には、底面に敷かれた黄色粘土の上に、底部を割った2個の土師器壺が底部と口縁部を重ねてほぼ水平に置かれた状態で検出された。土器の中からは、人骨や副葬品の出土は無かったが、検出状態から埋葬墓と判断した。壺棺墓が作られた時期は、出土した壺棺の形態的特徴より、方形周溝墓の築造された時期とほぼ同じか若干新しい時期で、方形周溝墓に埋葬された人と関連が深い人物の可能性が高いと考えている。

6号方形周溝墓

遺構（第20図・第30図）　出土遺物（第41図3・第11表3）

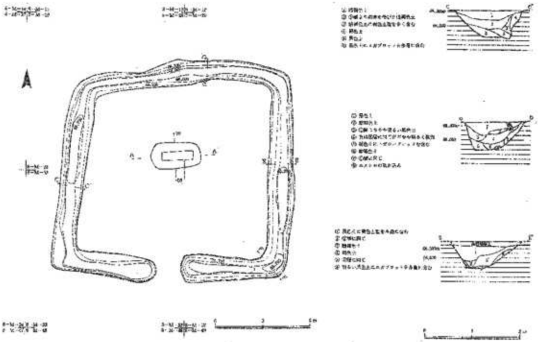
遺構は、調査区の8－M－9・10・11・12グリッドにかけて検出され、5号方形周溝墓がすぐ北側に9号方形周溝墓が西側に8号方形周溝墓が南側に接している。遺構は、4号方形周溝墓と切り合っており、当方形周溝墓の東側周溝が切れていることや、4号方形周溝墓の周溝が四方向残っていることから新しく築造されたものと考えられるが、4号方形周溝墓と周溝一部を共有していた可能性も否定出来ない。しかし、現地調査ではこの点に付いて確認は出来ず不明である。遺構は、コの字形に巡る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－80° 00′ －Eを取り築造されており、陸橋部は確認出来なかったが未調査の東側周溝部分に設けられていた可能性が高い。全体規模は、東西8.22m以上の南北7.50mで、周溝を含めた規模は東西9.42m以上の南北9.48mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.80〜1.20m、深さ0.40〜0.73mを測り、断面は「U」字形を呈する。

主体部は、ほぼ中央に主軸をN－80° 00′ －Eに取った不整隅丸楕円形の墓壙が検出された。

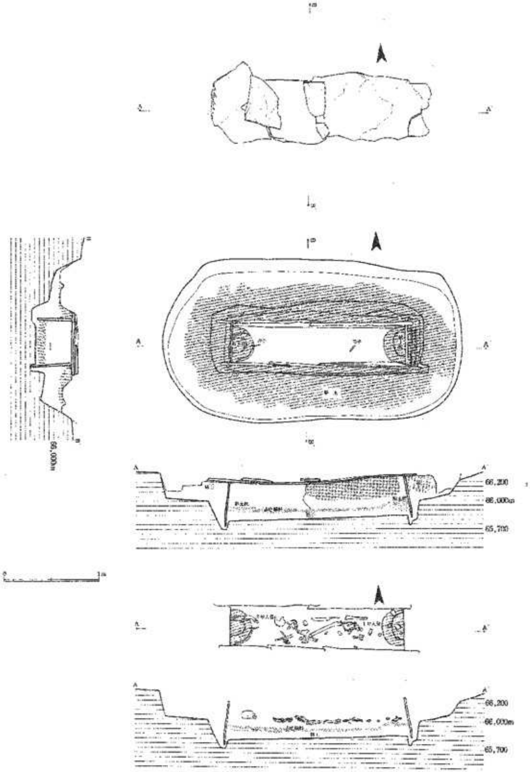


第30図　6号方形周溝墓主体部及び周溝土層断面実測図

墓壙は、長さ2.23m、幅0.84m、深さ0.37mの規模で、墓壙を掘った後墓壙全体に黄色粘土を詰め、棺を埋置する墓壙を棺に合わせて掘った後を棺を納めている。棺は、石材が全く出土していないことから木棺と考えられ、木棺の形態は墓壙の断面が「U」字形を呈することからく貫式の割竹形木棺の可能性が高い。木棺は、長さ約1.74m、幅約0.43mの規模と考えられる。床面には、赤色顔料が残っていたことから木棺内は赤色顔料で塗られていたことが伺える。主体部内からは、人骨の出土は無いが副葬品と考えられる鉄製刀子が1点床面から出土している。



第31図　7号方形周溝墓測量図及び周溝土層判断図



第32図　7号方形周溝墓主体部石棺及び石棺内人骨出土状態実測図

周溝内からは、遺物の出土は全く無かった。

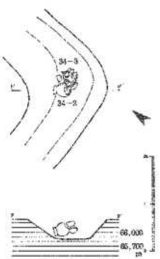
7号方形周溝墓

遺構（第31図～第33図）　出土遺物（第34図・第41図4～5・第8表・第11表4～5）

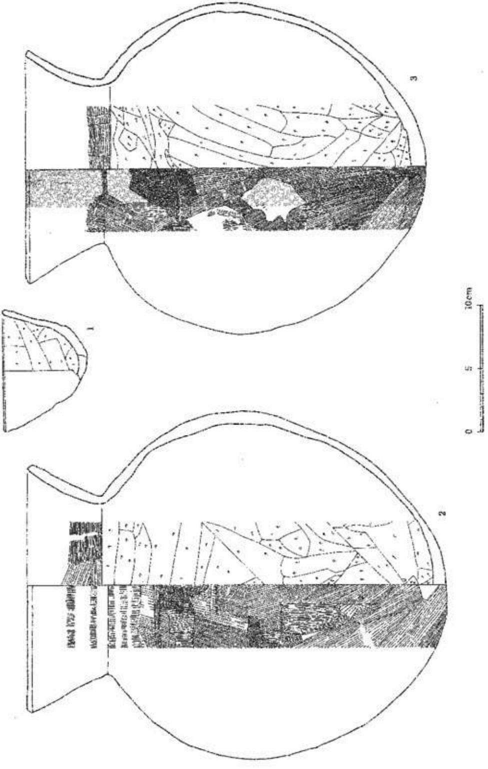
遺構は、調査区の8－M－28・29・32・33グリッドにかけて検出され、3号方形周溝墓が東側に、8号方形周溝墓がすぐ北側に接している。遺構は、方形に巡る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－06° 30′－Eでほぼ南北の主軸を取り築造されており、南側周溝のほぼ中央に幅1.50mの陸橋部が設けられている。全体規模は、東西11.9mの南北11.2mで、周溝を含めた規模は東西14.8mの南北13.9mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅1.00～1.50m、深さ0.71～0.75mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。

主体部は、中央からやや北側よりに主軸をN－86° 30′－Eに取った隅丸長方形の墓壙が検出された。墓壙の規模は、長さ3.18m、幅1.74m、深さ0.31mで、墓壙を掘った後さらに棺を埋め込むための溝を掘っている。主体部内に納められた棺は、安山岩割り石の箱式石棺で、規模は長さ1.91m、幅0.48m、深さ0.31mを測り、蓋は並べて3枚かぶせている。蓋の継ぎ目には、小さい安山岩の割り石を乗せ、土が棺内に入り込まないようにしている。蓋石の上面には、粘土は確認されなかったが当初は石棺の上面を粘土で覆っていた可能性は十分考えられる。石棺内の東側と西側小口部には、黄色粘土で作られた枕が確認され、東側と西側にそれぞれ頭部を乗せた2体の人骨が検出された。人骨は、石棺内に土砂が流入していたことから残存状態はあまり良くなく、伸展葬で埋葬されており頭骨の一部や上腕骨、大腿骨、骨盤等の一部が残っていた。また、1号人骨は不明だが2号人骨は女性という所見であった。2体の人骨の新旧関係は、東側の人骨に比べ西側の人骨の残存状態が良いことや、骨自体もあまり動いた形跡が認められないことから、西側の2号人骨が新しいと判断した。人骨の他には、西側と東側それぞれの粘土枕の近くから鉄製刀子が1本づつ出土した。それぞれの人骨に副葬されたものと考えられる。床は、地山整形面に黄色粘土を敷き、その上に赤色顔料を敷いた粘土床で、石棺の内面全体にも赤色顔料が一面に塗布されている。

周溝内からは、遺物の出土は量的に少なかったが、陸橋部近くで東南側コーナーより土師器の壺と鉢が周溝底より5～10cm程浮いた状態で出土している。いずれの土師器も、いわゆる古式土師器と呼ばれるものである。



第33図　7号方形周溝墓周溝内遺物出土状態実測図



第34図　7号方形周溝墓周溝内出土土器実測図

第3表　7号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

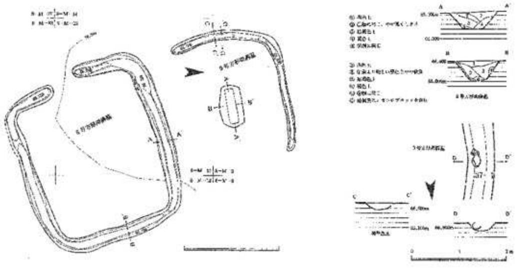
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
34-1	鉢	口径 9.7 器高 6.7	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 石粒 少	淡茶褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○底部穿孔
34-2	壺	口径 19.7 器高 33.2 胴部径 27.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデて平坦にしている。胴部の最大径は中位付近にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 [illegible] 多 石粒 多	淡赤褐色	良好	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ハケ目の後ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
34-3	壺	口径 18.5 器高 31.7 胴部径 26.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデて平坦にしている。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、球形に近い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	外面 漆黒色 内面 淡赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に黒漆塗布

8号方形周溝墓

遺構（第35図）

遺構は、調査区の8－M－12・13・28・29グリッドにかけて検出され、7号方形周溝墓が南側に、6号・9号方形周溝墓がすぐ北側に接している。遺構は、方形に巡る周溝が検出され主体部や墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－68° 30′ Eを取り築造されており、西側周溝のほぼ中央に幅1.56mの陸橋が設けられている。全体規模は、東西9.66mの南北7.68mで、周溝を含めた規模は東西11.5mの南北8.78mを測り、東西が南北に比べやや長い。周溝は、幅0.60～1.20m、深さ0.39～0.56mを測り、断面は「U」字形を呈している。

周溝内からは、遺物の出土は全く無かった。

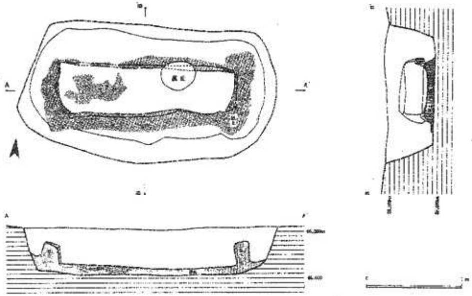


第35図　8号・9号方形周溝墓測量図及び土層断面図・遺物出土状態実測図

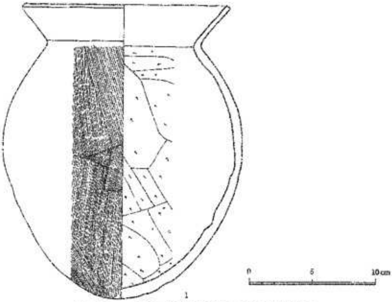
9号方形周溝墓

遺構（第35図～第36図）　出土遺物（第37図・第9表）

遺構は、調査区の8－M－8・13グリッドにかけて検出され、6号方形周溝墓が東側に、8号方形周溝墓がすぐ南側に接している。遺構は、「L」字形に残る周溝と主体部を検出したが、墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－79°30′－Eでほぼ東西に主軸を取



第36図　9号方形周溝墓主体部実測図



第37図　9号方形周溝墓周溝内出土土器実測図

第9表　9号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
37-1-1	甕	口径 16.5 器高 23.4 胴部径 19.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。端部はナデで平坦にしている。胴部の最大径は中位付近にある。	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

り築造されており、陸橋部の位置は不明である。全体規模は周溝が北側と西側に「L」字形に検出され他の部分が検出されていないことから不明であるが、全体が東西約14mの南北約12m程度の方形周溝墓と考えられる。周溝は、幅0.50～0.70m、深さ0.32～0.36mと浅く、周溝の断面は「U」字形を呈する。当方形周溝墓の周溝は、方形に巡るものではなく「L」字形に検出された。これは、築造当初からこの様な形で作られたのか、それとも他の部分の周溝は浅く作られたので削平により消滅してしまったのか、調査時には確認できなかったが、残っている周溝が浅いことから削平された可能性が高いと考えられる。

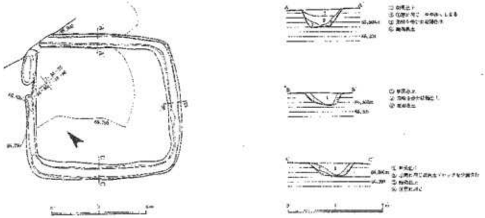
主体部は、ほぼ中央に主軸をN－79°30′－Eに取った不整隅丸長方形の墓壙が検出された。墓壙の規模は、長さ2.75m、幅1.48m、深さ0.51mで、墓壙を掘った後床部分に黄色粘土を貼り、その上に棺を置きさらに棺の周囲を黄色粘土で覆っている。主体部に納められた棺は、石材が全く出土していないことから木棺と考えられ、墓壙の断面が「U」字形を呈することから割竹形木棺の可能性が高い。木棺は、長さ1.87m、幅0.51mの規模と考えられ、現存の深さは0.28mを測る。床面には、赤色顔料が残っていたことから木棺内は赤色顔料で塗られていたことが伺える。主体部内からは、人骨の出土や副葬品等の遺物の出土は全く無かった。

周溝内からは、遺物の出土は殆ど無かったが、西側の周溝中央付近より土師器の甕が底面近くより、横に置かれた状態で出土している。出土した土師器は、いわゆる古式土師器と呼ばれるものである。

10号方形周溝墓

遺構（第38図）

遺構は、調査区の7－M－75・76・85・86グリッドにかけて検出され、1号～9号方形周溝墓までは互いに接した状態で集中して築造されているが、当方形周溝墓と11号方形周溝墓は1号～9号方形周溝墓より距離を置いた状態で築造されている。遺構は、方形に巡る周溝が検出され主体部や墳丘は削平され全く残っていなかった。主軸方位は、N－50°00′－Wを取り築造されており、北西側コーナー部に幅0.50mの陸橋が設けられている。全体規模は、東西8.34mの南北7.40mで、周溝を含めた規模は東西9.78mの南北7.40mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.60～1.10m、深さ0.37～0.55mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。



第38図　10号方形周溝墓測量図及び周溝土層断面図

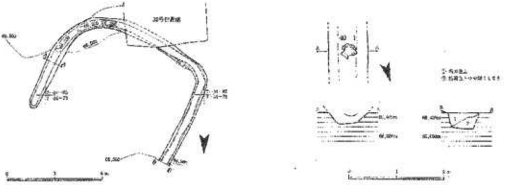
周溝内からは、遺物の出土は全く無かった。

11号方形周溝墓

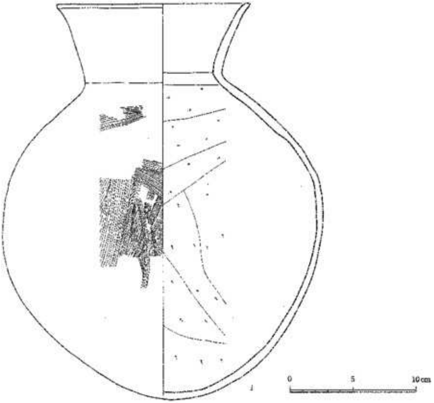
遺構（第39図）　出土遺物（第40図・第10表）

遺構は、調査区の7－M－77・78・79・82・83・84グリッドにかけて検出され、当方形周溝墓は他の方形周溝墓と距離を置いて調査区の一番西側に築造されている。遺構は、東西と南側の三方向に周溝が検出され、主体部や墳丘は削平され全く残っていなかった。北側の周溝は、調査区の外にあるものと考えられる。主軸方位は、N－64°15′－Wを取り築造されており、東側周溝の中央よりやや北よりに陸橋部が設けられている。全体規模は、東西8.46mの南北7m以上で、周溝を含めた規模は東西10.0mの南北7m以上を測り、ほぼ方形を呈するものと考えられる。周溝は、幅0.70～0.90m、深さ0.50～0.73mを測り、断面は周溝の壁が内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がり、「レ」の字形を呈する。

周溝内からは、遺物の出土は殆ど無かったが、東側の周溝で陸橋部近くより土師器の壺が1



第39図　11号方形周溝墓測量図及び周溝内遺物出土状態実測図

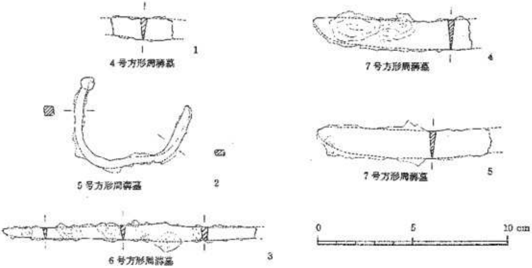


第40図　11号方形周溝墓周溝内出土土器実測図

第10表　11号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
40－1	壺	口径 15.3 器高 31.5 胴部径 25.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に外側に開きながら立ち上がる。底部はナデて平坦にしている。胴部の最大径は中位付近にある。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少 角セン石 多	淡黄橙色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

点、床面より10cm程浮いた状態で出土している。出土した土師器は、いわゆる古式土師器と呼ばれるものである。



第41図　方形周溝墓内出土鉄器実測図

第11表　方形周溝墓内出土鉄器観察表

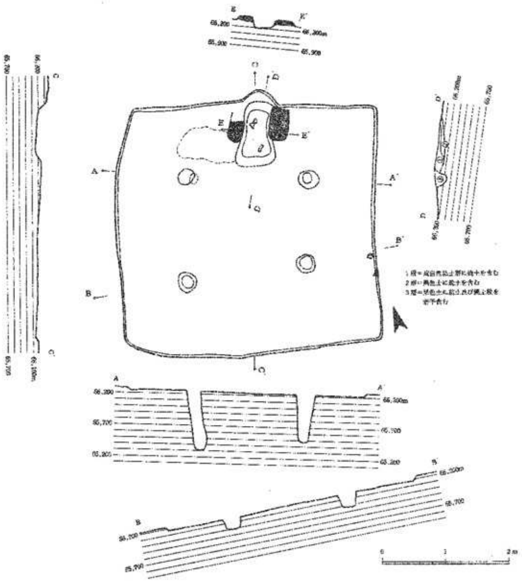
図版番号	出土遺構	種類	法量（cm）	特徴	備考
41-1	4号方形周溝墓 主体部	刀子	現存長　3.3 幅　1.2 厚　0.3	両端欠失	
41-2	5号方形周溝墓 周溝内	不明	全　長　不明 幅　0.5 厚　0.5		
41-3	6号方形周溝墓 主体部	刀子	全　長　13.4 身　長　8.7　茎　長　4.7 身　幅　1.0　茎　幅　0.8 身　厚　0.3　茎　厚　0.4	関は片関	茎の一部欠失
41-4	7号方形周溝墓 主体部	刀子	現存長　8.2 幅　1.5 厚　0.3		茎部分欠失
41-5	7号方形周溝墓 主体部	刀子	現存長　9.1 幅　1.5 厚　0.2		茎部分を欠失

第2節　奈良・平安時代の遺構と遺物

1号住居跡

遺構（第42図）

調査区の一番東側に位置し、8－N－1・20グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、2号方形周溝墓と切り合っており、方形周溝墓の周溝が完全に埋まった後住居跡が建てられていることから、新旧関係は2号方形周溝墓が古く、当住居跡が新しい。住居跡の規模は、長辺

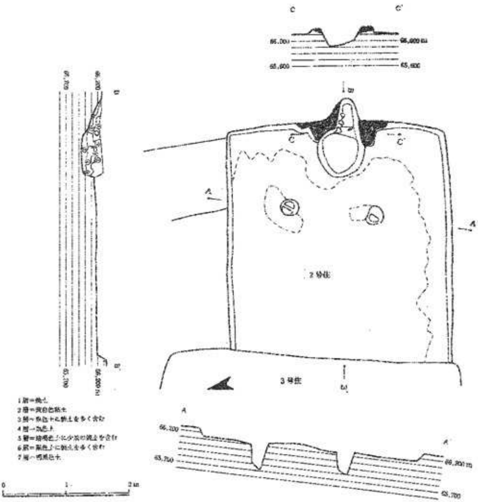


第42図　1号住居跡実測図

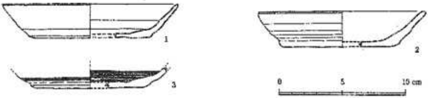
4.12m、短辺3.90m、深さ0.22mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位はN－24゜00′－Eである。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られており、煙道部は壁面より若干外に出ている程度である。住居跡は、残存状態があまり良くないことから、固く踏み締められた硬化面はカマドの周辺に認められるだけで、中央付近には全く認められなかった。住居跡の柱数は、柱穴が各コーナーの壁近くより４個検出されており、４本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や椀、甕が出土している。出土した土師器の椀や、坏の殆どには赤色顔料が塗られている。

２号住居跡



第43図　２号住居跡実測図



第44図　2号住居跡内出土土器実測図

第12表　2号住居跡内出土土器観察表

挿図番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
44-1	杯	口径 14.0 器高 2.7 底径 10.0	体部は直線的に立ち上がり、外方に開く。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多	淡茶褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
44-2	杯	口径 13.2 器高 2.8 底径 9.2	体部は直線的に立ち上がり、外方に開く。端部は丸くなる。	砂粒 多 金雲母 多	淡茶褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
44-3	杯	現存高 1.6 底径 8.8	体部は内弯気味に立ち上がる。	砂粒 多 金雲母 多	褐色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文（渦巻き状） ○口縁部欠失

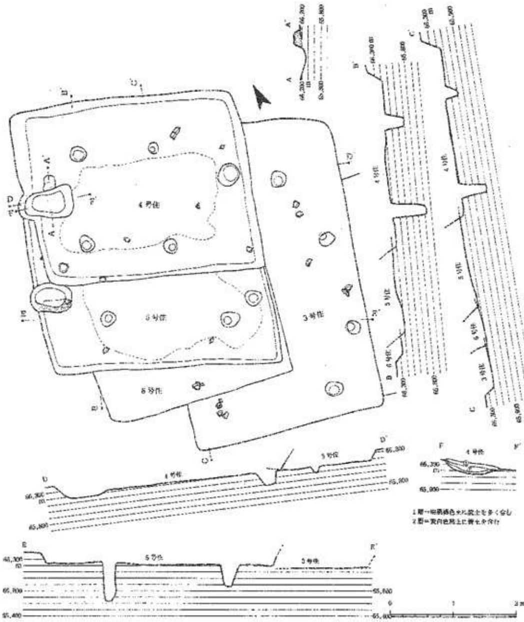
遺構（第43図）　遺物（第44図・第112図1～3・第12表・第43表1～3）

調査区の一番東側に位置し、8－M－11、8－N－20グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、2号方形周溝墓及び3号住居跡と切り合っており、方形周溝墓の周溝が完全に埋まった後住居跡が建てられ、3号住居跡に切られていることから、新旧関係は2号方形周溝墓が一番古く、3号住居跡が一番新しいという順序になる。住居跡の規模は、西側壁が3号住居跡に切られ正確には分からないが、長辺3.80m以上、短辺3.56m、の隅丸長方形か隅丸方形を呈するものと考えられる。住居跡の深さは、0.30mを測る。主軸方位は、N－75゜00′－Wである。住居跡には、東側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られており、煙道部は壁面より40cm程外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁近くまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴がカマドの袖近くに2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、内外面に渦巻状のヘラ磨きの暗文を施したり、赤色顔料を塗布した土師器坏や蓋、甕が出土している。また、当住居跡内からは外面底部に墨書が残る土師器の坏か皿の底部片が2点と、須恵器の坏か皿の底部片が1点の計3点の墨書土器が出土している。墨書土器は、1点は全く読めないが、土師器のものが田と須恵器のものが[?]匠と読める。

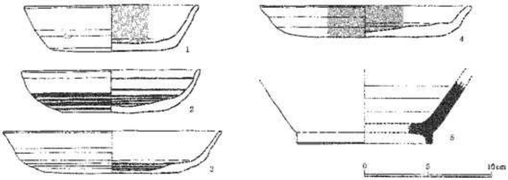
3号住居跡

遺構（第45図）　遺物（第46図・第112図4～5・第13表・第43表4～5）



第45図　3号・4号・5号・6号住居跡実測図

8－M－10・11グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、2号・4号・5号・6号住居跡と切り合っており、新旧関係は4号・5号・6号住居跡よりも古く、2号住居跡よりも新しい。住居跡は，北側と西側壁を他の住居跡に切られ検出されなかったが、幸い南側の壁面が残っていたので規模は計測出来た。住居跡の規模は、長辺4.84m、短辺3.06m、深さ0.40mで隅丸長方形を呈し、主軸方位はN－27° 30′－Eである。住居跡内から、カマドおよび硬化面の検出は無かったが、カマドは他の住居跡により切られ無くなっている北側壁面に作られていたものと考えられる。住居跡の柱数は、柱穴が北東及び南東コーナーの壁近くに2個検出され



第46図　3号住居跡内出土土器実測図

第13表　3号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
46-1	坏	口径 13.8 器高 3.7 底径 10.0	体部はほぼ直線的に外方に開きながら立ち上がり口縁部が外反する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	淡赤褐色	良好	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
46-2	坏	口径 14.0 器高 3.4 底径 8.2	体部は内湾しながら立ち上がり、外方に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○土師器 ○内外面に暗文（渦巻き状）
46-3	坏	口径 17.4 器高 3.4 底径 10.2	体部は内湾気味に立ち上がり、外方に開く。端部は丸い。	砂粒 多 白色粒 多 金雲母 少 角セン石 少	淡赤褐色	良好			○土師器 ○内面に暗文
46-4	坏	口径 16.8 器高 2.5 底径 9.7	体部は外反気味に立ち上がり、外方に開く。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
46-5	椀	現存高 4.8 高台径 10.3 高台高 0.8	体部は直線的に立ち上がり、外方に開く。底部との境にはほぼ垂直に高台を貼り付ける。	砂粒 多	淡灰色	不良	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○須恵器 ○高台貼り付け

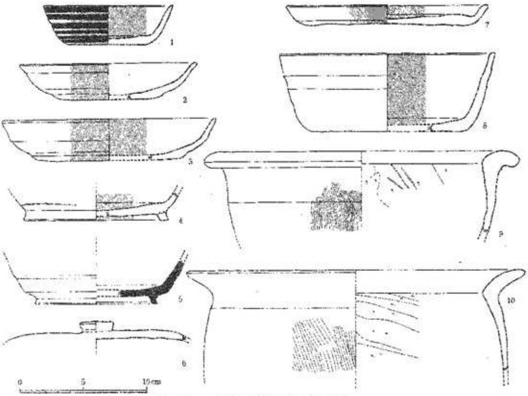
たことから、４本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが須恵器や土師器の坏や椀、皿、甕が出土している。出土した皿や、坏の殆どには赤色顔料が塗られており、その中の坏２点には外面底部に墨書が残っていた。墨書は、１点は匿と書かれており、残りの１点は何が墨書されているかは不明である。

４号住居跡

遺構（第45図）　遺物（第47図・第14表）

８－Ｍ－10・11グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、３号・５号・６号住居跡と切り合っており、新旧関係は３号・５号・６号住居跡を切って作られていることから、切り合っている４軒の住居跡の中では一番新しく作られた住居跡である。住居跡の規模は、長辺3.66m、



第47図　4号住居跡内出土土器実測図

第14表　4号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
47-1	坏	口径 10.2 器高 3.1 底径 6.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	赤褐色	良好	ヨコナデ ヘラ磨きによる暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○外面に暗文
47-2	坏	口径 14.0 器高 2.9 底径 8.1	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は若干外傾する。端部は若干丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多	淡褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
47-3	坏	口径 16.8 器高 3.3 底径 11.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は若干外傾する。端部は尖がり気味。	砂粒 多	赤褐色	不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
47-4	坏	現存高 2.2 高台高 0.5 高台径 11.4	体部は直線的に立ち上がる。底部との境には低い高台をハの字状に貼り付ける。端部はナデで平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ 底部 ヘラ磨きによる同心円状の暗文	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
47-5	坏	現存高 3.5 高台高 0.7 高台径 9.7	体部は直線的に立ち上がる。底部との境には低い高台をハの字状に貼り付ける。端部はやや尖がり気味。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰色	還元 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
47-6	蓋	現存高 1.7	直径2.7cmのボタン状つまみが付く。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
47－7	皿	口径 16.0 器高 1.6 底径 12.8	体部は直線的に短かく立ち上がる。端部は丸くなる。	砂粒 少 小石 少 金雲母 多	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
47－8	椀	口径 17.0 器高 6.2 底径 12.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡茶褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
47－9	鉢	口径 25.0 現存高 6.5	頸部で「く」の字に屈曲した後、口縁部が外反しながら短かくほぼ直線に開く。端部は丸くなる。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
47－10	甕	口径 26.6 現存高 8.1 胴部径 24.0	頸部で「く」の字に屈曲した後、口縁部が外反しながら短かく外に開く。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○胴部にスス付着

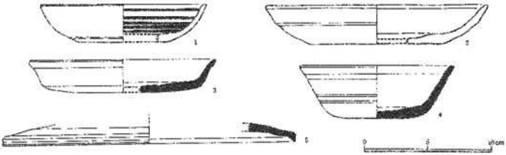
短辺2.94m、深さ0.38mで隅丸長方形を呈し、主軸方位はN－68°00′－Wである。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られており、煙道部は壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁近くまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が各コーナーの壁近くに4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。ただし、東側の柱穴2本は中央に寄っている。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、皿、蓋、甕が出土している。出土した土師器の皿や、坏の殆どには赤色顔料が塗られている。

5号住居跡

遺構（第45図）　遺物（第48図・第112図6・第15表・第43表6）

8－M－10・11グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、3号・4号・6号住居跡と



第48図　5号住居跡内出土土器実測図

第15表　5号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
48-1	坏	口径 13.1 器高 3.0 底径 7.0	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部はナデて平坦にしている。	砂粒 多 白色粒 少 金雲母 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内面に暗文
48-2	坏	口径 17.6 器高 3.1 底径 10.0	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がり気味。	砂粒 多 白色粒 少 金雲母 多	淡黄褐色	不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
48-3	坏	口径 14.7 器高 2.6 底径 11.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する。端部は丸い。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
48-4	坏	口径 12.2 器高 4.2 底径 7.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰白色	不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
48-5	蓋	口径 23.2 現存高 1.5	口縁部は屈曲し、明瞭な稜を有する。端部は尖がる。	密 砂粒 多 白色粒 少	灰白色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○須恵器

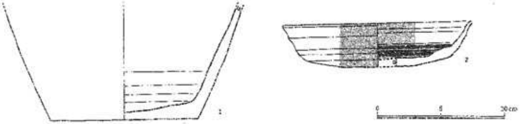
切り合っており、新旧関係は3号・6号住居跡を切って作られ、4号住居跡に切られていることから、4号住居跡より古く、3号・6号住居跡より新しい。住居跡は、北側の壁が他の住居跡に切られ検出出来なかったことから正確には不明だが、南側の壁とカマドを検出したことからおおよそ推定できる。住居跡の規模は、長辺3.64m、短辺2.70m前後の隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.38mを測る。主軸方位は、N－66°30′－Wである。住居跡には、西側壁面の中央からやや南寄りに作り付けのカマドが備えられているが、削平が著しくカマドの焚き口だけの検出で袖は残っていなかった。煙道部は、壁面より若干外側に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁近くまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が各コーナーの壁近くに2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが須恵器や土師器の坏や皿、蓋、甕が出土している。出土した土師器の皿や、坏の殆どには赤色顔料が塗られている。この中の土師器皿の1点には、外面底部に墨書が残っていたが、何が墨書されていたかは不明である。

6号住居跡

遺構（第45図）　遺物（第49図・第16表）

8－M－10・11グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、3号・4号・5号住居跡と切り合っており、新旧関係は3号住居跡を切って作られ、4号・5号住居跡に切られているこ



第49図　6号住居跡内出土土器実測図

第16表　6号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
1	鉢？	現存高 8.8 底径 11.6	体部は直線的に立ち上がる。底部は平底。	砂粒 多 雲母片 多	淡赤褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
2	坏	口径 15.0 器高 3.5 底径 11.4	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が短かく外反する。底部は丸い。	砂粒 少 白色粒 多 雲母片 多	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内面に暗文

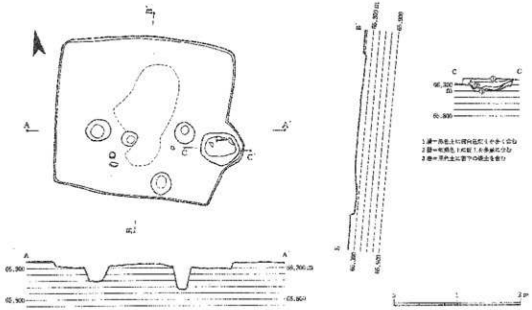
とから、4号・5号住居跡より古く、3号住居跡より新しい。住居跡は、殆どの壁を他の住居跡に切られ検出出来なかったことから正確には不明だが、残っていた南側の壁より住居跡の規模は、一辺3.02m前後の隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.40mを測る。主軸方位は、N－12゜30′－Eである。住居跡内から、カマドおよび硬化面それに柱穴の検出は無かったが、カマドは他の住居跡により切られ無くなっている北側壁面または西側壁面に作られていたものと考えられる。住居跡の柱数は、柱穴が全く検出されなかったことから不明である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆んどが細片で図化できたものは少ないが、須恵器の蓋や土師器の坏や甕が出土している。出土した土師器皿の殆どには赤色顔料が塗られている。

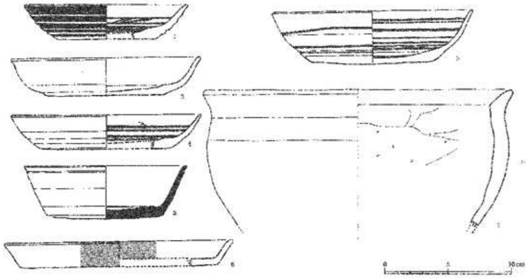
7号住居跡

遺構（第50図）　遺物（第51図・第112図9・第17表・第43表9）

8－M－11・12グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、単独で検出されており、規模は長辺2.68m、短辺2.56m、深さ0.22mを測り隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－73゜30′－Wである。住居跡には、東側壁面の中央からやや南寄りに作り付けのカマドが備えられているが、削平によりカマドの焚き口だけの検出で袖は残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央付近に認められ、住居跡の柱数は柱穴がカマドの近くと西側壁際のカマドを軸とした直線上に2本検出され、2本柱の住居跡である。



第50図　7号住居跡実測図



第51図　7号住居跡内出土土器実測図

第17表　7号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量 (cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
51-1	坏	口径 13.0 器高 2.8 底径 7.8	体部は内彎気味に大きく開きながら立ち上がり口縁部に至る。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多	にぶい橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文
51-2	坏	口径 16.0 器高 4.2 底径 8.5	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が短かく外傾する。端部は丸みをもつ。	砂粒 多 白色粒 多 金雲母 多 小石 少	橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
51-3	坏	口径 15.6 器高 3.0 底径 9.2	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部が短かく外反する。端部は丸い。	砂粒 少 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
51-4	坏	口径 15.0 器高 2.7 底径 10.0	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 白色粒 金雲母	淡黄橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内面に暗文
51-5	坏	口径 12.9 器高 4.2 底径 9.1	体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は尖がり気味。	礫若 砂粒 多 白色粒 多 金雲母 多	灰白色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
51-6	皿	口径 18.1 器高 2.0 底径 15.6	体部は外反しながら短かく立ち上がり口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 白色粒 少 金雲母 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
51-7	鉢	口径 24.6 胴部径 24.0 残存高 10.8	胴部がくの字に屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡茶褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

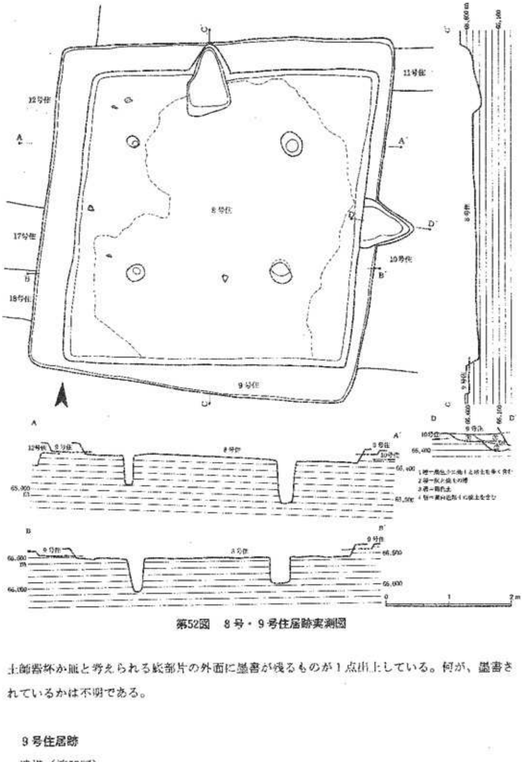
住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や皿、鉢、甕が出土している。出土した土師器の坏や、皿の殆どには赤色顔料が塗られ、ヘラ磨きの暗文が施されているものも認められる。この中の、土師器皿の１点には底部外面に墨書が残っていた。墨書は、圀圀と書かれている。

8号住居跡

遺構（第52図）　遺物（第53図・第112図8・第18表・第43表8）

8－M－7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、9号・10号・11号・12号・17号・18号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている7軒の住居跡の中では一番新しい。住居跡の規模は、長辺4.68m、短辺4.52m、深さ0.44mを測り隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－01°30′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面の中央からやや西寄りに作り付けのカマドが備えられているが、削平によりカマドの炊き口だけの検出で袖は残っていない。煙道部は、壁面より40cm程外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁際まで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が各コーナー付近に4本検出され、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、蓋、鉢、甕が出土している。出土した土師器の坏や、椀、皿の殆どには赤色顔料が塗られ、ヘラ磨きの暗文が施されているものも認められる。また、この中には



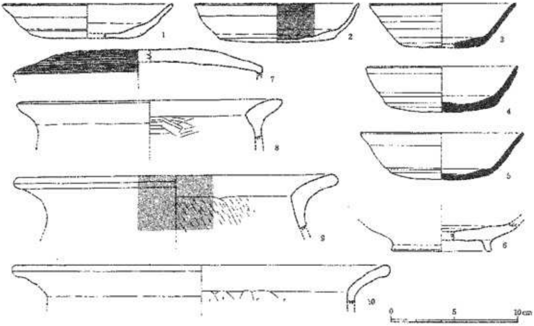
第52図　8号・9号住居跡実測図

土師器杯か皿と考えられる底部片の外面に墨書が残るものが1点出土している。何が、墨書されているかは不明である。

9号住居跡

遺構（第52図）

8－M－7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、8号・10号・11号・12号・17号・18号住居跡と切り合っており、新旧関係は8号住居跡より古く、10号・11号・12号・17号・18



第53図　8号住居跡内出土土器実測図

第18表　8号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
53-1	杯	口径 13.4 器高 2.7 底径 8.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	にぶい橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
53-2	杯	口径 13.0 器高 3.1 底径 9.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が外反する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
53-3	杯	口径 11.6 器高 3.5 底径 6.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がり気味。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
53-4	杯	口径 12.0 器高 3.6 底径 8.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がり気味。	緻密 砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
53-5	杯	口径 12.8 器高 3.7 底径 8.1	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がり気味。	緻密 砂粒 多 白色粒 多 金雲母 多	黄灰色	堅緻 良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器
53-6	杯	現存高 2.2 高台高 0.9 高台径 7.9	体部との境に幅5mm程の高台をハの字に貼り付ける。高台端部はナデで平坦にしている。	砂粒 多 白色粒 多 金雲母 多 角セン石 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け
53-7	蓋	現存高 2.1	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。天井部は低い。	砂粒 多 白色粒 多 金雲母 多 角セン石 少	橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	ヨコナデ	○土師器 ○外面に暗文

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
53-8	甕	口径 21.0 現存高 3.2	頸部で屈曲した後、口縁部が短かく外側に開く。端部はやや尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 小石 少	にぶい橙色	良好	ナデ	ナデ	○土師器
53-9	甕	口径 25.7 現存高 4.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反気味に大きく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
53-10	甕	口径 30.0 現存高 3.0	頸部で屈曲した後、口縁部が外反しながら大きく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 白色粒 多 金雲母 多 角セン石 多	黄橙色	良好	ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺5.80m、短辺5.34m、深さ0.40mを測り隅丸方形を呈する。主軸方位は、N−87゜30′−Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、東側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平されたり他の住居跡に切られていることからカマドの焚き口だけの検出で袖は残っていない。煙道部は、壁面より60cm程外に出ている。住居跡は、他の住居跡に切られていることから、硬化面や柱穴は検出されず、住居跡の柱数は不明であるが４本柱の住居跡と考えられる。

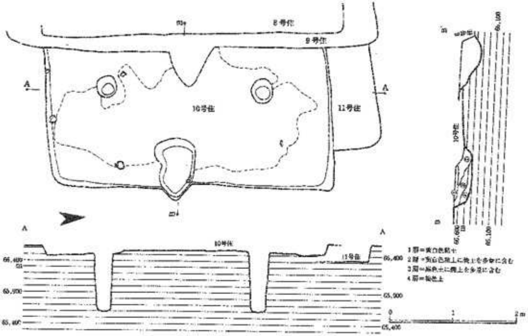
住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏や蓋、甕が出土している。出土した土師器の坏や蓋の殆どには赤色顔料が塗られている。

10号住居跡

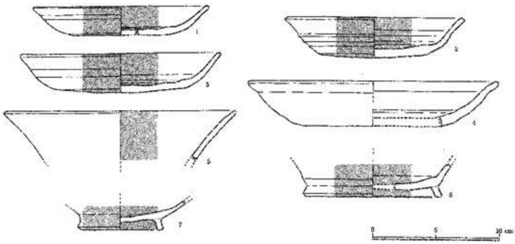
遺構（第54図）　遺物（第55図・第112図７・第19表・第43表７）

８−M−７グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、８号・９号・11号住居跡と切り合っており、新旧関係は８号・９号住居跡より古く、11号住居跡より新しい。住居跡の規模は、西側の約半分を他の住居跡により切られていることから正確には不明だが、残っていた東側の壁より一辺が4.50m程の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.40mを測る。主軸方位は、N−84゜00′−Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、東側壁面の中央から南寄りに作り付けのカマドが備えられているが、削平によりカマドの焚き口だけの検出で袖は残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁近くまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が北東コーナーと南東コーナーの壁近くに２本検出されたことから、４本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や椀、皿、甕等が出土している。出土した土師器の坏や椀、皿の殆どには赤色顔料



第54図　10号・11号住居跡実測図



第55図　10号住居跡内出土土器実測図

が塗られている。また、この中の土師器の坏か皿と考えられる底部片の外面に墨書が残るものが1点出土している。何が、墨書してあるかは不明である。

11号住居跡

遺構（第54図）

8－M－7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、8号・9号・10号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている4軒の住居跡の中では一番古い。住居跡は、その殆ど

第19表　10号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
55-1	坏	口径 14.0 器高 2.3 底径 7.9	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部で外傾する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
55-2	坏	口径 14.2 器高 3.2 底径 8.6	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部で外傾する。端部は平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多 白石粒 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
55-3	坏	口径 15.9 器高 3.1 底径 10.4	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸くなる。	砂粒 多 金雲母 多 白石粒 多 角セン石 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
55-4	坏	口径 19.8 器高 3.6 底径 10.6	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部で外傾する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白石粒 多 角セン石 少	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
55-5	椀	口径 16.4 現存高 3.9	体部は外反しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。底部は欠失する。	砂粒 多 金雲母 多 白石粒 多	赤褐色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
55-6	坏	現存高 2.7 高台高 0.8 高台径 11.0	体部は直線的に立ち上がる。体部との境にハの字状に高台を貼り付ける。端部は丸味をもつ。口縁部は欠失する。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○内外面に赤色顔料塗布
55-7	坏	現存高 2.4 高台高 0.9 高台径 6.8	長方形の高台を底部との境にハの字に貼り付ける。端部はナデで平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○高台貼り付け ○内外面に赤色顔料塗布

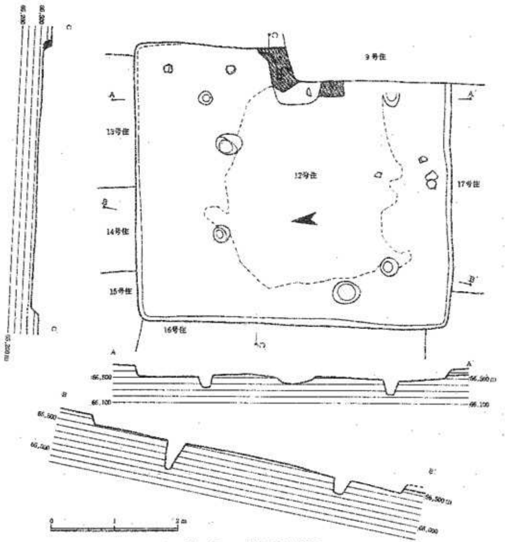
を他の住居跡に切られ、壁が残っていないことから正確な規模や形態、主軸方位は不明である。主軸方位は、切り合っている10号住居跡や他の住居跡とほぼ同じかあるいは直交するものと考えられる。住居跡の形態は、隅丸方形か隅丸長方形であろう。また、カマドの形態や位置、柱数も不明で、硬化面も全く確認されなかった。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏や蓋、甕が出土している。出土した土師器の坏や蓋の殆どには赤色顔料が塗られている。

12号住居跡

遺構（第56図）　遺物（第57図・第20表）

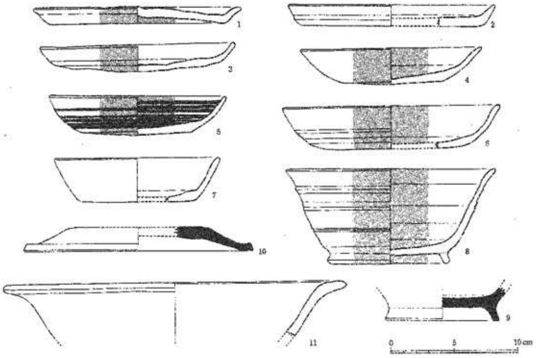
8－M－6・7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、9号・13号・14号・15号・16号・17号・18号住居跡と切り合っており、新旧関係は9号住居跡より古く、13号・14号・15号・16号・17号・18号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.98m、短辺4.40m、深さ



第56図　12号住居跡実測図

0.42mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－85° 00′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、東側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、カマド部分の残存状態が悪いことから不明である。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が柱穴付近まで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が各コーナー近くに4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、他の住居跡に比べ遺物の出土量は多いが、殆どが細片で図化できたものは少ない。遺物は、須恵器や土師器の坏や椀、皿、甕、高坏、甑が出土している。出土した土師器の坏や椀、皿の殆どには赤色顔料が塗られている。



第57図　12号住居跡内出土土器実測図

第20表　12号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
57－1	皿	口径 16.4 器高 1.4 底径 14.0	体部は短かく直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
57－2	皿	口径 16.3 器高 1.7 底径 14.0	体部は短かく直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸みをもつ。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
57－3	皿	口径 15.5 器高 2.3 底径 10.5	体部は内彎しながら短かく立ち上がり口縁部に至る。端部に丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
57－4	坏	口径 14.3 器高 2.9 底径 8.0	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
57－5	坏	口径 14.0 器高 3.3 底径 8.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内外面に暗文
57－6	坏	口径 17.2 器高 3.4 底径 11.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
57-7	杯	口径 13.6 器高 3.5 底径 9.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤橙色	不良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
57-8	椀	口径 16.6 器高 7.5 高台高 0.9 高台径 9.7	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸味をもつ。体部との境にハの字状に高台を貼り付ける。端部は平坦である。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
57-9	杯	現存高 2.7 高台高 1.1 高台径 8.9	体部との境に高い高台をハの字状に貼り付ける。端部は平坦にしている。	緻密 砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	灰色	堅緻良好	ナデ 底部 回転ヘラ切り	ナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
57-10	蓋	口径 18.2 器高 1.9	口縁部は屈曲し、明瞭な段を有する。端部は尖がる。	緻密 砂粒 多 金雲母 多	灰白色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
57-11	甕	口径 25.4 現存高 6.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が緩かく外反する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多 小石 少	淡赤橙色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

13号住居跡

遺構（第58図）　遺物（第59図・第21表）

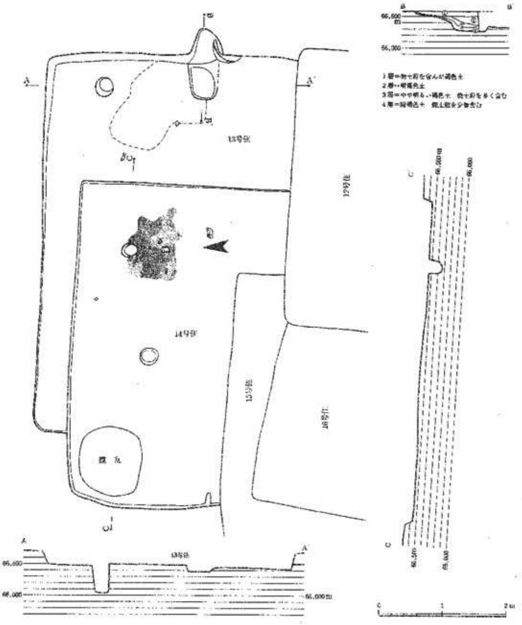
7－M－94・95、8－M－6・7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、12号・14号・15号・16号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている5軒の住居跡の中では一番古い。住居跡は、北側の壁が残っているだけで、他の壁は残っていないことから規模は不明だが、長辺6.00m、短辺5m前後の隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.48mを測る。主軸方位はN－82°30′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、東側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平によりカマドの焚き口だけの検出であり袖は残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、硬化面がカマド付近に一部確認出来るだけである。住居跡の柱数は、他の住居跡に切られ殆ど検出出来なかったが北東コーナー近くに1個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の杯や皿、蓋、甕が出土している。出土した土師器の杯や皿、蓋の殆どには赤色顔料が塗られている。

14号住居跡

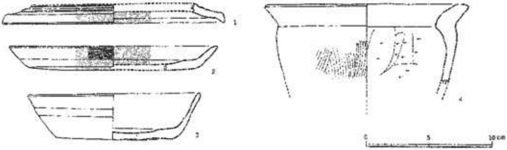
遺構（第58図）　遺物（第60図・第22表）

7－M－94・95、8－M－6・7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、12号・13号・15号・16号住居跡と切り合っており、新旧関係は12号・15号・16号住居跡より古く、13号



第58図　13号・14号住居跡実測図

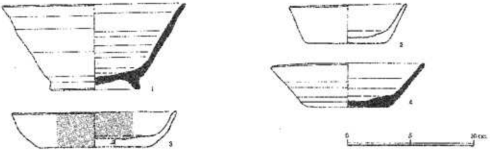
住居跡より新しい。住居跡は、北側の壁が残っているだけで、他の壁は残っていないことから規模は不明だが、長辺5.14m、短辺５m前後の隅丸方形を呈するものと考えられ、深さは0.26mを測る。主軸方位は、N－87゜30′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡は、その殆どが他の住居跡に切られていることからカマドは確認出来ないが、西側の壁面に黄色粘土が一部残っていることから、西側壁面にカマドが備えられていた可能性が高い。住居跡内には、硬化面は確認出来なかった。住居跡の柱数は、北西コーナー付近が攪乱を受け柱穴が



第59図　13号住居跡内出土土器実測図

第21表　13号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
59－1	蓋	口径 9.4 器高 2.0	口縁部が直下に屈曲し、明瞭な段を有する。端部は尖がり気味。	砂粒 白色粒 多 少	赤褐色	良好	ナデ 天井部 ヘラ削り	ナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
59－2	皿	口径 16.4 器高 1.9 底径 13.0	体部は短かく直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
59－3	坏	口径 13.8 器高 3.9 底径 9.2	体部は直線的に立ち上がり、あまり外側に開かない。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
59－4	甕	口径 16.2 現存高 6.1 胴部径 14.3	頸部でゆるく屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外に開く。端部はやや尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	黄赤橙色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器



第60図　14号住居跡内出土土器実測図

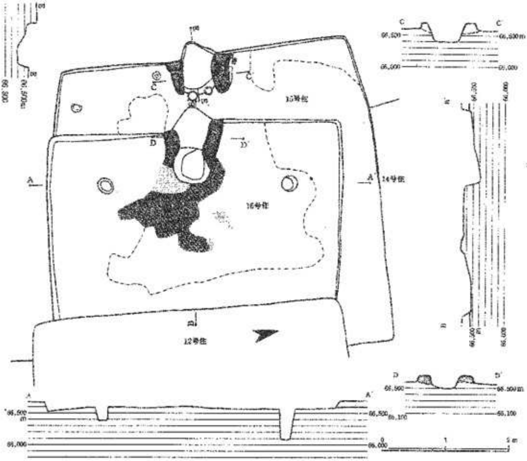
第22表　14号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
60－1	碗	口径 14.5 器高 6.8 高台高 0.8 高台径 7.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。体部との境に高台をハの字状に貼り付ける。端部はナデて平坦にしている。	緻密 砂粒 少 金雲母 多 白色粒 多	灰色	堅緻 良好	ナデ 底部 回転ヘラ切り	ナデ	○気泡跡 ○高台貼り付け
60－2	坏	口径 9.2 器高 3.2 底径 3.4	体部は直線的に立ち上がり、あまり外側に開かない。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
60-3	坏	口径 13.0 器高 2.8 底径 8.4	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部はやや尖がり気味。	砂粒 少 金雲母 多 角セン石 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
60-4	坏	口径 12.2 器高 3.5 底径 6.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。器壁は薄い。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰色	堅緻良好	ナデ 底部 回転ヘラ切り	ナデ	○須恵器

検出出来なかったが、北東コーナー近くに1個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が



第61図　15号・16号住居跡実測図

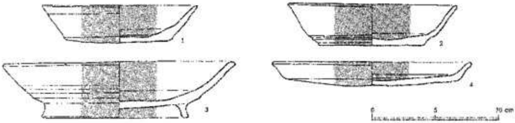
塗られている。

15号住居跡

遺構（第61図）　遺物（第62図・第23表）

7－M－95、8－M－6グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、12号・13号・14号・16号住居跡と切り合っており、新旧関係は12号・16号住居跡より古く、13号・14号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.95m、短辺4.54m、深さ0.30mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－77°00′－Wである。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁の近くまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が全く検出されなかったことから不明だが、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や皿、甕が出土している。出土した土師器の坏や皿の殆どには赤色顔料が塗られている。



第62図　15号住居跡内出土土器実測図

第23表　15号住居跡内出土土器観察表

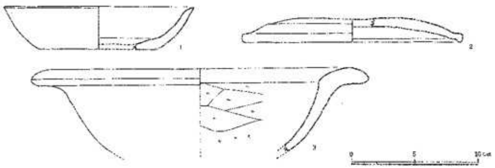
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
62-1	坏	口径 12.4 器高 3.1 底径 8.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖り気味。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○完形品
62-2	坏	口径 13.4 器高 3.4 底径 8.4	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で直線的になる。端部は丸くなる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
62-3	坏	口径 16.4 器高 4.5 高台幅 1.1 高台径 11.7	体部はやや内湾気味に立ち上がり、大きく外側に開く。端部はナデて平坦にしている。体部との境には、高い高台を「ハ」の字状に貼り付ける。	砂粒 少 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○完形品
62-4	皿	口径 15.8 器高 2.0 底径 13.8	体部は短かく直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。端部は丸くなる。	砂粒 少 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○完形品

16号住居跡

遺構（第61図）　遺物（第63図・第24表）

8－M－6グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、12号・13号・14号・15号住居跡と切り合っており、新旧関係は12号住居跡より古く、13号・14号・15号住居跡より新しい。住居跡は、東側部分を12号住居跡によって切られていることから、正確な規模は不明だが、長辺4.66m、短辺4.50m前後で隅丸方形を呈するものと考えられる。深さは、0.36mを測る。主軸方位は、N－84°00′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド付近まで広がっている。住居跡の柱数は、北西と南西コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、蓋、鉢、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀、蓋の殆どには赤色顔料が塗られている。



第63図　16号住居跡内出土土器実測図

第24表　16号住居跡内出土土器観察表

挿図番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
63-1	坏	口径 15.0 器高 3.4 底径 9.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖り気味。	砂粒 多 雲母片 多	黄赤褐色	良	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○土師器
63-2	蓋	口径 17.4 器高 1.9	口縁部が短かく直下に屈曲し、明瞭な段を有する。端部は丸味をもち、天井部は低い。	砂粒 多 雲母片 多 白色粒 多 小石 少	黄赤褐色	良好	ロクロナデ 天井部 ヘラ削り	ロクロナデ	○土師器
63-3	鉢	口径 26.8 現存高 6.7	頸部で屈曲した後、口縁部がほぼ真横に外反しながら開く。端部は丸味をもつ。	砂粒 多 雲母片 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

17号住居跡

遺構（第64図）

8－M－6・7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、8号・9号・12号・18号住居跡と切り合っており、新旧関係は8号・9号・12号住居跡より古く、18号住居跡より新しい。住居跡は、その殆どを他の住居跡に切られ、壁が残っていないことから正確な規模や形態、主軸方位は不明である。主軸方位は、切り合っている12号住居跡や他の住居跡とほぼ同じか直交するものと考えられる。住居跡の形態は、隅丸方形か隅丸長方形であろう。また、カマドの形態や位置、柱数も不明で、硬化面は壁際まで広がっているのが確認出来た。

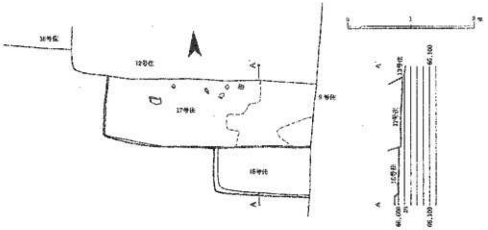
住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の甕が出土している。

18号住居跡

遺構（第64図）

8－M－7グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、8号・9号・17号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている4軒の住居跡の中では一番古い。住居跡は、その殆どを他の住居跡に切られ、壁が残っていないことから正確な規模や形態、主軸方位は不明である。主軸方位は、切り合っている17号住居跡や他の住居跡とほぼ同じか直交するものと考えられる。住居跡の形態は、隅丸方形か隅丸長方形であろう。また、カマドの形態や位置、柱数も不明で、硬化面も全く確認されなかった。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の甕が出土している。



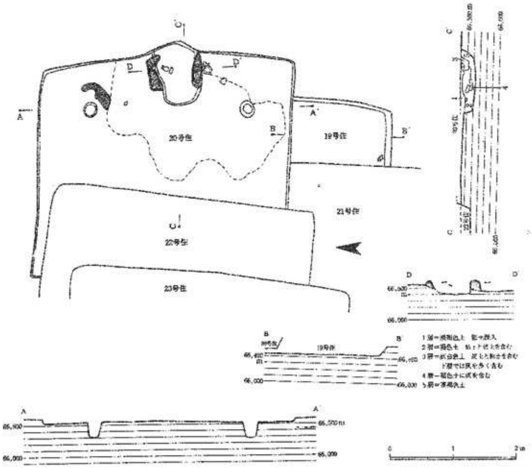
第64図　17・18号住居跡実測図

19号住居跡

遺構（第65図）

7－M－96グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、20号・21号・22号・23号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている5軒の住居跡の中では一番古い。住居跡は、その殆どを他の住居跡に切られ、壁が残っていないことから正確な規模や形態、主軸方位は不明である。主軸方位は、切り合っている20号住居跡や他の住居跡とほぼ同じか直交するものと考えられる。住居跡の形態は、隅丸方形か隅丸長方形であろう。また、カマドの形態や位置、柱数も不明で、硬化面も全く確認されなかった。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏と甕が出土している。



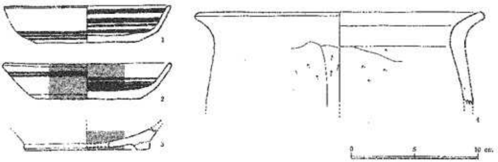
第65図　19号・20号住居跡実測図

20号住居跡

遺構（第65図）　遺物（第66図・第25表）

7－M－96グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、19号・21号・22号・23号住居跡と切り合っており、新旧関係は22号・23号住居跡より古く、19号・21号住居跡より新しい。住居跡は、西側部分を22号住居跡により切られているが、南西コーナーを検出することが出来たことから規模は判明した。住居跡の規模は、長辺3.94m、短辺3.32m、深さ0.18mを測り隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－88°30′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、東側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド付近まで広がっている。住居跡の柱数は、北東コーナーと南東コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や椀、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が塗られており、坏にはヘラ削りの暗文が施されているものも認められる。



第66図　20号住居跡内出土土器実測図

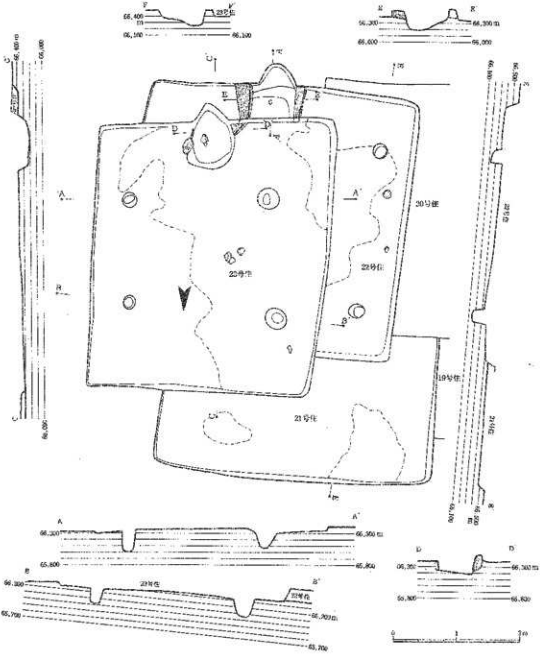
第25表　20号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
66－1	坏	口径 13.2 器高 2.9 底径 8.0	体部は内湾しながら立ち上がり、縁部に至る。端部は丸味を帯びる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	淡赤褐色	良	ヨコナデの後ヘラ削りの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ削りの暗文	○土師器 ○内外面に暗文
66－2	坏	口径 13.4 器高 2.9 底径 7.6	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 小石 少	赤褐色	良好	ヨコナデの後ヘラ削りの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ削りの暗文	○土師器 ○内外面に暗文 ○内外面に赤色顔料塗布 ○完形品
66－3	杯	現存高 1.6 高台高 0.5 高台径 10.0	体部との境に幅1㎜程の低い高台をハの字状に貼り付ける。端部は平坦である。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布 ○高台貼り付け
66－4	甕	口径 23.0 現存高 7.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外側に開く。端部が丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

21号住居跡

遺構（第67図）　遺物（第68図・第26表）

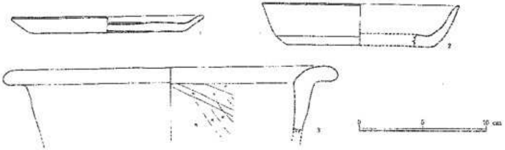
7－M－96・97、8－M－4・5グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、19号・20号・22号・23号住居跡と切り合っており、新旧関係は20号・22号・23号住居跡より古く、19号



第67図　21号・22号・23号住居跡実測図

住居跡より新しい。住居跡は、その殆どを他の住居跡に切られ、北側壁が残るだけであることから、正確な規模や形態、主軸方位は不明であるが、一辺4.36m程の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは、0.24mを測り、主軸方位は切り合っている23号住居跡や他の住居跡とほぼ同じか直交するものと考えられる。また、カマドの形態や位置、柱数も不明で、硬化面は壁際に一部確認された。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏と椀、皿、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀、蓋の殆どには赤色顔料が塗られている。



第68図　21号住居跡内出土土器実測図

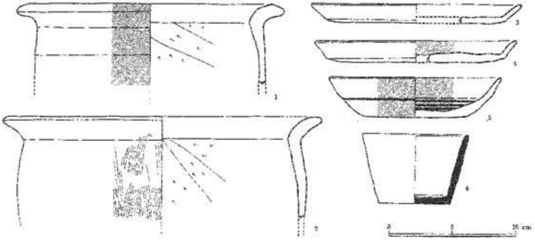
第26表　26号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
68－1	皿	口径 18.2 器高 1.3 底径 11.4	体部は短かく直線的に立ち上がり大きく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
68－2	坏	口径 15.6 器高 3.3 底径 11.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部が直線的になる。端部は尖り気味。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤褐色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
68－3	甕	口径 26.6 現存高 5.0	胴部で屈曲した後、口縁部が外反しながらほぼ真横に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	淡黄褐色	良好	ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

22号住居跡

遺構（第67図）　遺物（第69図・第27表）

7－M－96・97グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、19号・20号・21号・23号住居跡と切り合っており、新旧関係は23号住居跡より古く、19号・20号・21号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.34m、短辺4.24m、深さ0.36mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－01° 30′ －Wで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、南側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。



第69図　22号住居跡内出土土器実測図

第27表　22号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
69-1	甕	口径 11.2 現存高 6.3	頸部で湾曲した後、口縁部が短かく外反しながら外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
69-2	甕	口径 25.3 現存高 8.1	頸部で湾曲した後口縁部が短かく外反しながら外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	淡赤橙色	良	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
69-3	皿	口径 16.6 器高 1.5 底径 14.2	体部は短かく直線的に外側に開く。端部がやや尖り気味。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
69-4	皿	口径 16.0 器高 1.7 底径 13.8	体部は短かく外反しながら外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内面に赤色顔料塗布
69-5	坏	口径 13.6 器高 3.2 底径 8.4	体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が直線的になる。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内外面に暗文
69-6	小型椀	口径 8.4 器高 5.6 底径 5.6	体部は直線的に立ち上がり、端部は丸い。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器

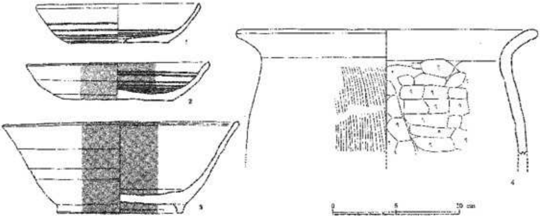
煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁際まで広がっている。住居跡の柱数は、北西と南西コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や皿、小型椀、甕が出土している。出土した土師器の坏や皿の殆どには赤色顔料が塗られており、坏にはヘラ削りの暗文が施されているものも認められる。

23号住居跡

遺構（第67図）　遺物（第70図・第112図10・第28表・第43表10）

7－M－96・97グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、19号・20号・21号・22号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている5軒の住居跡の中では一番新しい。住居跡の規模は、長辺4.38m、短辺3.74m、深さ0.42mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－01°30′－Wで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、南側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られているが残存状態は悪い。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁際まで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4調検出されたことから、4本柱の住居跡である。



第70図　23号住居跡内出土土器実測図

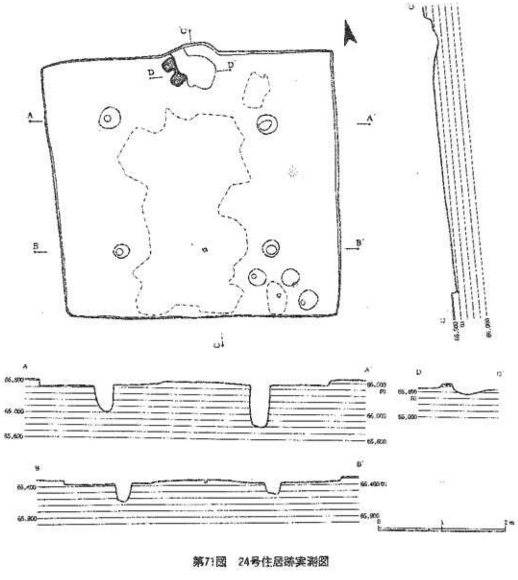
第28表　23号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
70－1	坏	口径 13.0 器高 3.1 底径 7.8	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部はやや尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文
70－2	坏	口径 14.6 器高 3.1 底径 8.6	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部が外反する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内外面に暗文 ○ほぼ完形品
70－3	椀	口径 18.8 器高 7.3 高台高 0.7 高台径 10.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。器壁は薄い。体部との境には低い高台を真下に向けて貼り付ける。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
70－4	甕	口径 23.8 現存高 9.9	頸部で屈曲した後口縁部がやや外反気味に外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、蓋、鉢、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が塗られており、坏にはヘラ磨きの暗文が施されているものも認められる。また、この中の土師器の坏底部片の外面に墨書の残るものが1点出土している。何が、墨書されているかは不明である。

24号住居跡

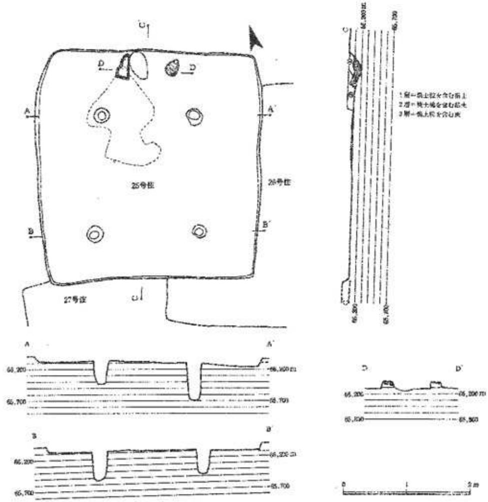
遺構（第71図）



第71図　24号住居跡実測図

8－M－5グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺4.58m、短辺4.20m、深さ0.30mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－11°30′－Eである。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られているが残存状態は悪い。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡には、固く踏み締められた硬化面が壁際まで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や椀、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の外面には赤色顔料が塗られている。



第72図　25号住居跡実測図

25号住居跡

遺構（第72図）

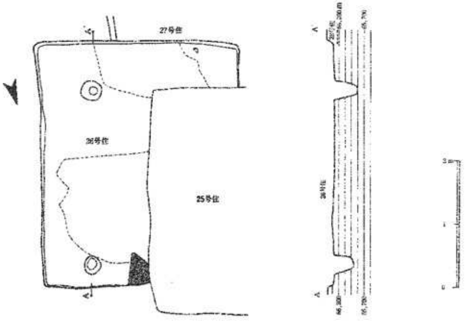
8－M－25グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、26号・27号・28号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている4軒の住居跡の中では一番新しい。住居跡の規模は、長辺3.64m、短辺3.54m、深さ0.28mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－18° 30′－Eである。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られているが残存状態は悪い。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド付近まで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や甑、甕が出土している。

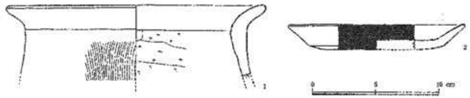
26号住居跡

遺構（第73図）　遺物（第74図・第29表）

8－M－25・36グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、25号・27号・28号住居跡と切り合っており、新旧関係は25号住居跡より古く、27号・28号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.90m、短辺3.20m、深さ0.34mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－19° 00′－Eである。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られているが、その殆どを25号住居跡により壊されている。



第73図　26号住居跡実測図



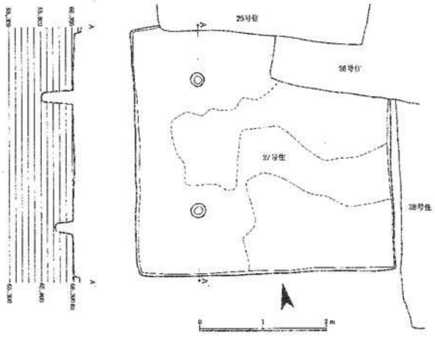
第74図　26号住居跡内出土土器実測図

第29表　26号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
74-1	甕	口径 20.6 現存高 5.7	頸部で屈曲した後、口縁部が直線的に短かく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少 角セン石 多	淡赤褐色	良	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
74-2	皿	口径 14.0 器高 2.0 底径 10.6	体部は直線的に立ち上がり、短かく大きく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 小石 少	茶褐色	普通	ヨコナデ 胴部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に黒漆塗布

住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド付近まで広がっている。住居跡の柱数は、北東コーナーと南東コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や蓋、椀、甕が出土している。



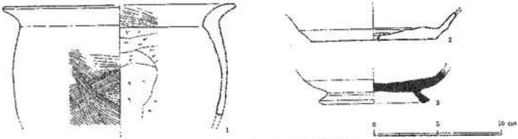
第75図　27号住居跡実測図

27号住居跡

遺構（第75図）　遺物（第76図・第30表）

8－M－25・36・37グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、25号・26号・28号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている住居跡の中では一番古いが、28号住居跡とは確認できる部分が直接切り合っていないことから、新旧関係は不明である。住居跡の規模は、長辺4.02m、短辺3.98m、深さ0.26mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－06° 30′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡からは、残っている壁面にカマドが検出されなかったことから、他の住居跡に切られている北側壁面にカマドが備えられていたものと考えられる。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が壁付近まで広がっている。住居跡の柱数、北東コーナーと南東コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、皿、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が塗られている。



第76図　27号住居跡内出土土器実測図

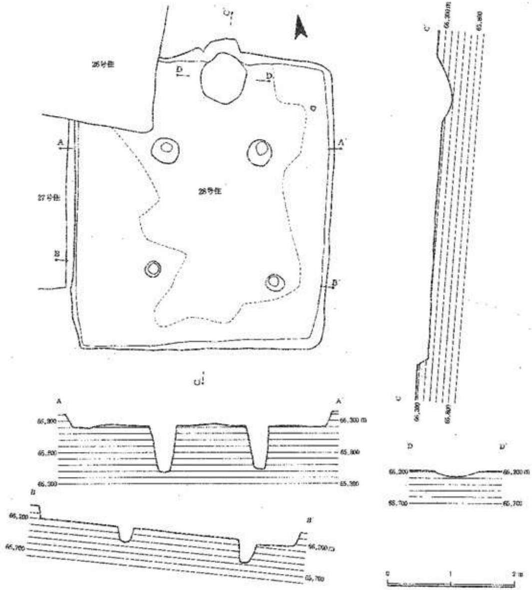
第30表　27号住居跡内出土土器観察表

挿図番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
76－1	甕	口径 18.4 現存高 9.0 胴部径 16.8	頸部で屈曲した後、口縁部は短かく外反しながら大きく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤橙色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
76－2	坏	現存高 2.1 底径 9.6	体部は直線的に立ち上がる。口縁部は欠失する。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
76－3	坏	現存高 2.3 高台高 0.9 高台径 8.7	体部は内湾しながら立ち上がり、体部との境には高い高台をハの字状に貼り付ける。	緻密 砂粒 多 金雲母 多	灰色	堅緻良好	ナデ 底部 回転ヘラ切り	ナデ	○須恵器 ○高台貼り付け

28号住居跡

遺構（第77図）

8－M－25・36グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、25号・26号・27号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている住居跡の中では一番古いが、27号住居跡とは確認できる部分が直接切り合っていないことから、新旧関係は不明である。住居跡の規模は、長辺4.62m、短辺4.06m、深さ0.42mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－11° 15′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平によりカマドの焚き口だけの検出であり袖は残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド付



第77図　28号住居跡実測図

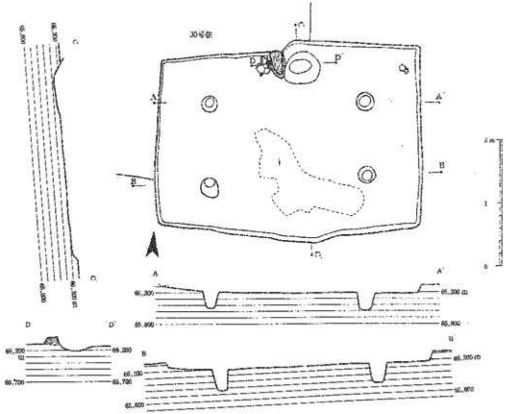
近まで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や椀、蓋、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が塗られている。

29号住居跡

遺構（第78図）　遺物（第114図1～4・第44表1～4）

8－M－24・27グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、30号住居跡と切り合っており、新旧関係は30号住居跡より古い。31号住居跡とは、直接切り合っていないことから新旧関係は不明である。住居跡の規模は、長辺4.20m、短辺3.20m、深さ0.32mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－03°00′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。しかし、削平によりカマドの残存状態は悪い。煙道部は、壁面より



第78図　29号住居跡実測図

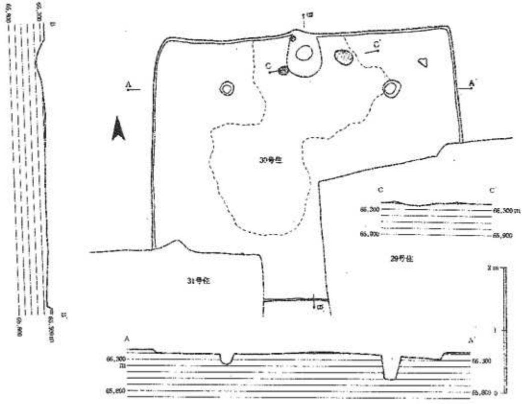
若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められて硬化面が南側の壁近くに若干確認された。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。長方形住居の場合は、短辺の壁にカマドが付くのが普通であるが、当住居跡は長辺の壁の中央にカマドが付いている。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や椀、甕が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が塗られている。また、土器の他に当住居跡からは鉄製刀子が2点と不明鉄製品が2点出土している。

30号住居跡

遺構（第79図）　遺物（第80図・第114図5・第31表・第44表5）

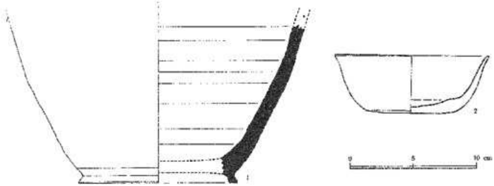
8－M－24・37グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、29号・31号住居跡と切り合っており、新旧関係は29号・31号住居跡より古い。住居跡の規模は、長辺4.76m、短辺4.30m、深さ0.30mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－01°30′－Eで、ほぼ南北に主軸を



第79図　30号住居跡実測図

取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られているが、残存状態が悪く炊き口と袖の一部しか残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、北西コーナーと北東コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、蓋、鉢、甕が出土している。また、土器の他に当住居跡からは不明鉄製品が1点出土している。



第80図　30号住居跡内出土土器実測図

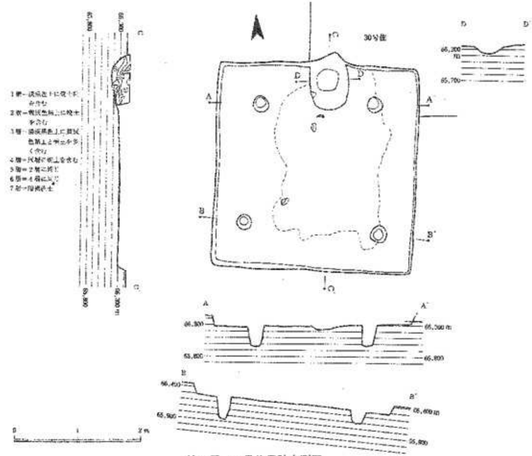
第31表　30号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
80－1	甕	現存高 12.3 高台高 0.6 高台径 12.6	胴部は内湾気味に立ち上がる。胴部より上は欠失する。底部には低い高台をハの字に貼り付ける。端部はナデて平坦にしている。	微密 砂粒 多 金雲母 多	灰白色	堅緻 良好	ナデ	ナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
80－2	坏	口径 12.2 器高 4.6 底径 6.8	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部は丸い。	砂粒 多 角閃石 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○土師器

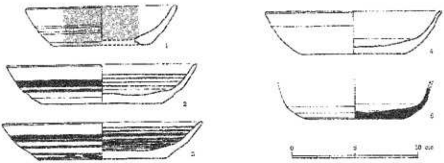
31号住居跡

遺構（第81図）　遺物（第82図・第112図11・第32表・第43表11）

8－M－23・24・37・38グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、30号住居跡と切り合っており、新旧関係は30号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺3.28m、短辺3.18m、深さ0.34mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－03° 30′ －Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平により炊き口のみの検出でカマドの袖は全く残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がって



第81図　31号住居跡実測図



第82図　31号住居跡内出土土器実測図

いる。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、甕、鉢、甑が出土している。出土した土師器の坏や椀の殆どには赤色顔料が塗られており、坏にはヘラ削りの暗文が施されているものも認められる。また、この中の器種不明の土師器底部片の外面に墨書の残るものが1点出土している。何が、墨書されているかは不明である。

第32表　31号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
82-1	坏	口径 12.0 器高 3.1 底径 7.7	体部は内弯しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
82-2	坏	口径 14.0 器高 3.4 底径 8.2	体部は内弯しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は尖り気味。	砂粒 多 金雲母 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文
82-3	坏	口径 15.8 器高 2.9 底径 10.0	体部は内弯気味に立ち上がり、大きく外側に開く。端部はやや尖り気味。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文
82-4	坏	口径 15.0 器高 3.1 底径 9.6	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部が若干外反する。端部は尖る。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少 角セン石 少	淡黄褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
82-5	坏	現存高 2.5 底径 7.2	体部は内弯しながら立ち上がる。器壁は薄い。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	黄灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器

32号住居跡

遺構（第83図）

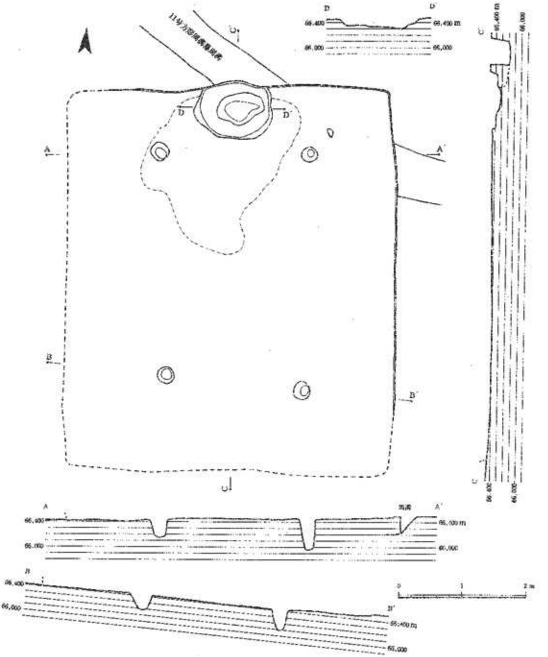
7－M－82・83グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡は、他の住居跡とは切り合っていないが、11号方形周溝墓と切り合っており周溝が完全に埋まった後建てられている。住居跡の規模は、削平が著しく西側と南側の壁が残っていないことから不明であるが、検出されたカマドや柱穴の位置から長辺5.20m前後で短辺4.50mの隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは2cm程で殆ど残っていない。主軸方位は、N－02° 15′ －Wで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平により焚き口のみの検出でカマドの袖は全く残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の甕が出土している。

33号住居跡

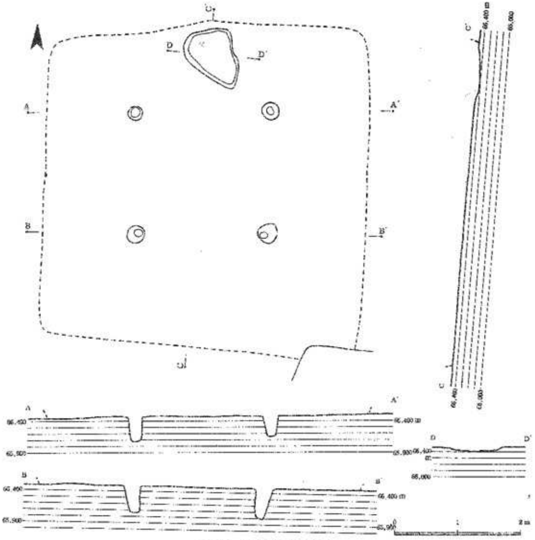
遺構（第84図）

7－M－83・96グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、削平が著しく壁が全く残っていないことから不明であるが、検出されたカマドや柱穴の位置から一辺5 m



第83図　32号住居跡実測図

程で隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方位は、N－03°00′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平により焚き口のみの検出でカマドの袖は全く残っていない。住居跡内には、硬化面は全く認められず、住居跡の柱数は各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。



第84図　33号住居跡実測図

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の杯や甕が出土している。

34号住居跡

遺構（第85図）　（第114図6・第44表6）

7－M－97・98グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、35号・36号・37号・38号住居跡と切り合っており、新旧関係は36号・37号住居跡より古く、35号・38号住居跡より新しい。住居跡は、南側壁を他の住居跡により切られていたが、一部残っていたことから規模は判明した。住居跡の規模は、長辺5.48m、短辺4.90m、深さ0.18mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－03°30′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側

壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマドや壁近くまで広がっている。住居跡内の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や碗、蓋、皿、甕が出土している。出土した土師器の坏や碗の殆どには赤色顔料が塗られている。他に鉄鏃が1点出土している。

35号住居跡

遺構（第85図）

7－M－97グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、34号・36号・37号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている住居跡の中では一番古い。住居跡は、西側と南側壁を他の住居跡により切られていることから規模は不明であるが、一辺5m程で隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは0.14mを測る。主軸方位は、N－23° 30′ －Wである。住居跡には、北側壁面の中央から東寄りの所に作り付けのカマドが備えられていたものと考えられるが、他の住居跡に切られ殆ど残っていない。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、北東コーナー近くに柱穴が1個検出されたとから、4本柱の住居跡と考えられる。

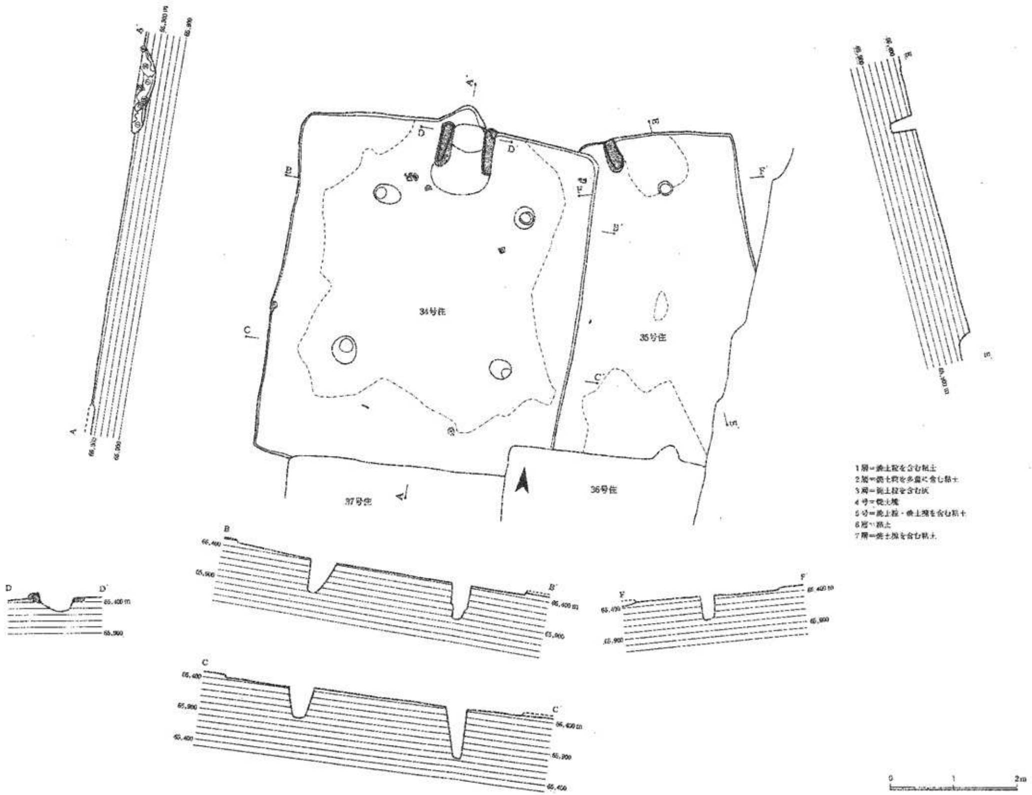
住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏や甕が出土している。

36号住居跡

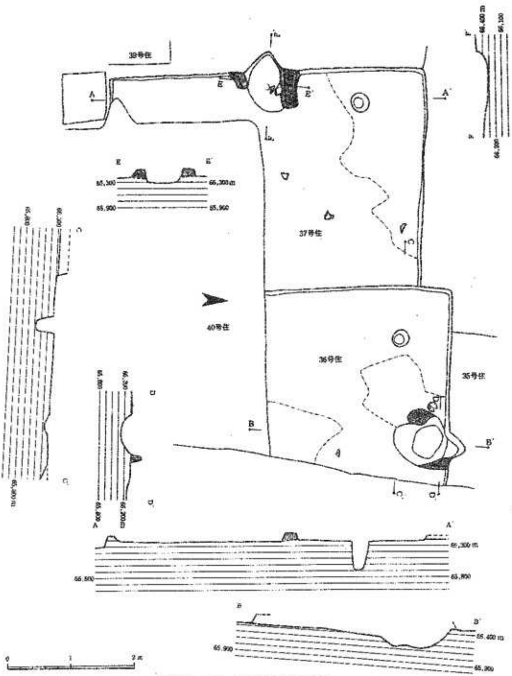
遺構（第86図）

7－M－97・98グリッドに、検出された住居跡である。住居跡は、34号・35号・37号・40号住居跡と切り合っており、新旧関係は40号住居跡より古く、34号・35号・37号住居跡より新しい。住居跡は、殆どの部分を削平されたり他の住居跡に切られていることから規模は不明である。形態は、隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは0.26mを測る。主軸方位は、N－03° 00′ －Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡には、固く踏み締められた硬化面がカマド近くに確認された。住居跡の柱数は、北西コーナー近くに柱穴が1個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無い



第85図　34号・35号住居跡実測図



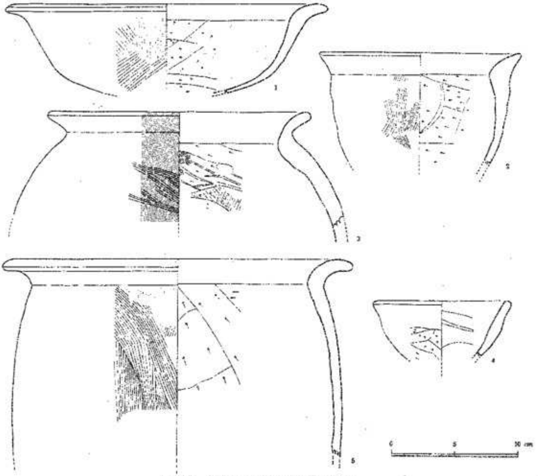
第86図　36号・37号住居跡実測図

が、土師器の甕が出土している。

37号住居跡

遺構（第86図）　遺物（第87図・第33表）

7－M－98、8－M－3グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、34号・36号・38号・



第87図　37号住居跡内出土土器実測図

40号住居跡と切り合っており、新旧関係は36号・40号住居跡より古く、34号・38号住居跡より新しい。住居跡は、殆どの部分を他の住居跡に切られていることから規模は不明であるが、一辺が５ｍ程の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは0.24ｍを測る。主軸方位は、N－88°15′－Eで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央には作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマドや壁面近くまで広がっている。住居跡の柱数は、北西コーナー近くに柱穴が１個検出されたことから、４本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、土師器の坏や蓋、鉢、甕が出土している。

第33表　37号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
87－1	浅鉢	口径 25.5 現存高 7.2	頸部で屈曲した後、口縁部が短かく水平近くに外反しながら開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多 小石 少	淡赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
87－2	甕	口径 16.0 現存高 8.9 胴部径 14.2	頸部で屈曲した後、口縁部が短かく直線的に開く。端部は丸い。	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 少	淡赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
87－3	甕	口径 21.0 現存高 8.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が短かく外反しながら、外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 小石 少	赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布
87－4	鉢	口径 11.0 現存高 4.4	体部は外側に開きながら直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部はナデで丸味をもつ。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	ヘラ削りの後ナデ	○土師器
87－5	甕	口径 27.8 現存高 15.8 胴部径 26.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が短かく外反しながら外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少 小石 少	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

38号住居跡

遺構（第88図）

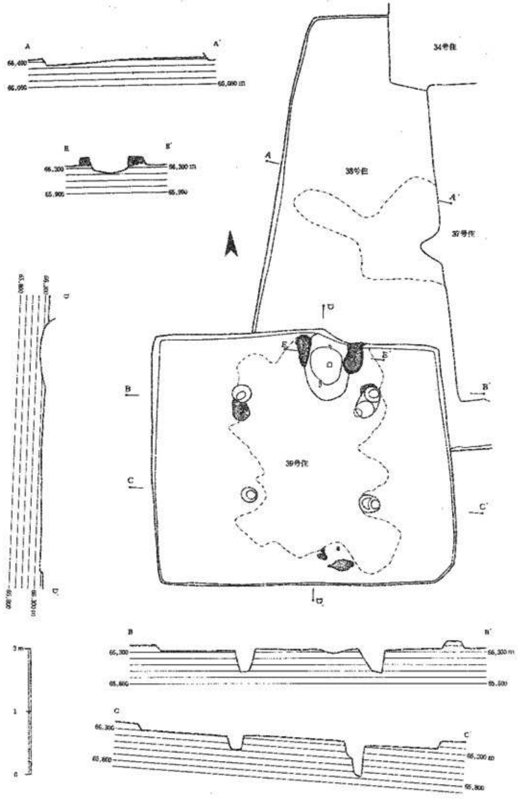
7－M－98、8－M－3グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、34号・37号・49号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている住居跡の中では一番古い。住居跡は、殆どの部分を他の住居跡に切られていることから規模は不明であるが、一辺5.16m程の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは0.24mを測る。主軸方位は、カマドの検出が無いことから不明で、37号住居跡とほぼ同じか直交する建物であろう。住居跡内からは、カマドや柱穴の検出は無いが、硬化面は壁面近くまで広がっているのが確認された。住居跡の柱数は4本柱であろう。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏や甕が出土している。

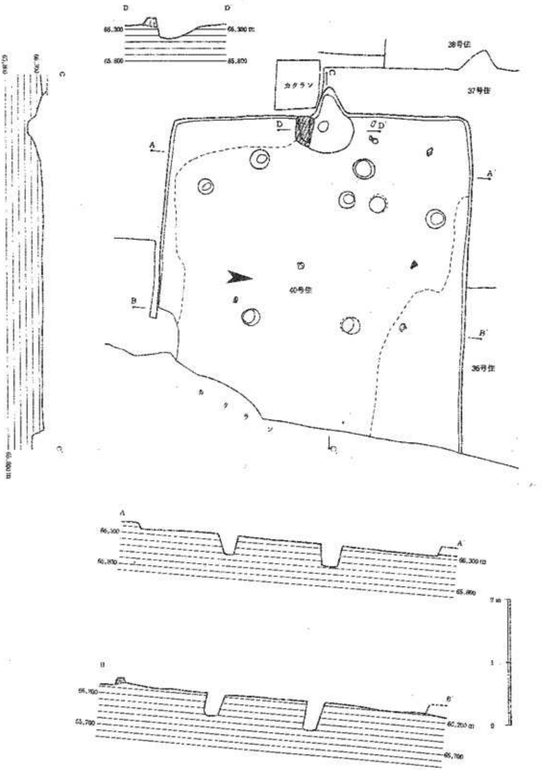
39号住居跡

遺構（第88図）

7－M－98、8－M－3グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、38号住居跡と切り合っており、新旧関係は38号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺4.76m、短辺4.02m、深さ0.30mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－83°15′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面の中央から東側寄りに作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出



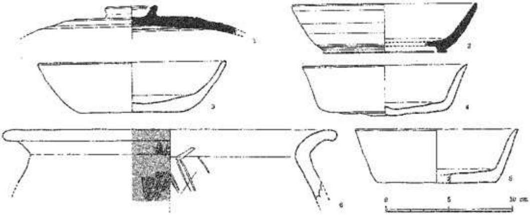
第88図　38号・39号住居跡実測図



第89図　40号住居跡実測図

ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や甕が出土している。



第90図　40号住居跡内出土土器実測図

第34表　40号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
90-1	蓋	現存高 2.4 つまみ径 4.1 つまみ高 0.9	天井部に輪状つまみを有する。	緻密 砂粒 多 金雲母 多	淡灰褐色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
90-2	坏	口径 14.6 器高 3.9 高台高 0.5 高台径 4.8	体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部はやや尖がり気味。体部との境には幅が広く低い高台を貼り付ける。	緻密 砂粒 多 金雲母 多	灰白色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
90-3	坏	口径 14.8 器高 4.0 底径 8.2	体部は内彎しながら立ち上がりそのまま口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 少 金雲母 多	淡黄褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
90-4	坏	口径 13.0 器高 4.0 底径 9.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。体部はあまり外側に開かない。端部は尖がる。	砂粒 少 金雲母 多 白色粒 少	淡赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
90-5	坏	口径 12.8 器高 4.2 底径 9.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。体部はあまり外側に開かない。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
90-6	甕	口径 26.5 現存高 5.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反しながら短かく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡赤褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目の後ナデ	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器 ○外面に赤色顔料塗布

40号住居跡

遺構（第89図）　（第90図・第34表）

7－M－97・98、8－M－3・4グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、36号・37号住居跡と切り合っており、新旧関係は切り合っている住居跡の中では一番新しい。住居跡は、東側が削平されていることから正確な規模は不明だが、長辺5.50m前後で短辺4.70mの隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.26mを測る。主軸方位は、N－89° 00′－Eでほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より40cm程外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマドや壁面近くまで広がっている。住居跡の柱数は、不明だが4本柱の住居跡と考えられる。

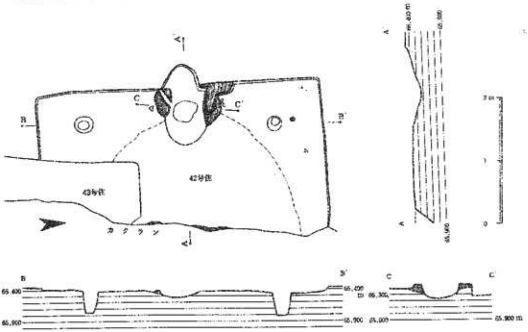
住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や蓋、椀、甕が出土している。須恵器蓋の天井部に、輪状つまみが付いたものが1点出土している。また、出土した土師器の坏の殆どには赤色顔料が塗られている。

41号住居跡

欠番

42号住居跡

遺構（第91図）　（第92図・第35表）



第91図　42号住居跡実測図

8－M－3・4グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、43号住居跡と切り合っており、新旧関係は43号住居跡より古い。住居跡は、東側の半分程が削平されていることから不明だが、一辺4.54m前後の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.22mを測る。主軸方位は、N－86° 15′ －Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より40cm程外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面がカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、北西コーナーと南西コーナー近くに柱穴が2個検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の杯や蓋、甕が出土している

第92図　42号住居跡内出土土器実測図

第35表　42号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
92－1	杯	口径 15.0 器高 3.4 底径 8.4	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸味をおびる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 小石 多	淡橙褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
92－2	蓋	口径 13.1 器高 2.9	口縁部は直下に屈曲し、明瞭な段を有する。天井部は高い。端部は尖がっている。	緻密 砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	青灰色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器

43号住居跡

遺構（第93図）

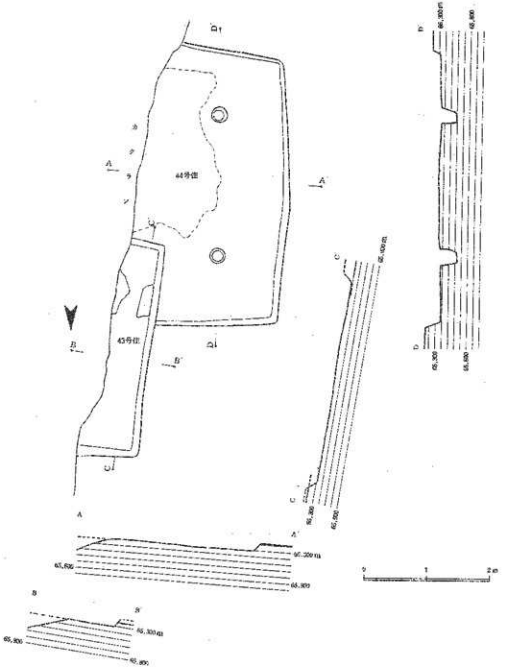
8－M－3・4・17・18グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、42号・44号住居跡と切り合っており、新旧関係は42号・44号住居跡より新しい。住居跡は、大半を削平されていることから正確な規模は不明だが、一辺3.50m前後の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.32mを測る。主軸方位は、カマドの検出が無いことから不明で、42号住居跡とほぼ同じか直交する建物であろう。住居跡内からは、カマドや硬化面それに柱穴は検出されなかったが、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の杯や甕が出土している。

44号住居跡

遺構（第93図）

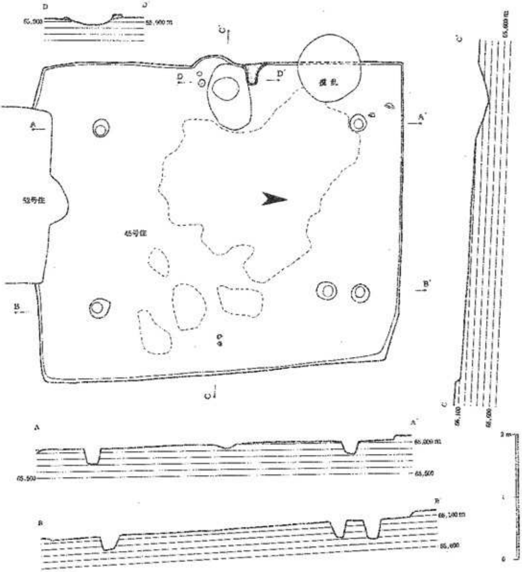
8－M－4・17・18グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、43号住居跡と切り合っており、新旧関係は43号住居跡より古い。住居跡は、東側の半分程が削平されていることから



第93図　43号・44号住居跡実測図

不明だが、一辺4.42m前後の隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられ、深さは0.38mを測る。主軸方位は、カマドの検出が無いことから不明で、42号住居跡とほぼ同じか直交する建物であろう。住居跡からは、カマドの検出は無いが、柱穴付近まで広がる硬化面を確認している。住居跡の柱数は、北西コーナーと南西コーナー近くに柱穴が２本検出されたことから、４本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や椀、甕が出土している。



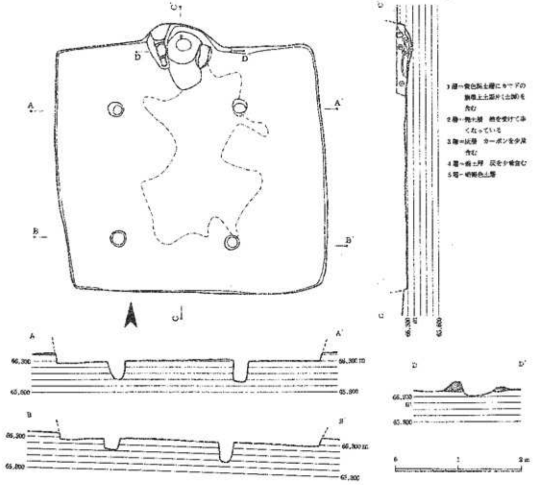
第94図　45号住居跡実測図

45号住居跡

遺構（第94図）

調査区の一番西側で、8－L－10グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、52号住居跡と切り合っており、新旧関係は52号住居跡より古い。住居跡の規模は、長辺5.90m、短辺5.08m、深さ0.26mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－89°00′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められて硬化面がカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4本検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の杯や蓋、甕が出土している。



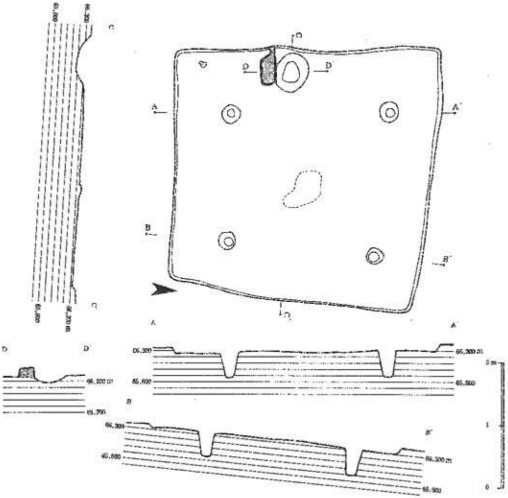
第95図　46号住居跡実測図

46号住居跡

遺構（第95図）

8－M－18・19グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺4.30m、短辺4.00m、深さ0.40mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－01°00′－Wで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4本検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、須恵器や土師器の坏や甕が出土している。出土した土師器坏の殆どには、赤色顔料が塗ら



第96図　47号住居跡実測図

れている。

47号住居跡

遺構（第96図）　遺物（第97図・第36表）

8－M－2グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺4.28m、短辺3.94m、深さ0.44mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－88° 00′－Eで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている程度である。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央付近に狭い範囲で確認されただけである。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4本検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や蓋、甕が出土している。出土した土師器坏の殆どには、赤色顔料が塗られている。

第97図　47号住居跡内出土土器実測図

第36表　47号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
97－1	坏	口径 15.0 器高 5.2 底径 9.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がり気味。体部は深く、あまり外側に開かない。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	赤橙色	良好	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	○土師器
97－2	蓋	口径 13.6 現存高 1.8	口縁部は真下に屈曲し、明瞭な段を有する。端部は尖がる。天井は低い。	緻密 砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	灰色	堅緻 良好	ロクロナデ 天井部 ヘラ削り	ロクロナデ	○須恵器

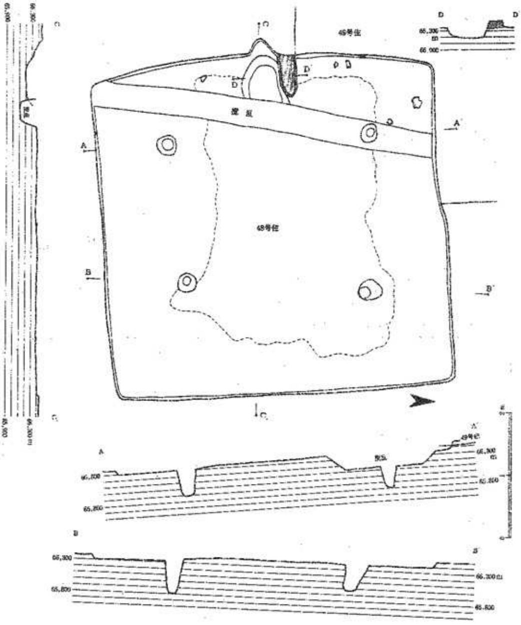
48号住居跡

遺構（第98図）　遺物（第99図・第37表）

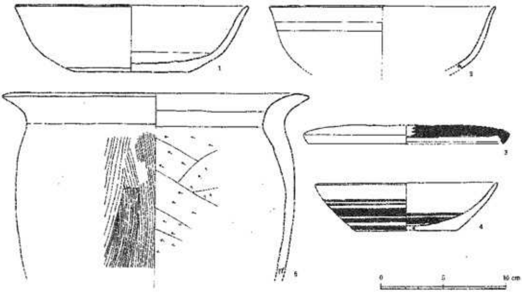
7－M－98・99、8－M－2・3グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、49号住居跡と切り合っており、新旧関係は49号住居跡より新しい。住居跡の規模は、長辺5.50m、短辺5.42m、深さ0.40mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－83° 00′－Eで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えら

れており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4本検出されたことから4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や蓋、椀、甕が出土している。出土した土師器坏の殆どには、赤色顔料が塗ら



第98図　48号住居跡実測図



第99図　48号住居跡内出土土器実測図

第37表　48号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（㎝）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
99-1	椀	口径 18.6 器高 5.4 底径 9.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で若干外傾する。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡赤橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
99-2	椀	口径 18.1 現存高 5.0	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で若干外傾する。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
99-3	蓋	口径 16.6 器高 1.5	口縁部が直下に屈曲し、明瞭な段を有する。天井部は低い。端部は尖がる。	緻密 砂粒 多 金雲母 少 白色粒 多	灰白色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部 ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
99-4	坏	口径 14.5 器高 3.8 底径 8.0	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 小石 少	淡赤褐色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	○土師器 ○内外面に暗文
99-5	甕	口径 24.6 現存高 14.1 胴部径 22.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が外反しながら短かく外側に開く。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 少 白色粒 多 小石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

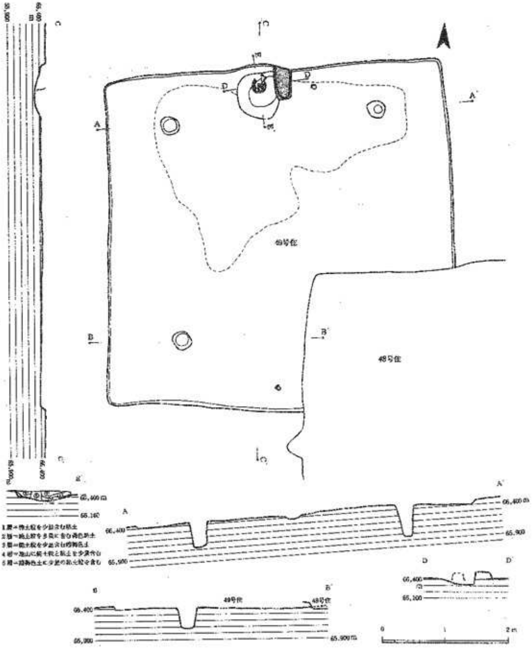
れ、またヘラ磨きの暗文を施した坏も出土している。

49号住居跡

遺構（第100図）　遺物（第101図・第38表）

7－M－99グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、48号住居跡と切り合っており、新旧関係は48号住居跡より古い。住居跡の規模は、長辺5.52m、短辺5.42m、深さ0.30mを測

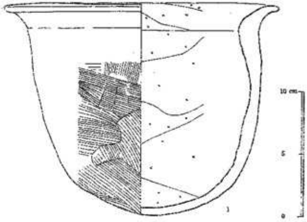
り、隅丸方形を呈する。48号住居跡と、同規模である。主軸方位は、N－05°15′－Wで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出る程度である。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、北東コーナーや北西コーナー、それに南西コーナー近くに柱穴



第100図　49号住居跡実測図

が3本検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や蓋、甕が出土している。出土した土師器坏の殆どには、赤色顔料が塗られている。カマド内からは、甕が口縁部を下にして置かれた状態で出土した。支脚として利用されたのであろうか。



第101図　49号住居跡カマド内出土土器実測図

第38表　49号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
101—1	甕	口径 22.0 器高 37.5	頸部で屈曲した後、口縁部が外反しながら緩やかに外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 小石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器

50号住居跡

遺構（第102図）

7－M－82・99グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺4.64m、短辺4.46m、深さ0.18mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－89° 00′－Wで、ほぼ東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出る程度である。住居跡内には、硬化面が中央付近と壁際に若干認められるだけである。住居跡の柱数は、南東コーナーや北西コーナー、それに南西コーナー近くに柱穴が3本検出されたことから、4本柱の住居跡と考えられる。北東コーナーの柱穴は、攪乱され残っていなかった。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏や甕が出土している。出土した土師器の坏の殆どには赤色顔料が塗られている。

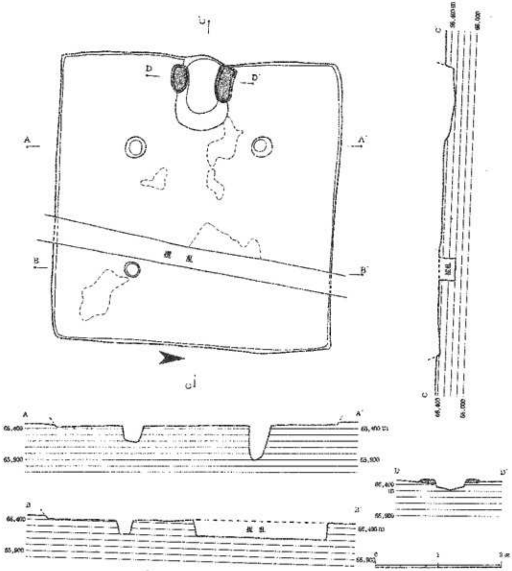
51号住居跡

遺構（第103図）

7－M－81・82・99・100グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺5.46m、短辺5.06m、深さ0.24mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－77° 00′

−Wである。住居跡には、西側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられており、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出る程度である。住居跡内には、硬化面がカマド付近に若干認められるだけである。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4本検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、また細片であることから図化できたものは無いが、土師器の坏や甕が出土している。

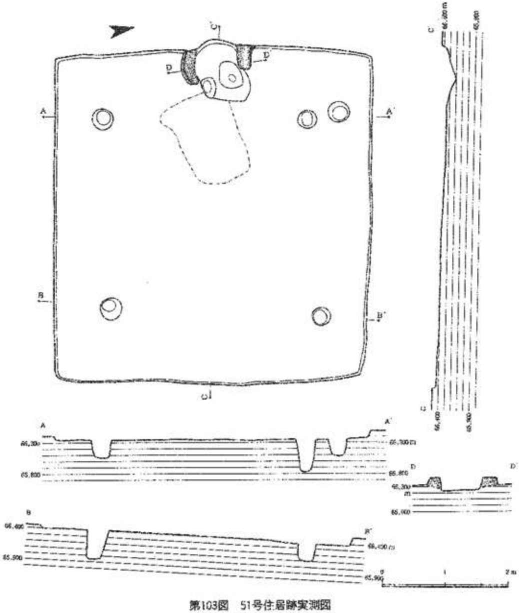


第102図　50号住居跡実測図

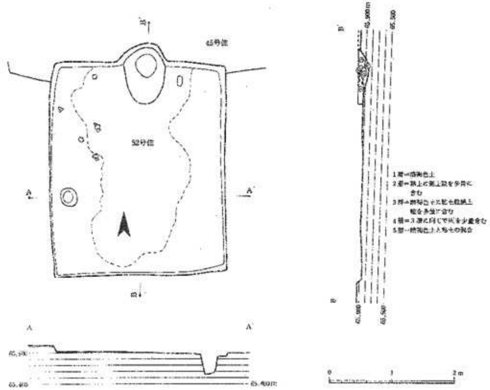
52号住居跡

遺構（第104図）　遺物（第105図・第39表）

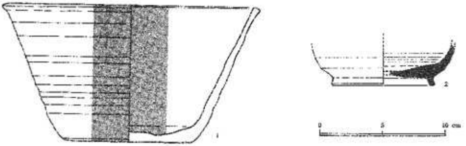
8－L－10・11グリッドに検出された住居跡である。住居跡は、45号住居跡と切り合っており、新旧関係は45号住居跡より新しい。住居跡の規模は、他の住居跡に比べ小型で長辺3.42m、短辺2.80m、深さ0.38mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N－02°00′－Eでほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、炊き口だけの検出で袖は残っていない。カマドの袖は、炊き口の近くに黄色



第103図　51号住居跡実測図



第104図　52号住居跡実測図



第105図　52号住居跡内出土土器実測図

第39表　52号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
105-1	鉢	口径 20.6 器高 11.0 底径 10.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。端部はナデで平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	淡赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転へラ切りの後ナデ	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
105-2	坏	現存高 3.1 高台高 0.6 高台径 8.5	体部は内湾しながら立ち上がる。体部との境に低い高台をハの字状に貼り付ける。端部は平坦にしている。	緻密 砂粒 多 白色粒 多	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転へラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け

粘土が一部残っていたことから、他の住居跡と同様に黄色粘土を持ち込んで作られていたものと考えられる。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬

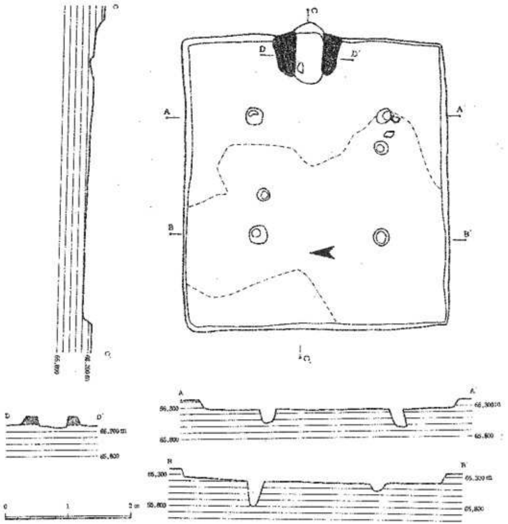
化面がカマド付近にまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が全く検出されなかったことから不明である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や椀、鉢、甕が出土している。出土した土師器の坏や鉢の殆どには、赤色顔料が塗られている。

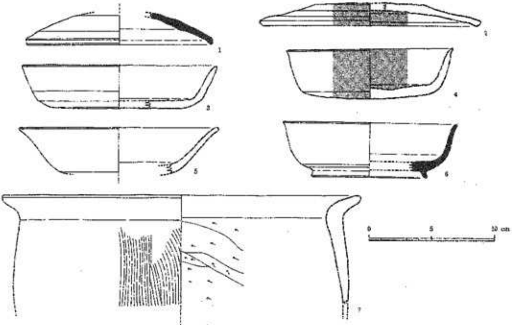
53号住居跡

遺構（第106図）　遺物（第107図・第40表）

8－M－1・2グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺4.72m、



第106図　53号住居跡実測図



第107図　53号住居跡内出土土器実測図

第40表　53号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
107-1	蓋	口径 15.0 現存高 2.5	口縁部が屈曲し明瞭な段を有する。端部は尖がる。	緻密 砂粒 多 金雲母 少 白色粒 少	灰色	堅緻良好	ヨコナデ 天井部ヘラ削り	ヨコナデ	○須恵器
107-2	蓋	口径 17.6 器高 1.8	口縁部は屈曲せずそのまま端部に至る。端部は丸い。天井部は低くヘラ削りにより平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 天井部ヘラ削り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
107-3	坏	口径 15.6 器高 3.5 底径 11.0	体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 少	淡黄褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器
107-4	坏	口径 13.3 器高 4.0 底径 10.8	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する。体部はあまり外側に開かない。端部は尖がる。	砂粒 多 金雲母 多 小石 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
107-5	坏	口径 16.0 現存高 3.7	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で短かく外反する。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多	赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	○土師器
107-6	坏	口径 14.0 器高 4.4 高台高 0.6 高台径 9.2	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。体部はあまり外側に開かない。端部は尖がる。体部との境には、低い高台をハの字状に貼り付ける。	緻密 砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	灰白色	堅緻良好	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器 ○高台貼り付け
107-7	甕	口径 28.7 現存高 8.7	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 多	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器

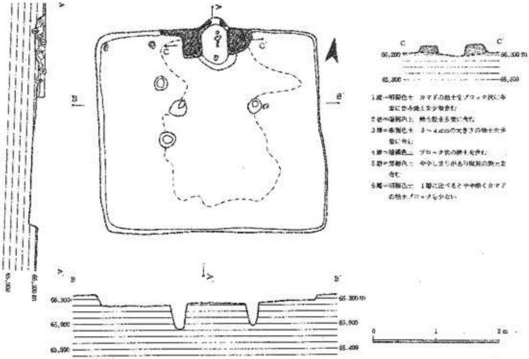
短辺4.42m、深さ0.42mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－90°00′－Eで、東西に主軸を取り建てられている。住居跡には、東側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央から壁面近くまで広がっている。住居跡の柱数は、各コーナー近くに柱穴が4個検出されたことから、4本柱の住居跡である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や蓋、皿、甕が出土している。出土した土師器の坏や皿の殆どには、赤色顔料が塗られている。

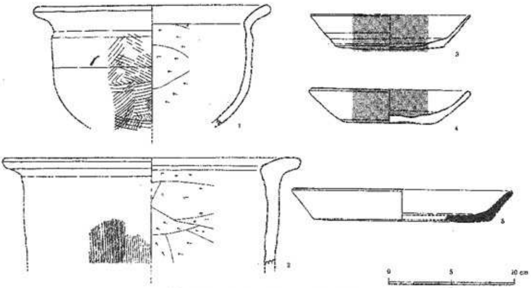
54号住居跡

遺構（第108図）　遺物（第109図・第113図12・第41表・第43表12）

8－M－1・2・19・20グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺3.62m、短辺3.24m、深さ0.42mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－06°00′－Wで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられ、カマドの袖は黄色粘土を持ち込んで作られている。煙道部は、壁面より若干外に出ている。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっ



第108図　54号住居跡実測図



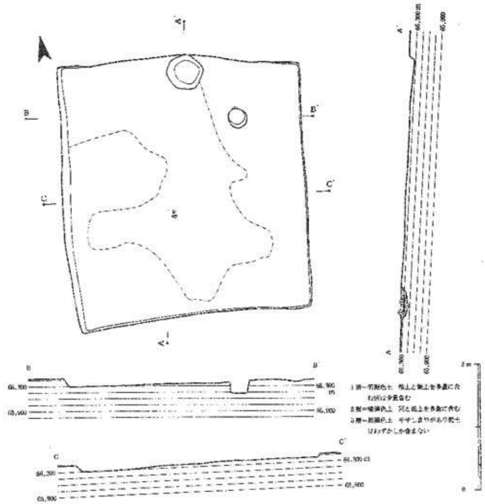
第109図　54号住居内出土土器実測図

第41表　54号住居跡内出土土器観察表

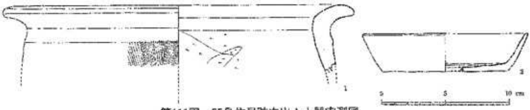
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
109-1	甕	口径 29.0 現存高 9.5 頸部径 16.0	頸部で屈曲した後、口縁部が短かくやや外反気味に外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 角セン石 多	淡赤橙色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
109-2	甕	口径 23.8 現存高 8.5	頸部で屈曲した後、口縁部が外反気味に短かく外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 多 小石 少	淡赤橙色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
109-3	坏	口径 12.8 器高 2.8 底径 8.8	体部は直線的に立ち上がり、そのまま端部に至る。端部は尖がり気味。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
109-4	坏	口径 12.9 器高 2.7 底径 7.4	体部は内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部はナデて平坦にしている。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 小石 少	赤褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
109-5	皿	口径 17.6 器高 2.6 底径 14.0	体部は短かく直線的に立ち上がりそのまま口縁部に至る。端部は丸い。	緻密 砂粒 多 白色粒 少	灰灰色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○須恵器

ている。住居跡の柱数は、柱穴が全く検出されなかったことから不明である。

住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や皿、甕が出土している。出土した土師器坏の殆どには、赤色顔料が塗られている。また、外面底部に田と墨書された土師器坏が1点出土している。



第110図　55号住居跡実測図



第111図　55号住居跡内出土土器実測図

第42表　55号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
111-1	甕	口径 27.8 現存高 6.4	頸部で屈曲した後、口縁部が短かく外反しながら外側に開く。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 多	淡黄褐色	良好	口縁部 ナデ 胴部 ハケ目	口縁部 ナデ 胴部 ヘラ削り	○土師器
111-2	坏	口径 13.1 器高 3.0 底径 10.0	体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	淡黄褐色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	○土師器

55号住居跡

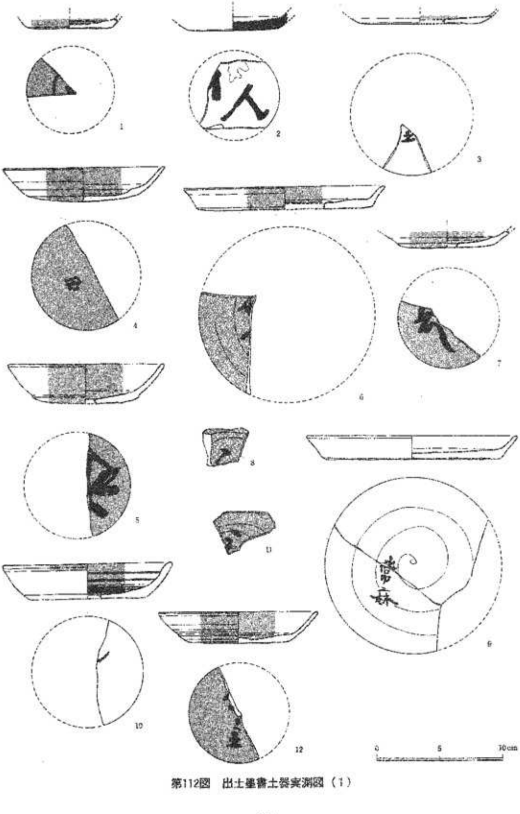
遺構（第110図）　遺物（第111図）

8－M－1・2・19・20グリッドに、単独で検出された住居跡である。住居跡の規模は、長辺4.00m、短辺3.90m、深さ0.20mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－09°15′－Eで、ほぼ南北に主軸を取り建てられている。住居跡には、北側壁面のほぼ中央に作り付けのカマドが備えられているが、削平され焚き口だけの検出で袖は全く残っていない。煙道部は、壁面より若干外に出ている程度である。住居跡内には、固く踏み締められた硬化面が中央からカマド近くまで広がっている。住居跡の柱数は、柱穴が全く検出されなかったことから不明である。

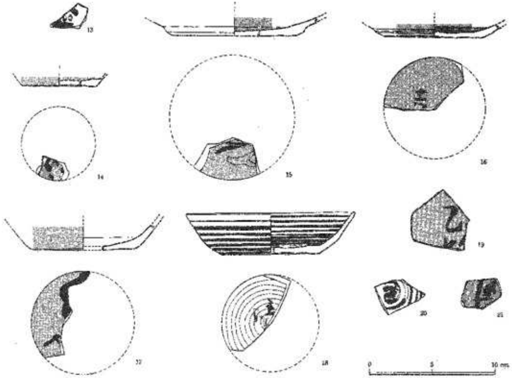
住居跡内からは、遺物の出土が少量であり、殆どが細片で図化できたものは少ないが、須恵器や土師器の坏や甕が出土している。出土した土師器坏の殆どには、赤色顔料が塗られている。

第43表　出土墨書土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
112－1	坏?	現存高 0.8 底径 7.0	坏か皿の底部片 底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	2号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112－2	坏?	現存高 1.4 底径 7.2	坏か皿の底部片 底部外面に墨書 □入?	緻密 砂粒 多 金雲母 多	灰白色	堅緻良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	2号住居跡 ○須恵器
112－3	坏?	現存高 0.7 底径 5.2	坏か皿の底部片 底部外面に墨書 [十]	砂粒 多 金雲母 多	にぶい橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	2号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112－4	坏	口径 13.0 器高 2.7 底径 5.8	体部は内弯気味に外側に開きながら立ち上がり端部に至る。端部は丸い。底部外面に墨書 [田]	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多 角セン石 少	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	3号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112－5	坏	口径 12.4 器高 3.2 底径 5.5	体部は内弯しながら立ち上がり、端部に至る。端部は丸い。底部外面に墨書　不明	砂粒 多 白色粒 多 角セン石 多 小石 少	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	3号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112－6	皿	口径 16.2 器高 1.8 底径 14.0	体部は外反しながら短かく立ち上がり、端部に至る。端部は丸い。底部外面に墨書 不明	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	5号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112－7	坏?	現存高 1.3 底径 8.0	坏か皿の底部片 底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多 角セン石 少	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	10号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112－8	?		底部片 底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多	橙色	良好	回転ヘラ切り	ヨコナデ	8号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布



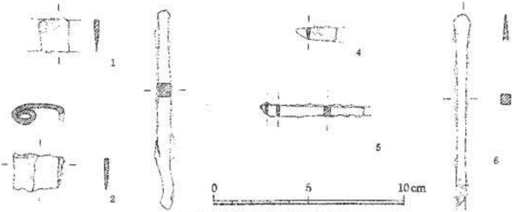
第112図　出土墨書土器実測図（1）



第113図　出土墨書土器実測図（2）

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
112-9	皿	口径 16.8 器高 1.9 底径 14.0	体部は直線的に短かく立ち上がり口縁部に至る。端部は丸い。底部外面に墨書 [常[illegible]]	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	7号住居跡 ○土師器
112-10	坏	口径 13.5 器高 2.8 底径 9.0	体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部が外反する。端部は丸い。底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	23号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内面に暗文
112-11	?		底部片 底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多	橙色	良好	回転ヘラ切り	ヨコナデ	31号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
112-12	坏	口径 12.8 器高 2.5 底径 8.0	体部は内弯気味に立ち上がり、端部に至る。端部は丸い。底部外面に墨書 [十]	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	橙色	良	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	54号住居跡 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
113-13	?		底部片 底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多	橙色	良好	回転ヘラ切り	ヨコナデ	1号方形周溝墓周溝内 ○土師器
113-14	坏?	現存高 0.7 底径 6.0	坏か皿の底部片 底部外面に墨書　不明	砂粒 多 金雲母 多	にぶい橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	1号方形周溝墓周溝内 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法		備考
							外面	内面	
113－15	坏?	現存高 1.5 底径 10.0	坏か皿の底部片 底部外面に墨書 不明	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	5号方形周溝墓周溝内 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
113－16	坏?	現存高 1.1 底径 8.2	坏か皿の底部片 底部外面に墨書 [illegible]	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	7号方形周溝墓周溝内 ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内面に暗文
113－17	坏?	現存高 1.9 底径 8.2	坏か皿の底部片 底部外面に墨書 不明	砂粒 多 金雲母 多	橙色	良好	ヨコナデ 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデ	8－M－37グリッド ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
113－18	坏	口径 13.6 器高 3.3 底径 8.0	体部は内弯しながら立ち上がり、端部に至る。端部は丸い。 底部外面に墨書 不明	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 少	橙色	良好	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文 底部 回転ヘラ切り	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	8－M－23グリッド ○土師器 ○内外面に暗文
113－19	?		底部片 底部外面に墨書 [illegible]?□	砂粒 多 金雲母 多 白色粒 多	赤色	良好	回転ヘラ切り	ヨコナデ	8－M－13グリッド ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布
113－20	?		底部片 底部外面に墨書 不明	砂粒 多 金雲母 多	にぶい橙色	良好	回転ヘラ切りの後ヘラ磨きの暗文	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	8－M－28グリッド ○土師器 ○内外面に暗文
113－21	?		底部片 底部外面に墨書 不明	砂粒 多 金雲母 多	にぶい橙色	良好	回転ヘラ切りの後ヘラ磨きの暗文	ヨコナデの後ヘラ磨きの暗文	8－M－16グリッド ○土師器 ○内外面に赤色顔料塗布 ○内外面に暗文



第114図　住居跡内出土土器実測図

第44表　住居跡内出土鉄器観察表

図版番号	出土遺構	器種	法量（cm）	特徴	備考
114－1	29号住居跡	刀子	現存長 1.5 幅 1.7 厚 0.2		両端欠失

図版番号	出土遺構	器種	法量（cm）	特徴	備考
114-2	29号住居跡	不明	現存長 2.7 幅 2.0 厚 0.2	右側部分欠失 両端を折り曲げている	小刀は刃部の棟に尖がる
114-3	29号住居跡	不明	全長 10.6 幅 0.7 厚 0.7	断面方形	
114-4	29号住居跡	刀子	現存長 2.7 幅 2.0 厚 0.2		刃部切先部分のみ残存
114-5	30号住居跡	不明	現存長 5.4 幅 0.6 厚 0.3		
114-6	34号住居跡	鉄鏃	現存長 10.2 幅 0.5 厚 0.5		茎部分一部を欠失

第Ⅴ章　まとめ

古墳時代

今回の調査区でも、この時代の遺構として11基の方形周溝墓の検出を見た。結果、平成元年からの調査と併せて今回の工事区域である台地上のほぼ全域に渡って、方形周溝墓が築造されていたことが判明した。今回は、方形周溝墓のみの検出であり、円墳等の埋葬遺構や竪穴住居跡などの遺構の検出は全く無かった。方形周溝墓は、その殆どがお互いに接した状態で築造されており、規模は10mから15mのものが一般的で、一番小さいものが一辺9m、一番大きなものが一辺20mを測る。主軸方位は、ばらばらであり規則性は認められないが、検出した主体部はだいたい東西に主軸を取り設けられている。

主体部は、石棺のものが3基と木棺のものが4基確認されており、残り4基は主体部は検出されなかった。石棺は、いずれも安山岩板石の箱式石棺で、2号方形周溝墓の石棺材は殆ど引き抜かれており、棺材の一部が残っているのみであったが、3号・7号方形周溝墓の石棺は非常に残存状態が良く、特に3号石棺の蓋石の上には棺内に土砂等が入り込まないよう黄色粘土で全体を覆っていた。7号方形周溝墓主体部の石棺も、検出時には蓋石の上に粘土は残っていなかったが、3号方形周溝墓の石棺と同じだったと考えられる。尚、3号方形周溝墓の主体部石棺内には、西側小口部の粘土枕の上に頭部を置いた人骨が1体検出され、7号方形周溝墓主体部石棺内には人骨が2体埋葬されており、頭が置かれていた部分にはそれぞれ粘土枕が作られていた。主体部が、木棺と考えられる方形周溝墓は4基認められたが、棺自体は腐朽し全く残っていなかったことから種類の特定はできないが、残っていた粘土郭の断面形状から1号・6号・9号方形周溝墓の主体部は割竹形木棺と判断した。棺の大きさは、1号方形周溝墓のものが最大で長さ2.79mを測り、6号のものが1.74m、9号のものが1.87mと小型である。4号方形周溝墓の主体部は、両側の小口部に溝が確認されたことから組合せ式の木棺と考えられ、形状は箱形を呈していたようである。棺の大きさは、長さが1.70mで、幅が0.30mを測る。主体部の作り方は、石棺のものはすべて共通しており楕円形または隅丸長方形の大きな墓壙を掘り込んだ後に棺の規模に合わせてさらに掘り込んでいる。木棺のものは、二種類認められ一つは前述の石棺と主体部の作り方は同じで、1号方形周溝墓の主体部が該当する。もう一つは、楕円形または隅丸長方形の墓壙を掘り込んだ後粘土郭を作り棺を置いたもので、6号と9号方形周溝墓の主体部が該当する。主体部の主軸方位は、石棺のものが3基共にほぼ同方向で一致しており、また木棺のものは石棺とは異なるが4基共にほぼ同方向で一致していることから、すべての方形周溝墓から主体部を検出できたわけでは無いが、主体部の築造に際しある程度方向性統一の意思が働いていた可能性を伺わせている。

築造時期は、時期を特定できるような土器の出土が一部の方形周溝墓からで、すべての方形周溝墓の築造時期を判断するのは困難であるが、土師器の特徴から4世紀後半から5世紀の中葉頃にかけて築造されたものと判断される。ただし、2号方形周溝墓出土の小型丸底壺や5号方形周溝墓出土の器台や高坏などにさらに古い様相を呈しているものも認められ、築造時期が4世紀中葉まで遡る可能性を示唆しておきたい。

奈良・平安時代

竪穴住居跡について

今回の調査地区からも、この時期の竪穴住居跡が数多く検出された。数は、54軒にのぼりその殆どが互いに切り合っており、多い所では11軒を数える。この時期の集落が、今回の調査地区にも検出されたことから、調査を行った6ヵ所全部の遺跡から調査され台地のほぼ全域に渡り営まれていることが確認された。住居跡の規模は、一辺が4mから5m程度のものが大半で一般的な規模の住居跡である。ただ、7号住居跡だけは他の住居跡に比べて一回り小さく一辺が2.5m前後を測るもので、一般的な住居とは考えにくいが、カマドが備えられていることから日常的な生活は不便なくできるように作られており、他の住居跡との機能的な差は認められない。柱穴は、基本的に4本で小型住居の7号住居跡だけ柱は2本である。カマドは、基本的には北側に備えられているものと西側に備えられているものが大半で54軒中46軒と約85%の割合を占め、残りの約15%は東側にカマドが備えられているもので5軒と不明3軒である。この中で、北側にカマドを備えている住居跡が25軒と全体の約46%で半数近くを占め、西側にカマドを備えている住居跡が21軒と全体の約39%である。住居跡のカマドの位置は、これまで調査を行ってきた同台地上の他の遺跡にも同じ傾向が認められることから、何かの要因が働いたものと考えられるが、それが建てられた住居の時期的な差によるものなのか、それとも立地場所によるものなのか（例えばこの地域の風向き）、建物の構造によるものなのか、いずれかははっきりしない。

遺構の時期は、土器の出土が全く無い住居跡が多いことから、検出したすべての住居跡の時期の特定をすることは困難であるが、出土土器の形態的特徴が前回に報告した八反田遺跡や八反畑遺跡と同じであることから7世紀後半から9世紀後半にかけ長期間営まれたものと考えられる。また、検出した竪穴住居のカマドの煙道部が壁より外に顕著にでないことや、重複の多さも前述の遺跡と類似しており、ほぼ同時期に営まれた集落であろう。

墨書土器について

墨書土器は、今回の調査区からも21点出土した。器種は、土師器の坏か皿で1点の須恵器坏が含まれる。墨書されている部位はすべて外面の底部である。墨書は、読めないものが大半で、

人名と考えられる「常麻」や「人」と書かれている物の他に、「志□」や「匹」、「□□王」、「□七」などと書かれたものも出土しているが意味は不明である。当遺跡からは、近くに所在する合志郡衙推定地との関連を伺わせるような資料の出土は残念ながら無かったが、少なくとも字の読み書きが出来る人物がこの集落に存在していたことは確実である。

調査の結果、迫原遺跡からは古墳時代の方形周溝墓11基と奈良・平安時代の竪穴住居跡54軒が検出された。今回の当遺跡の調査まで、同台地で6ヵ所の地点で発掘調査を実施したが、殆どの地点で環濠を巡らす弥生時代後期の竪穴住居跡群が検出されており、当然広がるものと考えていたが、今回の調査区からは遺構、遺物共に全く検出されなかった。しかし、当遺跡の東側で泗水町との町境に位置する高木原遺跡からは、弥生時代後期の遺物や竪穴住居跡が確認されていることから、さらに当台地上には合志川沿って東側にも複数の集落が存在したのは確実である。また、昭和58年に当遺跡の200m程東側で録畑の開墾中に発見調査され、箱式石棺の中から勾玉やガラス玉などの装飾品や鉄刀、鉄鏃それに鹿角装刀子・鉄鎌など多数の副葬品が出土した迫原石棺は、当時石棺部分だけの調査しか行われておらず、単独の箱式石棺と考えられていたが、今回の調査結果から見て方形周溝墓の可能性があることを示唆しておきたい。さらには、前述の高木原遺跡からも古式土師器が多量に採集されていることから方形周溝墓などの墳墓群がさらに東側へ広がるものと考えられる。今回の調査区も含め調査を行った他の遺跡から方形周溝墓など多くの墳墓が検出されたが、竪穴住居跡の検出は全く無かった。台地上には、これだけ多くの墳墓が築かれていることから近くに大規模な集落の存在が考えられ、いずれ調査の機会がおとずれるであろう。今後に期待したい。

報告書抄録

ふりがな	さこばるいせき
書名	迫原遺跡
副書名	生坪第三地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査
巻次	III
シリーズ名	熊本県西合志町文化財調査報告
シリーズ番号	第5集
編集者名	浦田信智
編集機関	西合志町教育委員会
所在地	〒861-11 熊本県菊池郡西合志町大字御代志1661-16　TEL 096(242)1111
発行年月日	1995年3月31日

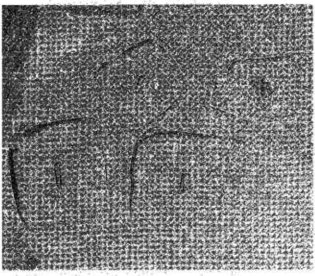
ふりがな 所集遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
迫原(さこばる)	熊本県(くまもとけん) 菊池郡(きくちぐん) 西合志町(にしごうしまち) 大字合生(おおあざあいおい) 字迫原(あざさこばる)	43407		30° 55′ 00″	130° 46′ 06″	19910722 ～ 19911024	約7,000	農業基盤整備事業に伴う事前調査

所集遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
迫原	古墳	方形周溝墓 11基	ガラス小玉 鉄器 古式土師器	主体部は木棺と箱式石棺の2種類
	奈良・平安	竪穴式住居 54軒	鉄器 須恵器 土師器	墨書土器

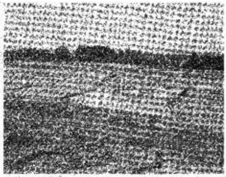
図　　版

石立遺跡遠景（東より）

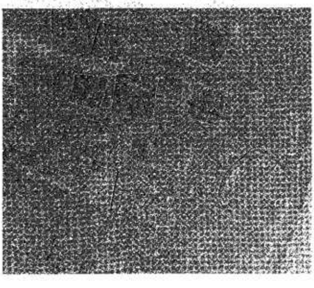
調査風景



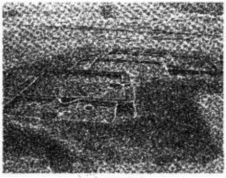
方形周溝墓群空中写真（1号～4号）



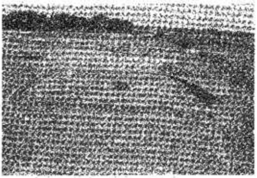
方形周溝墓群（4号～9号）



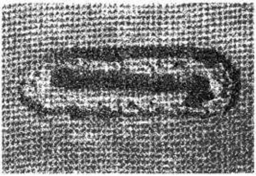
住居跡群空中写真



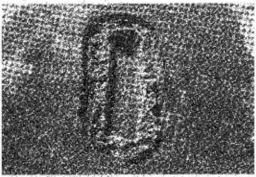
住居跡群



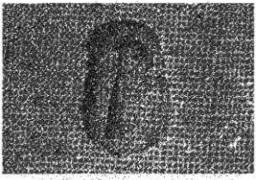
1号方形周溝墓



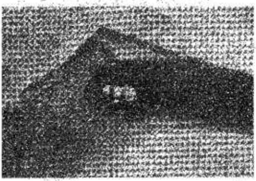
1号方形周溝墓主体部



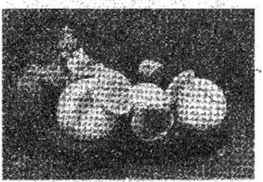
1号方形周溝墓主体部



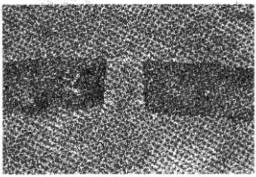
1号方形周溝墓主体部墓壙（粘土除去後）



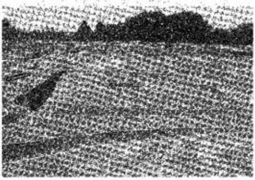
1号方形周溝墓遺物出土状況（陸橋部付近）



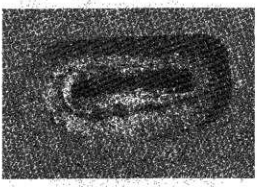
1号方形周溝墓遺物出土状況（陸橋部付近）



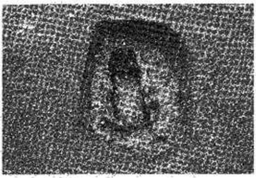
1号方形周溝墓遺物出土状況



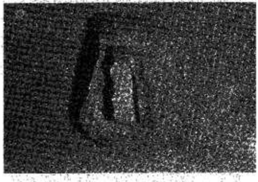
2号方形周溝墓



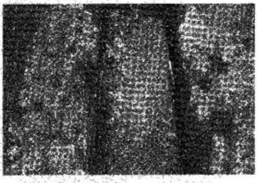
2号方形周溝墓主体部



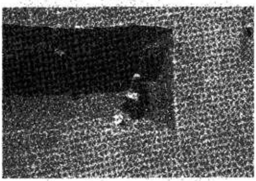
2号方形周溝墓主体部



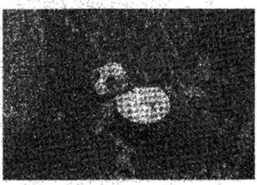
2号方形周溝墓主体部墓壙（粘土除去後）



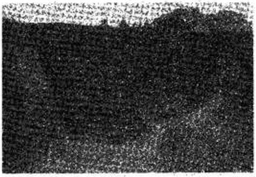
2号方形周溝墓主体部石棺材出土状況



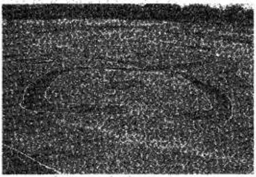
2号方形周溝墓遺物出土状況



2号方形周溝墓遺物出土状況



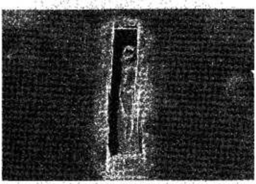
2号方形周溝墓周溝土層断面



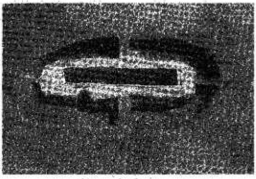
3号方形周溝墓

3号方形周溝墓主体部石棺検出状況

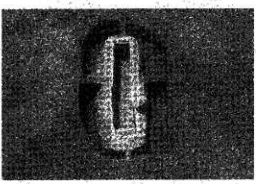
3号方形周溝墓主体部石棺検出状況
（粘土除去後）



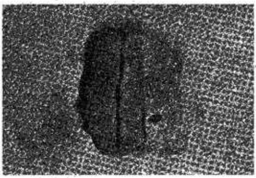
3号方形周溝墓主体部人骨出土状況



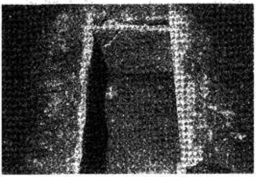
3号方形周溝墓主体部



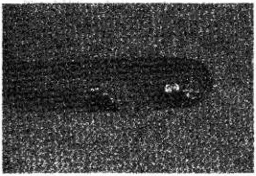
3号方形周溝墓主体部



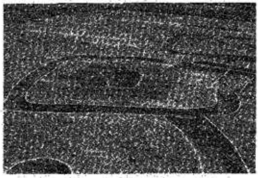
3号方形周溝墓主体部墓壙（石棺除去後）



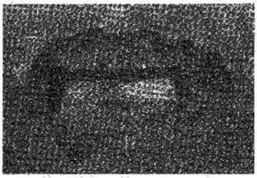
3号方形周溝墓主体部粘土枕



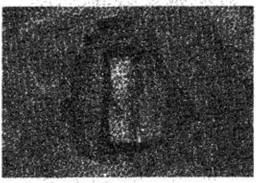
3号方形周溝墓遺物出土状況（陸橋部付近）



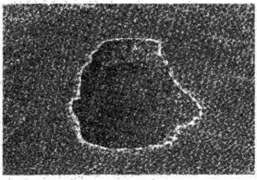
4号方形周溝墓



4号方形周溝墓主体部

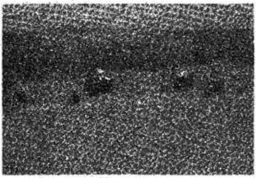


4号方形周溝墓主体部

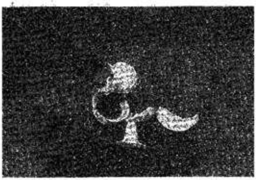


4号方形周溝墓主体部墓壙

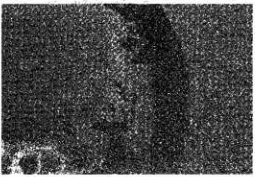
5号方形周溝墓



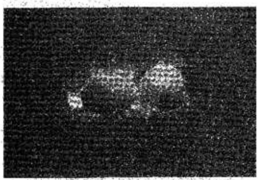
5号方形周溝墓遺物出土状況



5号方形周溝墓遺物出土状況

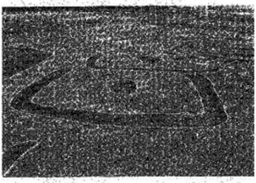


5号方形周溝墓遺物出土状況

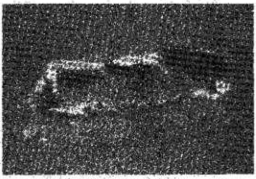


5号方形周溝墓墳丘上壺棺出土状況

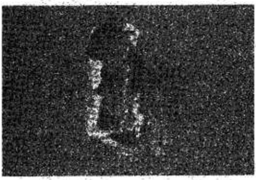
5号方形周溝墓墳丘上壺棺出土状況



6号方形周溝墓

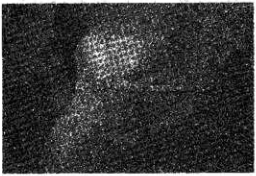


6号方形周溝墓主体部



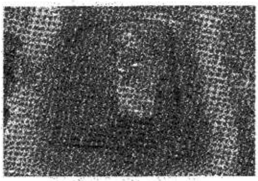
6号方形周溝墓主体部

6号方形周溝墓主体部墓壙

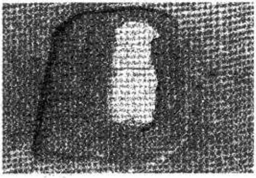


6号方形周溝墓主体部内鉄器出土状況

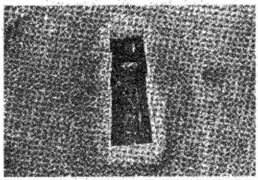
7号方形周溝墓



7号方形周溝墓主体部石棺検出状況

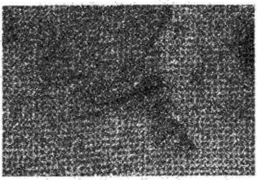


7号方形周溝墓主体部石棺（粘土除去後）

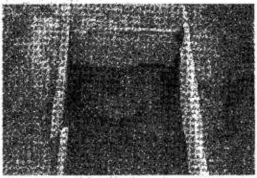


7号方形周溝墓主体部石棺内人骨出土状況

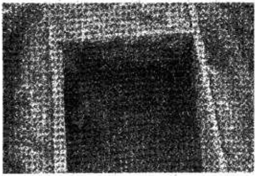
7号方形周溝墓主体部
石棺内人骨出土状況



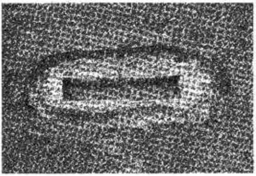
7号方形周溝墓主体部石棺内鉄器出土状況



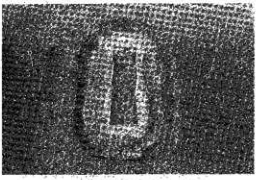
7号方形周溝墓主体部石棺内西側粘土枕



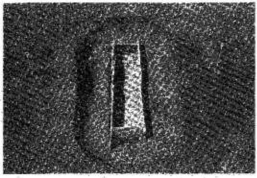
7号方形周溝墓主体部石棺内東側粘土枕



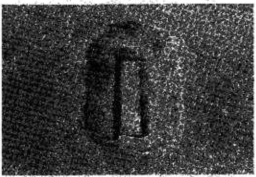
7号方形周溝墓主体部石棺



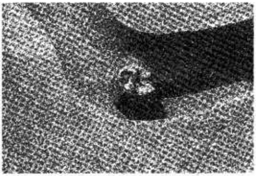
7号方形周溝墓主体部石棺



7号方形周溝墓主体部石棺（粘土除去後）

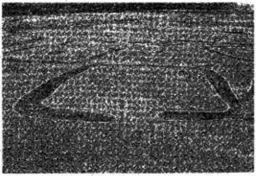


7号方形周溝墓主体部墓壙（石棺除去後）

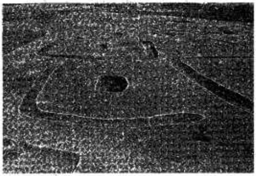


7号方形周溝墓遺物出土状況

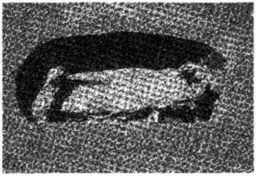
7号方形周溝墓遺物出土状況



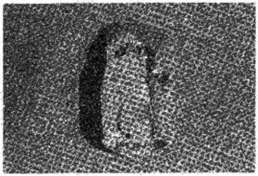
8号方形周溝墓



9号方形周溝墓

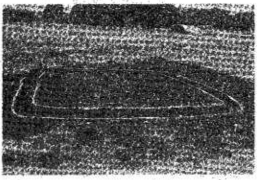


9号方形周溝墓主体部

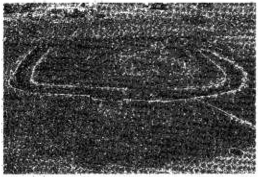


9 号方形周溝墓主体部

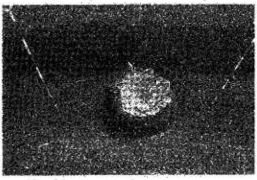
9 号方形周溝墓主体部墓壙（粘土除去後）



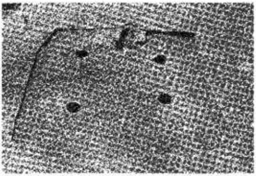
10号方形周溝墓



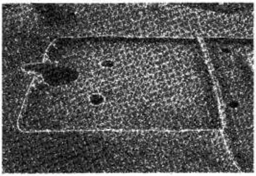
11号方形周溝墓



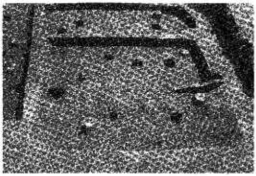
11号方形周溝墓遺物出土状況



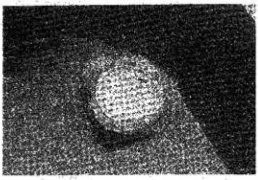
1 号住居跡



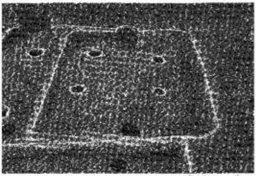
2 号住居跡



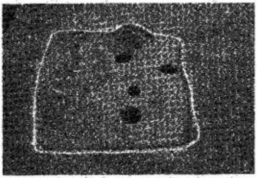
4 号住居跡内遺物出土状況



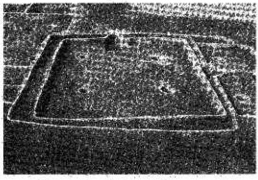
4号住居跡内遺物出土状況



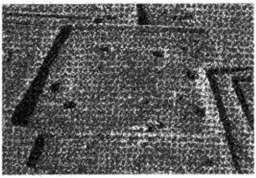
4号住居跡



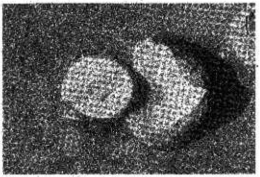
7号住居跡



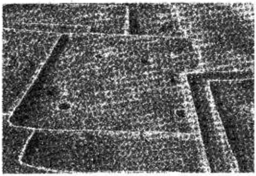
8号・9号住居跡



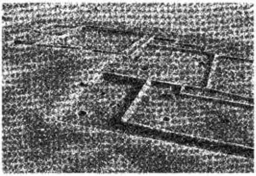
12号住居跡内遺物出土状況



12号住居跡内遺物出土状況



12号住居跡

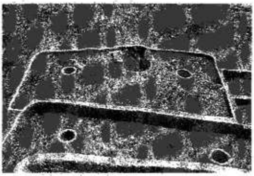


8号～18号住居跡切り合い状況

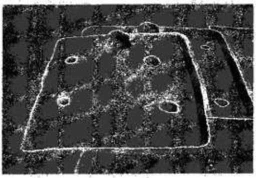
15号・16号住居跡

15号住居跡カマド

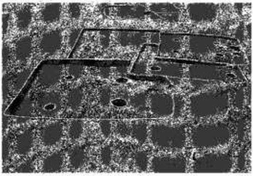
20号住居跡カマド付近遺物出土状況



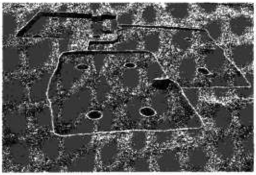
20号住居跡



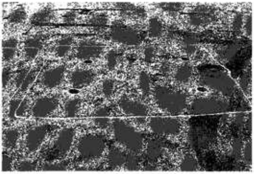
23号住居跡



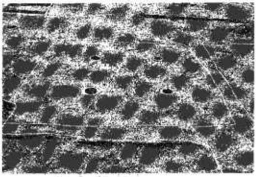
25号・26号・27号・28号住居跡



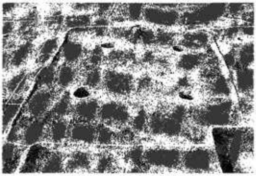
29号・30号・31号住居跡



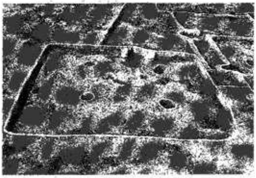
32号住居跡



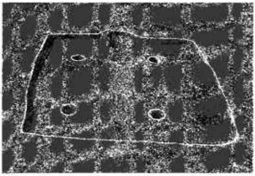
33号住居跡



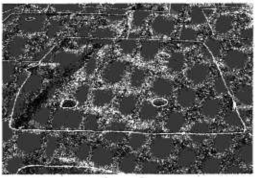
34号住居跡



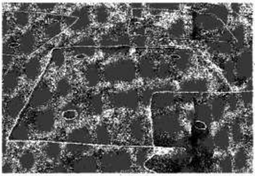
39号住居跡



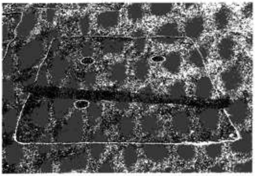
46号住居跡



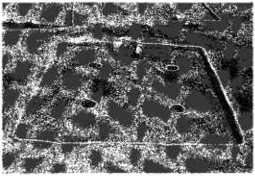
48号住居跡



49号住居跡



50号住居跡



53号住居跡

9−1

9−2

1/2

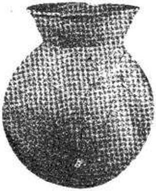
1号方形周溝墓主体部

10−1

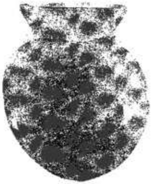
10−2

10−3

10−4



10−5



11−6

11−7

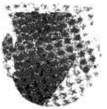
12−8

1/4

12−9

1号方形周溝墓

17－3


17－4

17－5

2 号方形周溝墓 1/4

5 号方形周溝墓 1/4

26－1

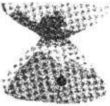
26－5

26－6

26－8

26－9

26－10


26－11

26－12

27－13

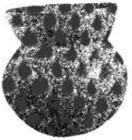
27－14

27－15

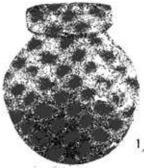
27－16

27－17

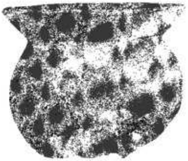
27－18


27－19

27－20


1/6

27－21


27－23 1/4

1/6

28－24

28－25

5号方形周溝墓

29－1

29－2

1/6

5号方形周溝墓墳丘上土壙

7号方形周溝墓

1/4

34－1

34－2

34－3

1/6

37−1
9 号方形周溝墓

1/6

40−1
11号方形周溝墓

44−2
2 号住居跡 1/4

46−3

46−4
3 号住居跡 1/4

47−7
4 号住居跡 1/4

53−4

53−5
8 号住居跡 1/4

55−2

55−3

55−7
10号住居跡 1/4

57−8

57−1

57−5
12号住居跡 1/4

59－3

13号住居跡 1／4

60－1

60－2

60－4

14号住居跡 1／4

62－1

62－3

62－4

15号住居跡 1／4

69－5

69－6

22号住居跡 1／4

70－2

70－3

23号住居跡 1／4

80－2

30号住居跡 1／4

82－5

31号住居跡 1/4

90－1

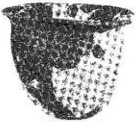
90－4

40号住居跡 1/4

92－1

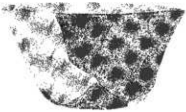
92－2

42号住居跡 1/4



101－1

49号住居跡 1/6



105－1

52号住居跡 1/4

109－3

54号住居跡 1/4

112－1
2号住居跡

112－3
2号住居跡

112－4
3号住居跡

112－6
5号住居跡

112－7
10号住居跡

112－8
8号住居跡

112－9
7号住居跡

112－11
31号住居跡

112－12
54号住居跡

113－16
7号方形周溝墓周溝内

113－18
8－M－23グリッド

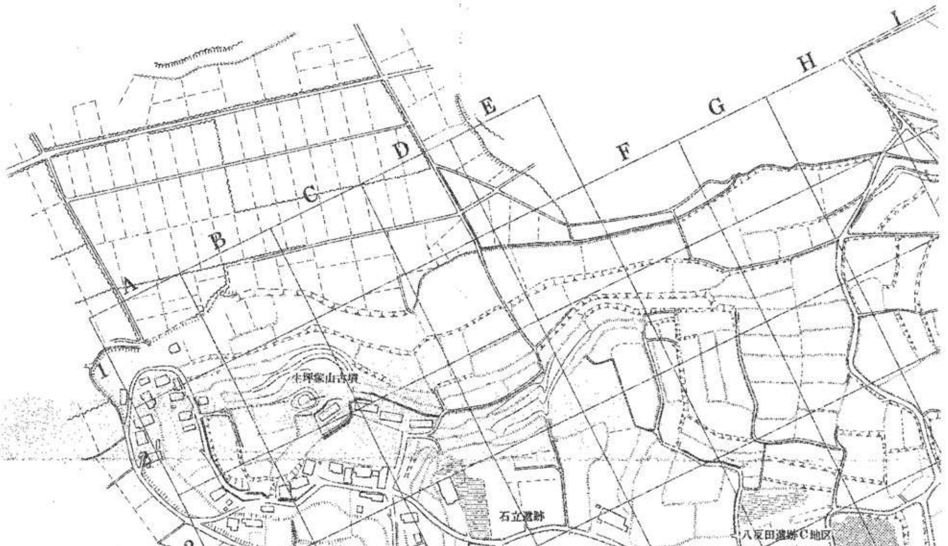
西合志町文化財調査報告第5集

迫原遺跡

1995年3月31日

発　行　西合志町教育委員会
菊池郡西合志町大字御代志1661−16

印　刷　（合資）橋本印刷
菊池郡泗水町豊水3515−1



A
B
C
D
E
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
7
8
X=-9.0
生坪塚山古墳
石立遺跡
八反田遺跡C地区
八反田遺跡B地区
八反田遺跡

平成元年度調査
平成２年度調査
平成２～３年度調査
平成３年度調査
合
志
川
J
L
M
N
O
9
10
八反原遺跡
八反畑遺跡
泊原遺跡
Y＝22.0
0
100
500m